

寛放録

十

昭和五年九月中浣起筆

特別  
イ4  
1919  
427



176692

完故録十

〇百二十年、前銀座の資生堂が、非産品として  
 銀座といふ青物と、花行し、以て右を、左を  
 右、つて、換へて、見ると、私か、産を、新産、此の  
 主業、つて、一、次のことか、出て、あるの、わ、気、を  
 つけて、見ると、高時の、自分の、俸、役、や、嘗て、其、全  
 くの、か、ハ、の、キ、り、書、わ、ん、と、ある、の、を、一、寸、教、る、の、い  
 かに、換、賣、し、と、今、計、を、勤、め、れ、人、の、子、が、今  
 刻、の、帳、簿、を、い、う、字、に、し、と、ある、の、つ、て、ある、から  
 魚、論、程、を、い、う、あ、る、お、お、さ、い、北、根、産、と、い、ふ

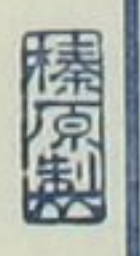
魚菜

ドイツ日本美術展出品

竹内栖鳳



古物に三万三四千もあつた。一行の記念  
品も見るべきもので、櫻南而古く昔あるてゐる  
もの。此古物を手に入れた南時、自分と銀堂  
とを就いて羨い涙の思い出を述べた。昔き敬  
くしたことがあつた。昔のてえた感のこころは自  
分とていふ所でも可うう交誼があつた。とこれ  
北をいひつゝが物とていふ仕方のよか。此氏或  
の知人から寄贈を受けた。南：位を  
払い漢文もしてていふ。前年昔いれよの肉  
漏らしたことがいくらかあつたから、昔南：位を  
めんを補ふことなす。



もう銀堂で煉瓦家屋の出来た。いふ  
らう一年前と云ふてゐる。勿論建築に着手  
したのは明治五年決む。表裏よりから裏あり  
一等二等三等と等級を別けて建築。築かお  
も最終の明治七年と云ふてゐる。如何  
も自分の出来た時、銀堂も出来た  
ホヤクの家屋があらう。捨ち外回、むち行  
つたやうな田舎書屋を教つた。煉瓦家  
かあつた。珍らしい決つた。其の二區を  
南時松堂と云つた。宮つら煉瓦と云ふのが通り  
名があつた。政府の五年の家屋を拵つた。その  
の載を示す。帝都の入口を文化的に飾

リといふ故、政府自らも任をせし、こんが為  
め、百兆萬の金を集りし、えんを年賦に拂下  
せする方法と、いふをある。百兆萬の投次、い  
ふ時とする、と、高き、あつ、い、と、く、譯、い、高  
時の、政府の、歳計、い、千、回、五、百、回、い、る、い、う、い、  
の、い、新、倉、の、一、部、分、に、い、ん、支、の、決、定、を、投、次、と、い、  
の、い、ん、の、保、し、自、人、か、の、決、定、い、年、一、と、初、め、と、い、え、  
時、の、い、ま、の、建、立、の、い、り、と、主、流、の、あ、つ、い、け、ん、と、い、  
の、り、と、任、ち、と、い、り、と、多、く、無、つ、い、や、う、と、い、る、煉、瓦、  
の、く、と、困、る、冷、へ、と、困、る、品、を、と、ま、く、と、尺、が、四、角、  
の、家、と、い、う、と、困、る、と、い、う、く、の、若、坊、が、あ、つ、

煉瓦

の、裏、の、り、の、煉、瓦、と、い、う、と、二、階、の、天、井、が、依、い、と、い、  
の、い、と、い、る、い、の、若、坊、と、い、あ、つ、い、や、う、と、い、る、と、い、  
追、々、と、寒、か、つ、い、が、寒、か、う、ま、で、い、ぬ、き、を、い、  
ろ、く、の、え、熱、物、を、出、し、い、こ、も、あ、つ、い、何、ん、と、い、  
と、灰、積、り、と、い、先、づ、い、の、家、屋、を、利、用、し、い、と、い、  
の、新、多、社、が、銀、行、と、業、を、い、人、に、と、い、も、其、の、一、例、  
と、い、え、る、と、い、る、と、い、る、と、い、る、銀、行、の、出、来、に、い、の、街、樹、  
の、い、か、あ、つ、い、か、自、分、と、い、ハ、ッ、キ、リ、と、い、記、憶、も、  
い、か、柳、が、街、樹、と、い、て、風、政、を、添、く、い、こ、と、い、ハ、  
較、と、い、る、と、い、る、と、い、る、大、害、災、の、あ、と、い、道、  
と、い、る、と、い、り、が、い、街、樹、と、い、定、め、り、い、  
の、と、い、る、の、風、政、を、破、る、と、い、と、い、て、是、派、く、

柳樹を保存して世に伝へたいと、丸心ふる市長に上申  
 し、是に對し市街樹を改めぬがてらぬ理  
 由の細かき説的の文書の存してあると見る  
 と、尚ほ柳樹の銀生界隈の人達か執着の  
 あることが想見される。柳蔭の一行も風政  
 と考へてもあること、確かある。今存して  
 いる品を指し以後世傳るものと見ても、皆柳  
 蔭や柳向が風政を多くする。今日もし亦あつた  
 と憶懐して銀生の生命の豊饒あること文士  
 といふ所の所望と云ふに、おのて柳樹の  
 ありが習慣といふより強ふることあることと  
 今更感せざるを得ない。



銀座の銀貨鑄造の所と意味するものもと駿河  
 の府中とあつたものと其後十七年江戶に移し  
 たり、銀座の點の今の銀座二丁目であつたこと  
 云ふ、是が寛政十二年の月、銀座所に移す  
 此譯は、實は江戶の町に遷る、若名のある  
 此の處を、本町と稱する、あつた銀座(今この處)  
 對し、新町所と云ふものが、あらうこと、  
 銀座と云ふものも、出まて、今この銀座が、  
 つかうもの、銀座の名も、四復中、なは、  
 幣きまのやうなもの、あること、ある。  
 併し、何も、銀の、母の中、金の、  
 を、徴するもの、金の、名、  
 を、徴するもの、金の、名、

称とすつたのも偶然かといふかも知れない。

自分が内部をまわるといふとみる、東京角のあり  
比日就社、漢委、形、今、おりのところとみる  
か、あそこが七と、向、鋼、急、の、建、つ、て、あ、る、洋  
務、務、即、ち、西、村、勝、三、が、始、め、て、洋、服、店、を、出  
し、比、高、い、西、洋、か、ら、仕、立、親、を、備、あ、て、未、比、が  
ま、比、時、勢、が、早、い、こ、ま、に、あ、る、比、敗、し、比、多、う、後  
の、治、十、年、又、日、就、社、が、移、つ、比、を、洋、服、店、を  
や、つ、比、名、残、り、日、就、社、の、今、井、部、う、あ、つ、比、所、  
あ、う、く、と、皆、あ、る、と、い、ふ、比、多、い、何、か、と、い、ふ、と、幅  
廣、ろ、の、棚、が、一、面、あ、つ、比、多、う、あ、時、自、分、か、ら、比、  
氣、付、か、る、う、比、が、あ、の、棚、の、一、く、洋、服、地



を、納、め、る、所、あ、つ、比、こ、と、が、う、ま、づ、つ、え、ん、し、  
自、分、が、上、京、ま、る、前、年、比、か、ら、目、跡、の、一、ま、の、二、階、  
馬、車、と、三、口、と、沙、を、湖、に、行、き、比、ま、あ、あ、つ、比、こ  
ん、を、原、語、其、ま、に、比、ラム、ニ、バス、と、い、ふ、比、車、其、の、  
英、國、製、の、こ、の、を、え、り、字、あ、せ、れ、と、い、ふ、比、障、二、ま、二  
台、一、か、ら、く、あ、時、の、道、路、の、形、を、う、思、道、道、で、あ  
つ、比、か、ら、地、合、危、険、ひ、も、あ、つ、比、を、差、止、め、え、  
比、ま、あ、か、四、五、車、が、あ、つ、比、と、い、ふ、か、ら、比、こ、こ、を、  
七、英、國、製、の、ま、や、つ、比、こ、い、い、。今、日、自、動、車、ひ、も  
ま、い、二、階、を、用、い、さ、い、の、比、当、時、ま、ま、用、い、比、こ  
と、を、思、あ、と、比、せ、る、流、名、に、完、形、多、一、次、機、が  
あ、つ、比、機、の、比、比、の、ま、と、言、人、比、の、比、階、下、の、取、者、を

つとめれば物の由良とよふ人と伊東八兵衛といふこと  
 とよふ、こんな次は城道馬車が起りて、よんへ自分も  
 かつてゐる。

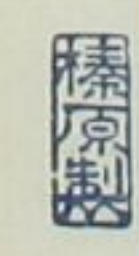
後美濃より前：松田とよふ料理屋のあつたこと  
 川つりやの思ひ出し書いしが、此の松田とよふを  
 を後人が思ひ出すより、下迄札が百番と達する  
 下迄者が有難く、叫び出すよんが後より編輯  
 局へもよく変へて、これ、あつたこと一日に二万位  
 此の叫びを多くすることがあつたといふことがあつたに  
 とびつゝ、松田の新橋寄り、今日百番彼のある  
 所は千歳とよふ下宿松田のことと書き入りの料理  
 屋があつた。こんな松田も料理記がふいとよふ評判

があつた。松田をひらき、あつたこと自分らといふ  
 七行かうとつたやうであつた。

松田の今無業の土地とよふは、昔一の方かえり  
 といふ文字の界の和名の人かあつた山、東へ京橋が松  
 田一目の東側、住して、木の京山七南紺屋町に  
 岳が、後、京橋のやせ、移つた。文政源へ、四等  
 者の山岸本由豆流が松田一目もあつた。平田馬鹿  
 七三河間堀と住し、木橋の、持平、中代、平信  
 の家があつた。大西、幸、南、橋、木、香、澤、よ、の、意、家  
 七松田、あつた。井上、四、大、板、崎、山、内、香、雪、七  
 赤松、住、し、北、川、真、顔、の、数、寄、河、岸、比、古、大  
 瀬、下、の、才、接、油、を、徳、文、子、の、子、町、の、あ、つ、た、幕、末

末時代に文に擬せしむる為永春の心の主人に於てある  
細木兼次郎(香表)の山域河山岸に住し  
明法よりてから山岸田吟秀や武治柳北(其香  
定)の出雲町にあり(此)の船生久米邦武の三十  
河地比橋本雅邦の末世所に益田香表の日記  
所に原風昭の三十石地河岸に永世香表を託言  
してあり(此)戸川安定も其の地を有する人がある。

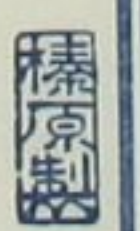
自分の墓の川に次銀座の店が人の目を惹いたり(此)岩  
谷松平の店がある(此)薩摩の店が此の山谷が此の山  
神の地を有しか(此)ト、此の山谷の一時盛んたる  
此の山谷の大地の宮内家から店が着改めの番税金三十  
萬圓を有し(此)書し(此)より(此)あり(此)薩摩の四産を有



ふからしき(此)島津家の(此)収と看改る用へ(此)こと(此)  
一時山魁とあり(此)山津家の収と異なり(此)あり  
と云ふ(此)事(此)が(此)次(此)あり(此)山谷の(此)十(此)が(此)〇(此)の(此)輪(此)部  
に(此)觸(此)る(此)指(此)し(此)ぬ(此)と(此)云(此)ふ(此)や(此)う(此)ふ(此)今(此)既(此)に(此)あ(此)つ(此)た(此)勿(此)論(此)が  
マカレ(此)である。主人の好色家と云つて(此)少(此)こ(此)え(此)妻(此)が  
十人(此)もある(此)と(此)云(此)ふ(此)が(此)店(此)の(此)畔(此)の(此)婦(此)人(此)が(此)あ  
ら(此)う(此)の(此)連(此)中(此)に(此)あ(此)る(此)と思(此)へ(此)ん(此)が(此)彼(此)れ(此)の(此)赤(此)丸(此)の  
洋服(此)を着(此)け(此)て(此)馬(此)車(此)に(此)乗(此)り(此)て(此)中(此)を(此)横(此)行(此)する(此)こ  
と(此)例(此)が(此)こん(此)ご(此)一(此)符(此)の(此)宣(此)傳(此)に(此)あ(此)つ(此)た(此)り(此)だ  
いつ(此)か(此)や(此)あ(此)れ(此)報(此)告(此)の(此)追(此)憶(此)記(此)に(此)自(此)分(此)の(此)関(此)係(此)の(此)あ  
ら(此)わ(此)る(此)店(此)を(此)い(此)ろ(此)く(此)寺(此)に(此)言(此)ひ(此)一(此)二(此)漏(此)ら(此)し  
と思(此)へ(此)ん(此)が(此)その(此)を(此)奉(此)け(此)る(此)南(此)錫(此)の(此)風(此)を(此)受(此)け(此)る(此)事(此)だ



こんの有るる菓子屋があるが、多々橋上なる西洋料理を食ハセル。其店の凡百も、今と申つて二階の惣室と書き、十畳室二つある。そこを梯子で下り、カキを置キ、お茶を振いた。お茶室が、ちよ西洋料理のよういのであると評判を傳へた。自分も機会を捉へておれ、此の店に出る計に、此の店に来た。この大抵、知名の士若くは名通でもあつた。此の店、此の店、振り入つて見ると料理は不精である。ソー、一ツ送ると思ふ。金の亭と云ふ小料理店が今の條を設けた。後ろの小路である。此の店が、頗る益穡の入口から直くと梯子で二階上りやうする。プロシヤ



リ、式の入込の割合一店にあつたが、僅か僅か上り上等の料理の店がある。よくよく見ると、此の店はおもく愛と飲んだことが、式回七あつた。銀行に寄ると、官舎の一角が、式軒もある。此の店は、新橋寄りの江木官舎の一角が、式軒と一角である。心づておれ、此の店を、自人の此官舎の一角を撮影した。此の店、早稲田の一角を、私の友人を描いた。此の時、洋画家の江木の主人を伴へて来た。自人の此の店、深窓を式軒と、撮影した。此の店、時分を、私の友人の店と、呼んだ。此の店、八官舎の一角を、今も、撮影した。此の店、自人の此の店、初め、彼の店

い時計を此店から賤めれば、高時のままに有るが、金の  
時計が流行の時、自分か、蓋のベナクするや  
ふのが、極むじ、部厚の蓋の時計を此店から  
獲に、まん、三、四、五、の、この、あ、た、か、可  
り、重量があるのか、帯が、自然、無、下、不、使  
か、ある、と、こ、こ、に、鎖、り、の、者、い、の、を、世、帯、に、二、又、三、を  
捲、く、や、う、と、い、と、扱、か、し、た、が、ま、ん、ま、い、の、が  
無、い、を、特別、と、他、つ、て、世、帯、の、た、の、も、此、店、が、あ、つ、た、  
今、の、時、代、お、く、ん、の、時、計、は、早、大、か、ら、自、分、の、印  
分、を、さ、ら、し、の、記念、品、あ、る、か、ら、今、も、保、存、し  
て、お、く、る。



社領  
中石

藤原製

○前書に献題のことも如辛乙にて置い比か更  
ら實際の例を少しく讀べて見ると、日本の例  
として何人も見えず思ひあつたのは、頼山陽が日  
本外史を樂翁公に献したることである。日本外  
史の首巻に「公に献するの書が全部收めてあ  
る」と云ふこと

不圖却使帶閣下之命、來就裏家、取  
所著私史、欲賜觀覽、礼意殷勤、愧悚  
交至、夫裏不敢求於閣下而、閣下求  
於裏、裏之榮大矣、復何所媿而辭  
避乎

えら句合に山陽の氣取つてゐるが、公から求



めらして七、献したることの變りかゝるの如  
つて、えら勿論、テバケレシヨシの一例である。

右のいふ如く餘り人の氣のつらさの傳席間  
か元亨の釋書を著して時天子に献したる  
こと、天子の即ち後醍醐天皇である。  
席間か元亨二年八月十六日此の書を献す  
ることと上表し、その全文が釋書より取  
めてあるが、その中を左の如く云ふてある

如是至山陰不敢私蓄、敬上陛下、其  
為借、故耳、云々、降中書、得受  
官校、若有可采、入大、抱行天下、於  
戲、璠、瑞之、玩弄、王者之事也、云々、夫

唯翰頁而已、然則此書之流播陛下之  
任也云々

と云ふは、稿本を献上し、官校を任ぜらるる上  
流し採らるべしと云ふは、大抵に納めたるべく天  
下に傳播せしめん、傳播の旨に陛下の任する  
と云ふてある、之を献上書の若くは例と云ふべ  
可也、

江戸の大日本史七巻附録、道 献本稿本より、卷  
首より道大日本史表の全文を収め、別に  
取巻の次才を叙し、一文中を載す、又、  
撥入の文化七年冬大日本史刻本一函、若  
しく表文と添く京師に送り、関白藤公



の内、寛文十三年十二月朔日藤公より清涼院に  
備ひ白皇上の嘉賞を得たることを記し、聖  
旨に朱摺し、一巻の冒頭、附たる即石の  
如し

專據四史傍考群書、為一大部之書、  
昭代之美事、堂構之業、勤苦可想

とあり、聖旨も七刻し、道献本の稀な  
例とすべし

江戸の道献本、一、うて、是れ、徳川光圀リニ編  
了る所の禮儀類典五百十卷、貞享三年  
秋、編纂を始り、成り、後、右大臣藤原  
公敏より、奏覧、及び、此の書、各

ハ勅賜のよのとす、進献本は書名の勅賜あり  
一介あり

又水戸の光圀公が弘仁に於て家記に至る間の遺什  
を若山正三の奥に採り編輯三千巻とす

湖下 献一は扶桑拾葉集も亦勅賜書名の才二  
例とす

陛下に進献の書は此等止まらざらん前例を以つ  
て且らく是よりし、更々儒臣が幕府に献書  
の例を安まらざるに、少くも例なきは、  
較り若名の一例と承りて止めん、即ち  
林羅山が正保年中、時、將軍の爲め、日本紀以  
来の歴史を参考し、おを削り要を取らん



開闢と神代遺を拾ひ、宇多の一朝を以て  
賀奈進四十巻とす、又世大和守は就て献  
呈したるもの本朝編年録と稱し、これが羅  
山及び後林春高後の篇を以て進献する  
を、~~賀奈進~~賀奈進十巻の書名を改めて  
本朝通鑑とす、~~賀奈進~~賀奈進の書名を改めて  
す所とす、~~賀奈進~~賀奈進の書名の一例とす。

外回りに於ても進献の例素より少く、我日  
本に關する圖書も、就て二三の例を挙ぐるこ  
とを得、~~賀奈進~~賀奈進の例を以て、日本紀行のタイトンペ  
ルと展べ、~~賀奈進~~賀奈進の例を以て、  
千六百四十五年佛圖が譯したる、~~賀奈進~~賀奈進の東洋紀行



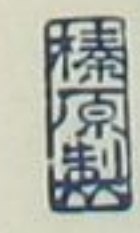
のデグアイン、エメデー、巻首、進献の意味が  
刻さんである。巻末の進献の為、心つれ、二本  
の目録の教種載りもある。内、二本沙、あ、全集  
といふも又くしてある。

盲偉人高氏

羣書類從開板ノ始初 目錄ヲ印行シテ世ニ頒

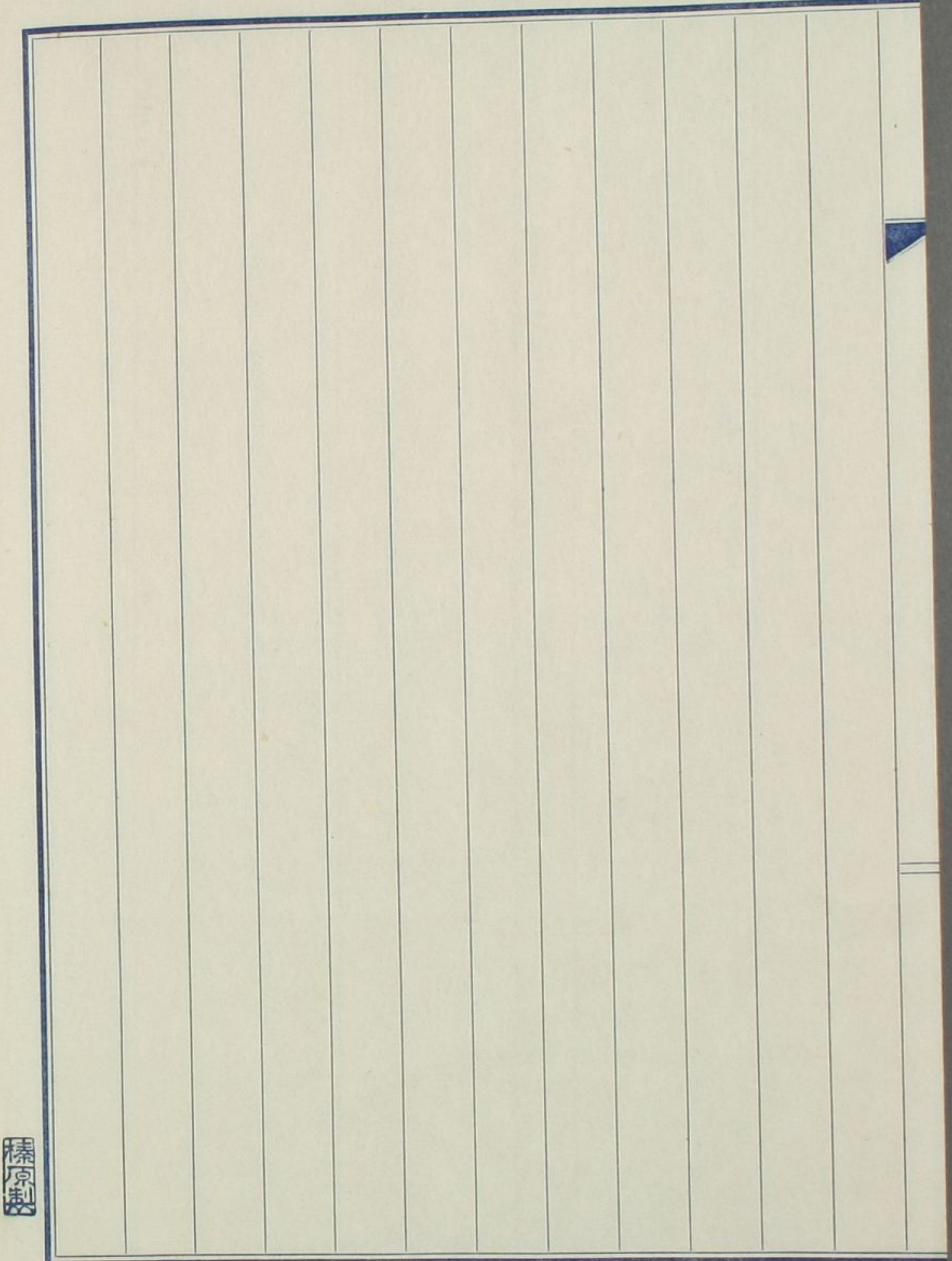
千シ時表紙ノ裏ニ記シテ云フ

一此書の趣意は本朝の古書多くありといへど  
も世々の兵亂度々の大火につきて過半亡失



す今其幸に残れるもの一千二百七十三種集  
めて六百七十冊となし梓に上て以て不朽に  
傳んことを思ひ去安んいくまより 天満宮  
に祈誓して毎朝鹽味をたち般若心經百廿卷  
を讀誦し開板の速にならむことを収がいの  
み





榛原製

# 稀書複製會々報

第六期

第廿三回

昭和五年  
九月

第六期 第廿三回複製本

相撲之圖式

六 一冊八丁

本圖式はこれで完結しました。解説は曩に本紙上に掲載しました。

新文字繪づくし

全 一冊十丁

本書は思ひつきの機警を愛賞すべきもので、解説と照らし合せて見なければ、今日では興味の薄いものです。解説は脱稿して居りますが、今回は紙面に掲載の餘裕がありませんから、次回に發行する『稀書解説』第六編のうちに收めることにしました。元來此の黒本は上下二冊のもので、若樹文庫所藏の原本が合本になつて居て、上卷の外題紙が缺けて居ましたから、それに倣ひ、且つ下卷の題簽から「下」の字を削つて複製しました。

## 複製圖書解説

東榮戲臺之圖 市村座

大判一枚

(原圖、林若樹氏藏)

『東榮戲臺之圖』と題するもの二種あり、其の一は江戸の劇場中村座全景圖、其の二は同市村座全景圖にして、今回複製したるは後者なり。中村座全景圖は先年本會に於て複製を試み、之を軸物仕立とし百部を限定して希望者のみに頒布せしことは會員諸氏の多數が今尙記憶せらるゝ所ならんと信ず。

前記兩座の全景圖は其の畫風も其の版式も其の面積も全く同一なり。即ち幅約二尺、長さ四尺に餘れる一枚摺なり。板行の地圖には寛永、寛文の頃より夙に一層巨大なるものありしも、それ等は二枚乃至數枚の紙に印刷して之を繼ぎ合せたるものなり。(本會にて曩に複製したる寛永及び明曆の江戸圖は便宜

上一枚摺にしたれども原圖は然らず。此の如き大面積の一枚摺を今より百六十年前の、木版技術尙ほ進歩せざりし明和年間に墨色鮮やかに摺りこなし得しことは今日の専門家の驚嘆する所なり。

明治の初期頃までは五月幟の用に充つる爲めに鐘馗などの繪を大形の一枚摺にすること行はれ、又佛畫には襖大、或はそれ以上の一枚摺ありて、それ等の印刷に用ふる大形の木版を「まないた版」と稱したり。此の名稱はいつ頃より起りしか未詳なれども餘り古きことにはあらざるべし。又その由來について確説はなけれども、版木の反りを防ぐ爲めに裏面へ二本の横足を取付けたる形が蒲鉾屋などの大組板に似たる故斯く呼ぶとの説あり。或は然らん。劇場全景圖の板木は今存在せざれども組版なりしと推測するの外なく、いつしか「組版劇場圖」と通稱せらるゝに至れり。

さて本圖は明和元年十一月市村座に於ける顔見せ狂言の舞臺面及び見物席の老若男女の動靜、場外の光景等を精細に描き、之に周到なる筆彩色を施したるものなり。演劇研究の資料として特に重要視すべし。

前面の横格子を設けたり。今日まで「うづら」といふ名稱の残れる所以なり。

さて下部の表看板に移らんに、櫓幕の直下なる繪看板は所謂「櫓下」と稱するもの。又その左りの『若木花須磨初雪』は「大名題看板」その又左りなるは「小名題看板」右の初めのが「淨瑠璃看板」。その位置は時に近世のと相違せるもありき。次ぎに櫓下の諸看板の配置の中村座のそれと多少の相違あるは蓋し各座に特殊の慣例ありしに依るものゝ如し。鼠木戸が左右にあるも近世と異なることなし。木戸の中央に巻物を持ちたる男と聲を發してゐるらしき男とあり。これらは所謂「木戸藝者」にして、名題役割を讀みながら、當の役者の聲色をつかひ居れる體なり。鼠木戸の右の方は東棧敷の入口、左の鼠木戸の左方に簾の見ゆるは仕切場等々。これらも大抵近世の同じ。

本圖の登場俳優に關しては、之を『歌舞伎年代記』と圖を比照すれば明かなり。舞臺の木戸外の白拍子は役名ぢだ卷（尾上松助）、その左系商人は本名越中治郎兵衛（中村仲藏）、右手なる惣髪は平時忠（澤村

きものなるが故に、主として伊原青々園氏が曩に雜誌歌舞伎の紙上に發表されし考證によりて左に説明を試み聊か私見をも加へんとす。先づ舞臺は破風造りにして且つ橋掛りあり。當時の構造は尙能舞臺の形式を脱せざりものなることを證す。但し別に花道もあり。左右の大臣柱には狂言の大名題と小名題とを記さる板を掛けたり。是れ其頃の慣例なり。舞臺の背面に釣棚の如き高き所ありて、そこに見物の坐せるは所謂「羅漢臺」といふ見物席にして明治の初めまでありしものなり。左方の簾の内を囃子方の居場所としたるは今とは反對にて、京阪の劇場と同式なり。土間には花道の外に右方にも歩み板あること現今の通りなれど、座席は未だ櫓形に區劃されざる體なり。仕切櫓の端緒は明和三年よりなり。即ち見物の希望に任せ、繩張して座席を區劃せしに由來す。而して當狂言が明和元年十一月の顔見せなれば仕切櫓はなかりし筈なり、始めて方四尺五寸を一櫓と定め、見物席を一櫓と定め、見物席を櫓形に仕切りしは明和九年の新築成りし時なり。本圖中、左右上下に棧敷あるうち、下の棧敷は恰も鴉籠の如くに

音右衛門、花道の花籠を曳けるは花籠の與一平、實は尾形三郎（尾上菊五郎）、同じく花を擔へるは花賣おすみ（芳澤崎之助。崎之助は此興行に五郎市と改名せり。）

原圖の版下は誰人の筆に成りしか未だ考へ得ず。明和時代の第一流畫家中には是れぞと推定し得らるゝ者なけれども、其の手腕の決して平凡ならざることは明かなり。殊に構圖の巧妙は驚嘆に値す。劇場内外の情景を一圖中に收め、七百有餘の人物を自在に取扱ひ得たる技巧は尋常の手腕の能くする所にあらず。實に當時に於ては稀に見る所のものなり。本圖刊行以後にこそ墨摺に、色摺に、或は浮繪に、錦繪に、挿畫に、劇場の全景を描きたるもの少からざれども、本圖以前には未だ類似のものありしを聞かず。

本圖を複製するに當りて、墨版は林若樹氏所藏の原刻圖に據りて彫刻し、土佐産の大判和紙に之を印刷（手摺）し、筆彩色は松廼舍文庫舊藏圖の模寫圖に倣ひて施したり。墨色、色彩共に原刻圖に比して著しき遜色なきを信す。

大正の大震災までは、原刻の『東榮戲臺之圖』の傳存したるもの四幅ありしが、いづれも軸物仕立なりき。其の一は松廼舎文庫所藏の中村座圖にして、これには蜀山人自筆にて圖の上部に役名と俳優名を記しありき。其の二は同文庫所藏の市村座圖にして、これは曲亭馬琴の舊藏品なりき。惜いかな、兩圖とも震災に罹りて亡び失せぬ。其の三は某版畫店所藏の中村座圖にして、當時價五百圓と稱し、久しく賣れざりしが、後に一紳商に買取られしともいひ、或は横濱の外人に賣りたりともいひ、今は行方を知らず。その四は林若樹氏所藏の無着色市村座圖にして、これは歌羅巴大戦亂の直前に獨逸國政府の委嘱によりてライプツヒ市に於ける印刷工藝博覽會へ出品せられ、本邦の出品物は悉く兵火に焼かれ若しくは散佚したるものと見做されしが、平和克復後四五年を経て舊主の手に復歸し、本會は之れに據りて今回復製することを得たり。而して間接に松廼舎文庫舊藏圖に依りて着色を補ひ得たるも亦奇縁といふべし。松廼舎文庫舊藏二圖のうち中村座圖は曩に本會の特別刊行として完全にこれを複製し、市村座圖は

夙に某氏によりて複製されたりしが憾むらくは、その幅三寸程も寸法を縮め、看板の字體を書き改め、且つ石版を以て唐紙五片に印刷し、之れを繼ぎ合せたるものなりき。是れ本會が新たに如實なる複製を試みて其の眞面目を傳ふるに努めたる所以なり。

### 第七期書目追加

上中下三冊

野郎古た、み

一冊

來る十一月開始する本會第七期複製圖書の豫定目錄は、前回の本紙上で發表しておきましたが、其後に至つて右に擧げた珍書二種が複製を許されることになりました。

『せつきやうかるかや』は京都現住の文學博士藤井乙男先生の御愛藏に係る寛永八年の刊本で、淨瑠璃研究家は勿論一般愛書家が一覽を渴望して止まないものであります。本會多年の懇請を容れて特に複製を許されました。上中下合せて五十枚、挿畫には丹緑二色の筆彩色があり、本の形は安田文庫所藏の古

淨瑠璃即ち半裁本よりも稍大きく、半紙本よりも稍小さく、寛永二年刊行の丹緑の横本『高たち』ともちがひ、形式からも内容からも貴重な研究資料であります。

『野郎古た、み』の原本は東北帝國大學附屬圖書館の所藏ですが、本會の趣旨を諒として複製を特許されました。總紙數廿五丁の内挿畫は見通し七丁あり、寛文年間の刊本です。役者評判記年表に其の名も見常らない珍本で野郎大佛師と並んで此の方面の双壁です。

### なぜ第七期まで複製を繼續するか

十年一昔を本會は疾くに過ぎて今將に第七期に進まんとして居ます。愛書趣味の共鳴から同人の間に假初に企てられた事業が、斯様に永續しようとは思ひ設けなかつた事でありますが、幸ひに期を重ねる毎に本會の努力は廣く且つ深く識者に認められ、時代あぐれの木版刊行が却つて緊切なる時代要求を見ることがになりました。本會が第七期繼續を敢行しま

すのは從來の惰力に引摺られて餘喘を保たんとするのではなく、又同人間の道樂三昧に原因するのでもありません。實に現下の狀態が此の事業を中止することを許さないからであります。其の止むを得ざる理由を左に列擧して見ます。

#### 一 複製材料の向上

第一に私共の意を強くさせたのは、各期の複製書目を通覽して其の水準がだん／＼向上して行く事があります。創業當時に於ては見聞も狭く信用も薄く資力も今より一層乏しくて、一期間の複製書目を初めに豫定する餘裕が無く、材料を獲るに従つて複製を急ぐ状態でありましたが、第一期よりも第二期、第二期よりも第三期と漸次信用加はり、稀世の珍本も容易に複製を許される程度に進みました。第七期に至つては第六期よりも一層嚴選を経たもので、全く一粒選りと申しても決して誇大の言ではありませぬ。前回の本紙上に發表しました豫定目錄によつて御承知の通り、これは平凡だと思はれるものは一、二ありませぬ。赤本にしても『枯木に花咲せ親仁』と『五百八十七曲り』どちらも名前から面白く勿論

逸品です。黄表紙の『蝦夷退治』は稀に見かけるにしても題簽が三枚揃つたのは容易にありませうか。寛永より明暦までの古浄瑠璃本は近年世間に知られたのが寧ろ奇蹟であります。藤井博士の『説經刈萱』は専門家と雖も其の名を聞いたばかりで殆ど實體を見て居ません。『芝居百人一首』、『野郎大佛師』は故渡邊霞亭氏舊藏中の双璧、東京帝國大學圖書館が復興後の整理に惟れ日も足らざる繁忙中、特に複製を許されたのは無比の恩典として人の驚嘆する所です。前者は勿論浮世繪界の巨匠鳥居清信の傑作、開板當時禁止を嚴命されたもの、複製發行の一日も早からんとこそ愛書家から續々催促されて居ます。大高子葉撰の俳書『二つ竹』は元祿十五年の五十部限定の稀本だと云はれて居ます。『俳諧名物鑑』はさしも名高くて三冊揃ひを見受けず、『江都二色』の完本は玩具研究の第一人者清水晴風氏すら遂に見られなかつたものです。繪入笑話では『わらいぐさ』が最も古く、繪入遊女評判記では『難波物語』が一番古い。稀觀の狂言本では『平安城都定』と『粟島金龍瀧』、井原西鶴自筆畫の刻本としては『高名集』大阪の酒

られない事が證明されます。又現存の珍書は速に複製しておかなければ或は紙魚の爲に或は風水火の爲に毀損消滅して影すら見られなくなる事は往年の大震災を回顧すれば的確に胸を刺します。『剝野老』高たち『傾城王昭君』の如きは、我が複製本において其俤を窺ふことが出来ません。

### 三 彫刻印刷の衰微

機械力による製版術及び印刷術は年々進歩する一方ですが、小刀一本による木版彫刻とバレン一挺による手摺は月々衰微するばかりです。本會專屬の彫刻者も印刷者も幼時から眞劍の修行を積んで第一流の技術家であるのみならず、十餘年の経験を重ねて複製蘊奥を究めて居ます。複製は原刻の再現ですから、扶術家自身の癖と時代を離れて過去の時代相を表示する責任があります。頭腦が明敏而かも忠實な人でなければ遂行し得ない割のわるい仕事です。本會の專屬者は幸ひに此の難點をよく理解して居ますが、憾むらくはいづれも還暦を過ぎて技術の後繼者がないのみにならず、他に計畫する人があつても技

落本では『粹通鑑』、勝川春章畫の『色葉八卦』、岡場所物の『三十三番無駄所』など悉く出色のものであります。

此の如き貴重書や稀觀本の複製が許されるに至りましたのは、十餘年努力と誠意によつて信用を厚くした結果ではあります。また藏書家諸氏に於ても複製の必要を愈々痛感せられた故かと考へます。出版界の過去を顧み現在を察しますと、如何なる叢書も未つぼみとなるのが常例であつて、本會の複製の如くだん／＼水準を高める實例が他にありません。本會が時代の趨勢に鑑み藏書家の好意に感激して、此の事業を中止し得ないのは偶然ではありません。

### 二 古書の缺乏

明治時代の活版本ですら今では珍本扱ひされて居ます。況して徳川時代中期又は其以前の古書は日に月に散佚し行くばかりで、近頃古本屋が目録を發行するもの數十に上つて居ながら珍書らしいものは幾點も見かけません。實に寥々たる有様です。これに依つて今日では如何に高價を忍んでも珍書を購ひ得

術者の今後の養成は絶望と信じます。

### 四 和紙の目前の運命

複製を活かすか殺すか、用紙の良否が大にそれに與つて力があります。然るに和紙の抄造法は年々變遷して固有の手漉の性質を追々失つて行きます。色は白く洒され纖維は細かく磨き潰されバルブさへ交せられて、見た目には綺麗ですが、質の弱いこと眞直ぐに裂けない位です。本會で比較的良好な石州半紙や細川や大半紙を買入れる爲には半年前から準備して一通りの苦心ではあります。既往の経過から考へますと、數年後には特別に工場を設けても材料も楮を得られない事にもなりません。本會の事業も第七期を大尾とするのではないかと考へるのも一概に杞憂とは申されません。

### 五 忙中閑日月の必要

圓本の流行、全集の跳梁、大量生産でなければ出版界の生存競争に耐へて行けない今日に在つて、生産が緩慢で、資金が固定して而かも豫約者の僅少な複製事業に従事するのは、餘りと云へば時代を知ら

ない閑事業の如くにも見えませんが、併し動中の静、忙中の閑日月は永久に人間に必要ではありませぬか。晝も夜も快速力の尖端を走るのは人生を樂しむ道ではありませんまい。能樂がジャズ、映畫の間に光つて静寂なる藝術的價値を失はないと同様に、古書を不朽の生命あるものとして、其の複製を本會の天機と考へます。

### 第六期既刊書目

- 第一回 吉利支丹退治物語上 繪本玉かつら上
- 第二回 吉利支丹退治物語中 今様職人盡百人一首
- 第三回 宮城野上
- 第四回 繪本玉かつら下 吉原たんか上下
- 第五回 宮城野中 本田善光日本鑑繪盡
- 第六回 からくり訓蒙鏡草上 輕口大矢敷
- 第七回 しだれ柳
- 第八回 からくり訓蒙鑑草中 宮城野下

- 第九回 吉利支丹退治物語下 俳諧一字題地口
- 第十回 鬼利至端破却論傳上 磯訓蒙鑑草下
- 第十一回 團扇繪盡
- 第十二回 鬼利至端破却論傳中 金龍山淺草千本櫻上
- 第十三回 大阪俳歌仙 淺草千本櫻下
- 第十四回 鬼理至端破却論傳下 相撲之圖式一
- 第十五回 年玉日待噺 相撲之圖式二
- 第十六回 繪本踊づくし 相撲之圖式三
- 第十七回 寛永江戸圖 相撲之圖式四
- 第十八回 八百屋お七物語 相撲之圖式五
- 第十九回 寶合の記
- 第二十回 小男のさうし 勸學院物語上
- 第二十一回 十才子明月詩集
- 第二十二回 東榮戲臺之圖
- 第二十三回 新文字繪づくし 相撲之圖式六

大韶字象  
玄華亭人

美婢を以て佳書に易ふ

遜志堂雜鈔

嘉靖中朱吉士大韶性好藏書尤愛宋時鏤版訪得  
吳門故家有宋槧袁宏後漢記係陸放翁劉須溪謝  
疊山三先生手評飾以古錦玉籤遂以一美婢易之  
蓋非此不能得也婢臨行題詩於壁曰無端割愛出  
深閨猶勝前人換馬時它日相逢莫惆悵春風吹盡  
道旁枝吉士見詩惋惜未幾捐館

蓋此れに非ざれば得る能はずとあるから其吳門

標原製

藏書中の書珍若干を選び

舊家の主人は定めし支那の森川竹窓だつたのだ  
うい森川はわざと  
を捺し下珍書を間もなく一妓に易へてしまつた

自ら刻して

ながら

賣拂つて

一妓に易へてしまつた

森川竹窓

圖書祭

沈士元祭書圖說

黃君紹甫家多藏書自嘉慶辛酉至辛未歲常祭書  
於讀未見書齋後頗止丙子除夕又祭於士禮居前  
後皆為之圖夫祭之為典且鉅博矣世傳唐賈島於  
歲終舉一年所得詩祭之未聞有祭書者祭之自紹

蕘園漢翁  
都子等號  
アリ

千里名廣圻  
以字行號淵  
蘋

甫始

黃丕烈字紹武乾隆戊申舉人喜藏書購得宋

刻百餘種學士顧純顏其室曰百宋一廬

葉昌熾云乾嘉以來藏書家當以先生為一大

宗當時顧千里為百宋一廬賦近潘文勤師刻

1979 京都山大學出版部

士禮居藏書題跋記六卷及門江建霞太史又

刻續錄二卷訪百宋遺聞者此其淵藪矣先生

得一奇書往往繪圖徵詩有得書圖續得書圖

藤原

No. \_\_\_\_\_

再續得書圖今皆散逸其名之可攷者曰襄陽  
月夜圖得宋刻孟浩然詩作也曰三徑就荒圖  
得三謝詩作也曰蝸廬松竹圖得北山小集作  
也余所見元機詩思圖為得咸宜女郎詩而作  
也其所輯所見古書錄亦無傳

受書と六字の名號

鐵琴銅劍樓書目

宋本穀壤集笑川藏書卷三冊首空葉有笑川以血  
書南無阿彌陀佛六字題其後云乙巳十一月得之

愛不能釋以血書佛字於空葉惟願流傳永久無水火蠹食之災

清張笑川名谷鏡燮之子娶姚氏名琬貞號笑閣

燮字子昭文人

○偶去田草穢の近又偶華を後志中  
養蘭の法一則あり、倣ふに效の有無を  
験する可なり

養蘭法冬日用混を胎賦湯行三四

標原製

病者、澆洗極少、春夏秋皆可、澆不復  
用他肥、陳湫花鏡養蘭法久不溼  
此法能善過、乾亦傷、胎賦湯隔八  
九日、一澆須燥溼得所、右戸田隠士甚  
所傳、隠士執蘭數十年、一依此法、去  
冬、昭高田氏貽余盆蘭、用此法果蕙  
蕚、至春如茂云、

○佳書珍籍、圃地之就、凡此後、後山市塵紛  
囂の間、鞠長す、分体可し、勢城市、勢枯  
淡の電、勢余、勢後書、勢八、勢京、勢花  
し、勢吉、勢云、勢山、勢而、勢未、勢比、勢人、勢を、勢躬、勢行、勢以、勢光



此輩の事例を知ると、近史寫實井上の世間書  
の逸事と銘す、蘭台、即ち佳書に中心を  
入也

井蘭其通先生性度蕭曠、不嗜名利、癖  
好山水、仕備前州文學、每歲告休、坐湯于  
函関山中、其家宰尤之曰、子每歲坐湯、  
有何疾、先生曰、無他、必欲坐湯、是病、  
文而書畫、湯始來、先生以二十金、購得  
嘉曰、如此類書、豈城市中、容後邪、  
又乞休、推之、送函山中、快談批點、而信  
云、



〇五神人の名人、梅其遠、かゝる淡島、冥月の畫本  
を字のせも、今より、落とも、爲す、畫の中央、佛  
を描き、内空、多くの鬼を圍す、余の孫  
孫を思ひ、出さず、書す云々、地獄其天書、  
總是閑家具と。

〇世に、畫道の畫中を、誇つて、か、決して、因り、あ  
れ、さういふ、山を、よ、川を、よ、い、か、似、寄、う、い、あ  
る、も、決、し、ま、す、か、同、じ、か、ま、い、人、間、も、  
も、又、誇、る、大、体、似、て、あ、る、細、目、に、松、を、決、し、て  
同、じ、び、る、の、人、面、を、以、て、異、な、る、確、例、の、と、こ、え  
人、心、の、同、じ、か、ら、其、面、の、如、し、と、ま、む、云、え、心、の  
同、じ、か、ら、せ、る、こ、と、も、申、す、ま、む、さ、る、の、尚、ほ、細

目：靴を脱ぐに、掌裡の補助や指の紋も萬人  
萬枚ある。こゝ不<sup>と</sup>個人<sup>的</sup>のこゝある。と  
こゝ手の平も見て運命を判し、指紋  
を見て思<sup>ふ</sup>鬼や去<sup>る</sup>を卜し、さうすることゝ  
くから、行<sup>は</sup>ん、其<sup>の</sup>限<sup>の</sup>個性<sup>の</sup>表象<sup>と</sup>して  
た<sup>ら</sup>くから印の代り、誓紙<sup>と</sup>さ<sup>ら</sup>は<sup>な</sup>す<sup>の</sup>手<sup>の</sup>筋  
を肉<sup>が</sup>捺<sup>す</sup>ること<sup>も</sup>あり、実印<sup>の</sup>代り、押  
印<sup>を</sup>捺<sup>す</sup>ること<sup>も</sup>あり、今<sup>も</sup>裁<sup>判</sup>所<sup>や</sup>刑務  
所<sup>に</sup>行<sup>は</sup>ん<sup>て</sup>みる。世<sup>に</sup>何<sup>も</sup>も<sup>こ</sup>の<sup>理</sup>窟<sup>の</sup>  
あること<sup>も</sup>、今<sup>も</sup>指<sup>紋</sup>を<sup>考</sup>え<sup>る</sup>、攝<sup>り</sup>、そ<sup>の</sup>  
を<sup>犯</sup>罪<sup>者</sup>の<sup>方</sup>便<sup>に</sup>供<sup>す</sup>る<sup>事</sup>も<sup>あ</sup>る<sup>の</sup>  
と<sup>あ</sup>る<sup>が</sup>、押<sup>印</sup>を<sup>誤</sup>つ<sup>て</sup>爪<sup>印</sup>を<sup>捺</sup>せし



め<sup>の</sup>の<sup>に</sup>可<sup>笑</sup>な<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>、<sup>血</sup>判<sup>と</sup>そ<sup>の</sup>も<sup>又</sup>同<sup>様</sup>な<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>  
指<sup>紋</sup>こ<sup>を</sup>個<sup>性</sup>の<sup>目</sup>標<sup>を</sup>現<sup>は</sup>す<sup>か</sup>、爪<sup>を</sup>か<sup>け</sup>て<sup>捺</sup>す<sup>こ</sup>と<sup>も</sup>  
毫<sup>も</sup>も<sup>意</sup>味<sup>な</sup>い<sup>こ</sup>と<sup>も</sup>、偶<sup>々</sup>爪<sup>が</sup>妨<sup>げ</sup>て<sup>肝</sup>腎<sup>の</sup>指  
紋<sup>を</sup>没<sup>却</sup>す<sup>る</sup>、爪<sup>の</sup>逆<sup>び</sup>れ<sup>の</sup>を<sup>切</sup>り<sup>落</sup>め<sup>て</sup>形  
と<sup>違</sup>ふ<sup>事</sup>も<sup>あ</sup>る<sup>が</sup>、爪<sup>印</sup>の<sup>押</sup>印<sup>と</sup>  
代<sup>り</sup>と<sup>さ</sup>ら<sup>に</sup>、<sup>血</sup>判<sup>も</sup>血<sup>を</sup>以<sup>て</sup>て<sup>識</sup>  
を<sup>現</sup>は<sup>す</sup>こ<sup>と</sup>も<sup>あ</sup>る<sup>が</sup>、<sup>血</sup>判<sup>も</sup>血<sup>を</sup>以<sup>て</sup>て<sup>識</sup>  
指<sup>紋</sup>を<sup>没</sup>す<sup>る</sup>か<sup>ら</sup>、<sup>実</sup>印<sup>の</sup>代<sup>り</sup>と<sup>さ</sup>ら<sup>に</sup>、<sup>指</sup>紋<sup>も</sup>  
指<sup>紋</sup>こ<sup>の</sup>氣<sup>の</sup>つ<sup>き</sup>さ<sup>ら</sup>に、<sup>捺</sup>法<sup>も</sup>変<sup>化</sup>を<sup>生</sup>  
じ<sup>ら</sup>る<sup>こ</sup>と<sup>も</sup>あ<sup>る</sup>

九月廿一日

誕辰八十年  
記念展観

# 小泉八雲遺品展覽會



自九月二十七日  
至九月二十九日

於三越ヤリライ

主催 松江八雲會

後援 第一書房

## 出陳目錄

法螺貝	一
銅火鉢	一
長煙管	六十八本

### 第一部 遺品

#### 西印度諸島・米國時代

サラサ上衣  
白ズボン下  
ニユウ オルリアンズ案内誌 (東京帝大所蔵)  
クリオウル諺語辭典 (原名『コンホ・セエメ』東京帝大所蔵)  
トランク  
アメリカ文學論校正刷 (書入れはヘルン。北星堂所蔵)

#### 松江・熊本・東京時代

黒洋服。縞鼠色ズボン。白洋服。薄紺ネルシャツ。鼠色ネル  
シャツ。ワイシャツ。各一  
黒ネクタイ 二  
近眼鏡 一  
小櫛 一  
白足袋 一  
甲斐絹座布團 一  
文簞笥 一  
スチューデント・ランプ 一

#### 煙管架臺 一

ナタ豆煙管 (外出用) 三

煙草壺 (黄色出雲焼) 一

煙草入 (紫檀、刺煙草在中) 一

名刺 (その一) 一

名刺 (その二) (年賀用) 一 (田部氏所蔵)

原稿用名刺 一

長男に與へた英語教材 百三十八枚

#### 原稿

「怪談」その他 百八十九枚

「アズウル・プシコロジイ」合本一 (東京帝大所蔵)

「團子を失くしたお婆さん」八枚 (田部氏所蔵)

「橋の上にて」十二枚 (小泉家所蔵)

#### 尺牘

田部隆次氏に 一

落合貞三郎氏に 一

ヘルン賞品 (落合氏に與へられた「グリム童話集」) 一 (落合氏所蔵)

紫風呂敷 一

手帳 メモ 各一

蟲 籠 二

本箱二 (小泉家並びに北星堂所蔵)

第二部 文獻

Bibliography

八雲の著作 Works.

散文 Literary works.

- Some Chinese Ghosts. (龍圖公案) 1887
China. 1889
Two years in the French Indies. 1923
Karna. 1918
Letters from the Raven. 1908
Youna. 1890
Shadowings. 1900
Exotics and Retrospectives.
Stray leaves from Strange literature.
Fantastics and other fancies. 1914
The Diary of Impressionist. 1911
A Japanese Miscellany.
In Ghostly Japan.
Glimpses of unfamiliar Japan. 1894
Kotto. 1902
Kwaidan. 1904
神國 Japan. 1904
The Romance of the Milky Way. 1905

翻譯 Translations.

- The Temptation of St. Anthony. (G. Flaubert) 1910
The Crime of Sylvestre Bonnard. (A. France) 1890
Clarimonde. (Th. Gautier)

八雲研究

Critical essays on Hearn.

- Life and Letters of Lafcadio Hearn.—Elisabeth Bisland.
2 vols. 1906
Lafcadio Hearn, his life and work.—Nina H. Kennard.
1912
L. H. l'homme et l'oeuvre.—Joseph de Smét. 1911
L. H.—Edward Thomas. 1912
L. H.—Yone Noguchi. 1910
Reminiscences of L. H. by Mrs. Hearn.—trans. K. Hisada
and Fredrick Johnson. 1918

本邦版著作並びに研究

Works and Critical Essays edited in Japan.

- 鎮西餘響 秋月翁の手紙 明治二十六年 熊本五高龍南會
龍南雜誌 The Future of the Far East.
明治二十七年 長谷川武次郎發行
怪談 Japanese Fairy Tale. 五册 明治三十一年 秀文書院
英文妖怪奇談集 高濱長江譯註 明治四十三年
英和 本田孝一譯註 明治四十四年
對譯 小泉八雲文抄 矢口達 大正四年 中興館

- Out of the East. 1895
Gleanings in Buddha-Field. 1897
Kokoro. 1896
La lumière vient de l'Orient.—trans. Marc Logé. 1911
Kwaidan.—trans. Marc Logé.
Feuilles eparses de littérature étranges. trans. Marc Logé.
Chita.—trans. Marc Logé.
Fantomes Chinois.—trans. Marc Logé.
Le Japon inconnu.—trans. Léon Raynol. 1904
Natalika.—trans. Karin Hirn. 1905 Stockholm.
Exotica.—trans. Karin Hirn. 1901
Fra Skyggenes Verden.—trans. Johanne Münter. 1902
København.
Spöken och Drommar fran Japan.—trans. Karin Hirn.
1904 Stockholm.
Chrisanthemum.—trans. Johanne Münter. 1901 København.
Das Japanbuch von L. H. 1922 Frankfurt.
編輯 文 Editorials and Critical Studies.
Editorials from "Item" and "Times Democrat." 1926
Editorials from the Kobe Chronicle.
Life and Literature. 1917
American Literature. 2 vols. 1924
Appreciation of Poetry. 1910
Interpretation of Literature.

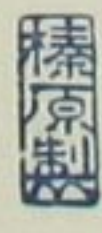
- 東京からの手紙 大谷正信 大正九年 北星堂
日本印象記 落合貞三郎 大正九年 北星堂
蟲の文學 大谷正信 大正十年 北星堂
海の文學 大谷正信 大正十年 北星堂
島めぐり 大谷正信 大正十一年 北星堂
怪談(アリス英文叢書) 戸川秋骨 大正十三年 アリス
怪談 戸川秋骨 大正十年 アリス
小泉八雲選集(雪せなか外) 萩原恭平 大正十五年 嶺光社
小泉八雲選集(耳無芳一外) 萩原恭平 大正十五年 嶺光社
Stories and Sketches 田部隆次譯註 大正十四年 北星堂
Lands and Seas 落合貞三郎譯註 大正十四年 北星堂
小泉八雲書簡集 市河三喜編 大正十四年 研究社
教育に於ける想像力の價值 藤本勇譯註 昭和二年 太真社
小泉英文學史(原文) 第一卷 田部隆次校訂 昭和二年 北星堂
八雲英文學史(原文) 第二卷 田部隆次校訂 昭和二年 北星堂
小泉英文學史(原文) 第二卷 落合貞三郎校訂 昭和二年 北星堂
八雲アメリカ文學論 アルバート・モーテル 田部隆次校訂 昭和四年 北星堂
第一版 小泉八雲全集 十八卷 昭和三年一月完了 第一書房
第二版 小泉八雲全集 十八卷 昭和五年十一月完了 第一書房
學生版 小泉八雲全集 十五卷 昭和五年九月開始 第一書房
帝國文學 小泉八雲紀念號 明治三十七年十一月發行
小泉先生その外 厨川白村 大正八年 積善館
水 郷 小泉八雲紀念號 大正十四年五月 松江水郷社
小泉八雲 田部隆次 大正三年 早大出版部
小泉八雲 野口米次郎 大正十一年 アールス
小泉八雲 野口米次郎 大正十五年 第一書房
富山高校編 ヘルン文庫目錄 一九二七 富山高校

外回から日本に来た珍客と云ふ心算としてものみの電  
ラフカディオ・バルンを第一に伝播せしめたる事。彼人の日  
本にありかんと回籍を許し、日本婦人と交りし日本  
の神道とを喜こび、板屋半の詩集を以つて日本の歌  
味と世界と高の事とを述べた。日本の内容が此の  
歌うて世界と始めて既味と云ふと云ふことの出来  
るの如くも、記叙の深刻な著述(小説)もあつ  
たから。若し其の人高十年の壽を俵比一の如く  
バ更々日本の為めと大なる貢献があつたといふ事  
も、其の人の歌味性、美術や其他日本の特色  
ある各方面の精神に向つて、とんち日本  
が世界の混成といふ事があるか、惜しいことと云ふ事

五回算を一冊として扱ふ。三編と遺るを海列  
から記述して、一覽に以て、遺るを著述  
家より著述し、原籍や著書の内容をこゝに  
まゝに記述する。長い洋書の烟草も多く集  
め、その中の名詞が若干海列して、その  
比が、あると、其の人の歌味と一端を述べた  
てある。右の如く、自分から日本の毛筆  
と英語の今迄風の文字を考へて、長閑な  
教へるに、その著述の教材をいふ、その  
すべし、その比と云ふ事。

日本の市場を外国に宣伝する、外国に遊んで、外国  
の事をも、いふ事、よか比較の合格者といふ事

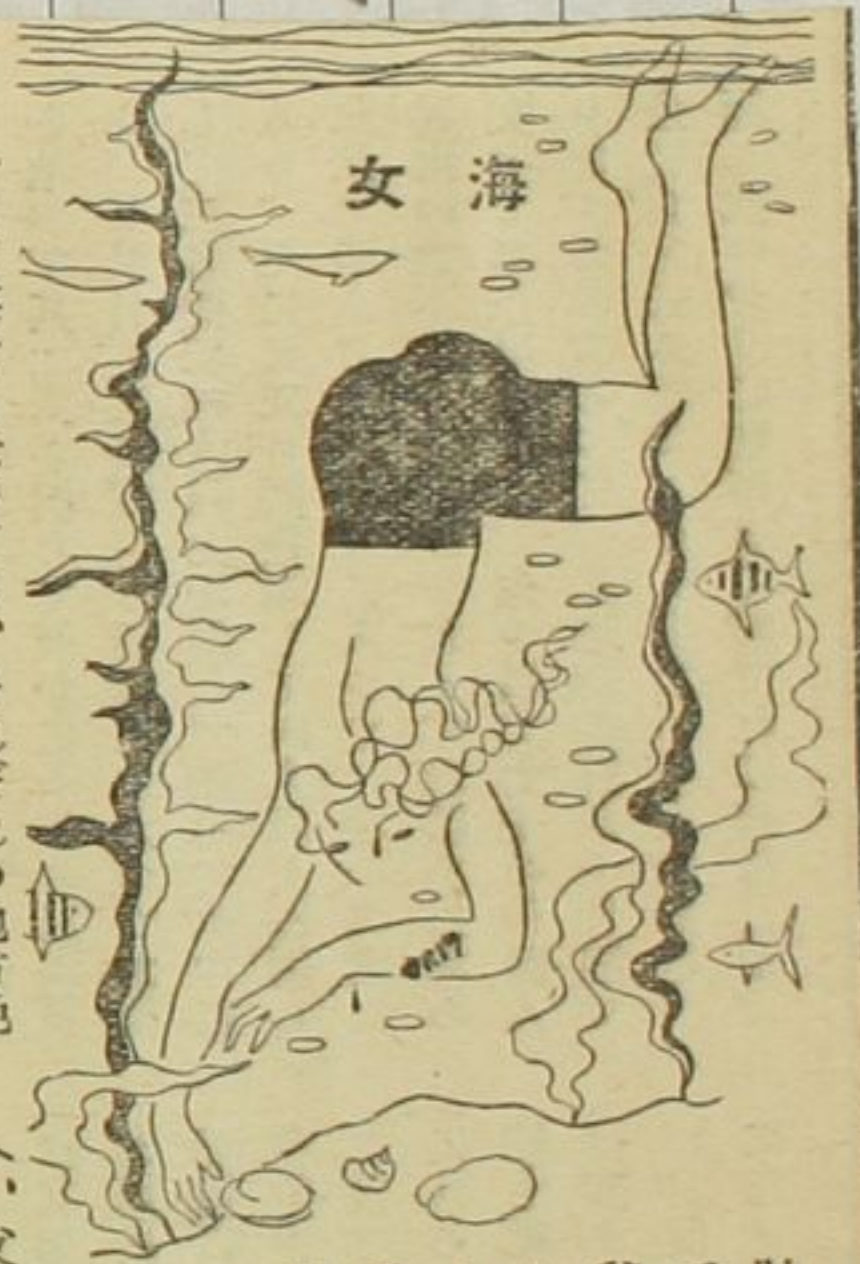
か、えんもよほゆるよの、外四人は日本にちくたにん  
日本の事、日通曉し、事多し、文章に長ずる、よか  
し、以上の合終者、ひある。日本人の日本の風習、こ  
つてあるから、外四人から看せ、事多し、ことを  
も思ひ、よの、判却すること、甚しき多し。日本人  
かり切つてあること、よの、外四人、いふ、今、いふ、  
風習がある、よの、九等、いふ、説的、よの、外四  
人の跡、よの、落、よの、外四人、向きの説的、よの、長し、  
信、よの、ぬ、よの、あ、外四人の操縦が、不、充、分、よの、あ  
るから、よの、七、よの、斯、よの、説的、よの、あ、押、よの、ハ、ル、ン、の  
如き、人、よの、識、多、よの、無、い。北、次、自、分、の、関、係、の、場、合、  
に、日本、の、四、民、性、や、日本、の、風、習、美、を、よの、外、四



よ、沢、い、了、の、冊、子、を、作、ら、ん、と、し、て、書、き、方、後、を、  
方、を、研、究、し、と、見、る、と、外、四、向、き、と、よの、あ、よの、あ、  
而、倒、ひ、あ、る、こ、と、を、感、じ、し、よの、出、ハ、雲、着、し、存、在、  
せ、ん、と、つ、く、く、其、故、人、を、思、ひ、起、す、(九、月、  
廿、九、日)

○日本、の、海、國、の、あ、る、内、地、よの、河、の、縦、横、の、大、郷、の、多  
い、よの、遊、泳、の、早、く、是、達、し、て、よの、あ、今、の、四、海、遊、技、  
は、我、男、女、の、世、界、人、と、覇、を、争、つ、て、よの、あ、よの、怪、  
よの、あ、よの、西、洋、の、海、を、よの、深、く、海、底、よの、あ、よの、あ、  
核、を、探、る、の、日本、の、女子、の、斯、の、核、を、用、ひ、し、  
海、底、の、物、を、探、る、よの、あ、よの、海、女、と、よの、あ、  
よの、あ、自、今、の、い、つ、を、や、赤、裸、の、日、の、題、下、に、載

十刻の裸体を  
 海女に海女  
 り乾く人多く  
 語る材料を得  
 るるるるる  
 刊の文藝春秋  
 秋の好も例  
 が出てゐる。即  
 一年の内四月は  
 泊る島と云  
 ふ所の海中と  
 りるるるる



一口に海女と云つても、それぞれの地方色があつて、その生活様も一概には云へぬ。此處には百パーセントの海女として、裸女の生活として船倉島の海女を語らう。  
 船倉島と云へば能登半島の突端、塗り物で有名な輪島港から、海上三十六海里、日本海の真中に在る僅か不忍池を二つ合せた程の孤島である。  
 さて、この島に於ける海女の生活は一年のうち僅か四ヶ月で、残りの八ヶ月は能登半島の濱邊に歸つて「海女町」なる名のもとに特殊部落を營み冬眠の生活をしてゐる。で八十八夜頃となると所謂「島渡り」と稱してこの二百餘の全部落は、先づ海女を先頭に家族も家

財も、醫者も、小學校もお寺もこそつて數十艘の船に乗つて、大舉船倉島へ移住してしまふ。かくて十月の初め頃となると、彼女等は再び島の生活を楽しんで渡り島のやうに能登半島の濱邊へ歸つて来る。島は再び日本海の荒潮の床に無人島として残される。  
 かくて、この四ヶ月の島の生活は海女に初まつて海女に終る。文字通り彼女等の裸一貫が島の生活を支へ、父であり夫であり戀人である男達を扶養するのだ。で、島では女である以上十四五歳から四十歳位までは全てが海女で、海女である以上は裸である。  
 先づ、その髪は、俗に云ふ天神鬘といふのを結んでゐる。これは海女業の先祖である「海女の乙女」の鬘を模したもので、この鬘を結んで海へ入れば怪魚毒蛇も近づかぬといふ五百年來の傳説であるといふ。次いで腰には麻綱を締めてその右側に長さ一尺四五寸、幅二寸位の鐵片の太刀のやうに差してある。此は貝金と云つて海底で鮑を取るに用ひたり、又怪魚毒蛇の護身用であるといふ。その赤銅に焦げた赤銅の裸身には僅かに越中襪に似た

藤原武

ものを以て陰部を蔽つてゐるに過ぎない。その上この陰部に當る部分の禊の上には色糸で幼稚な刺繍がしてある。

かう書けば文字通り百パーセントのエロでありグロであるが、あの紺碧の海と、燃えるやうな日光と黒い岩礁を背景として描き出される人魚の群に對してはそんな末梢的な感じはけし飛んで、如何にも健康な強靱な美しさが野花のやうに自由に明るく息づいてゐる。

海女は「草(寒天の材料)の採取が主であるが、毎朝十五歳位から四十歳位までの海女は男達に纏を押させながら沖の漁場へゆく。そして海へ飛込む前に腰の貝金を抜いて舷を叩き初める。カタカタカタ……あの船からこの舟から朗らかな諧調が海面を渡る。あの音で海底の怪魚毒蛇はみんな逃げてしまふ」のさうだ。次いで鉛の重しを腰に下げ一本の命の綱を父である、夫であり、戀人である男たちに托して海女は十五歳二十歳の海底に沈んでゆく。

二、三分もすると、命の綱をちよいちよい海底から引かれる。上る合圖だ。かくて男達の引く綱と共に海女は上つて来た。首だけ海面に上るや否や、つぼめた唇から「ヒューッ」と

秋風の梢に鳴る音のやうにうら寂しい聲をたてて息を吐く、あちこちの波間で……。聲を出すわけではないが、一度に息を吐くと胸が裂けるので細く長く息をするのであんな音がする」のさうだ。

海女たちの「草」を探る方法は、海底でエゴ草を探るや、その両脚に一面に巻きつけるので、その重さも十數貫に達する。従つて二、三人の男達が引き上げる。魚の多い時は一人一日數十圓を稼ぐ事がある。何しろ女の裸一貫の四ヶ月が一年の家族を支へるのだから

ら偉なるかなである。彼女等は潜つてゐるうちに、潮の加減の悪い時などは、よく絶息する事があるといふ。そんな時に海女の鬘を引つかんで揺すぶつて息を吹き返させるのださうだ。何としても粗い生活ではある。

島の男たちに「妻君や娘たちが働いて君たちが飯を食するのぢや肩身が狭いわけだな」と暗に、島の女尊男卑の本音を聞いて見ると「さうでもないが、然し昔からこの島ぢや、獲物は女が六分で男が四分ときまつてゐるで、そんなもんかも知れぬ」と傲苦笑した。

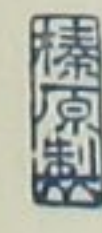
集の島は能登半島の一部落が  
 全部移住すると云ふが所謂の  
 草も追つて移るの草味  
 町の風が現在も日本に存して  
 あるの、甚しき事に感ずる

○極地の犠牲に多り採捨家の遺骸がキヤンプ  
の中を構つておれりるを遺品と見え此頃の採捨家  
が奮起し此と云ふも、そのが新雪紙に載つておる。  
全死と云ふことの出るも、雪地の氷上をキヤ  
ンプをゆる外に多いが、氷が割れけりると、キヤンプ  
が崩壊するの、此頃も見えさん採捨家の日誌  
にい其事が書かれてあると云ふのを、キヤン  
プ生活も極地の惨境なるものである。自今もキ  
ヤンプ生活が難苦なる、輕井澤に於ける武  
士の別荘のある。中々梅造の三派の七世  
論も、が、いんと云ふても三伏の夏、武十の  
間着を脱ける為めの、後の位、居てゐる。

冷気が氣をいませると、そこを去つて、  
あるから、キヤンプのやうなところも、  
この別荘の、留守番も置かず、家具も、  
下も、の用具の、皆持物へり、或は、  
心のオーストリアンに、愛印して、  
その心、全く家を閉じ、  
であるから、バラツク、  
さうさうい。整齊な、  
い、  
飲してある家の中、  
七、  
場、  
動も、  
自殺の、



此に英人が墓所とする。前年 島が地  
帰と溢死を遂げたの七人の別荘であつたと  
そのかまゝが古い間切のうらうら。其後同じやう  
な例かどの位あつたか知らぬが、友人の田中穂  
積が毎年夏期より家族を伴つて別荘に行  
くことが例となつて今年七人出かけた譯に、行  
前二人は掃除を托して家の鎖しを聞いて見  
ると、そこは死體が横たつてゐて、こゝは不吉の  
出来事をも著見し、全部元拂つて急いで家  
を改築してから出かけることゝ略かあつた。この  
事をもつと新島より出る事実はあるから、此や  
うなことが他に七あるかも知れぬ。鐵道養生や



無みや新島やいふ流の後にとつて、別荘自  
殺が新式と考へる。このことゝあつたの七世に  
の二変化である。其の別荘の持主は、  
二味蒸す千葉である。あの荒涼な家にはコナ  
ンク、梅の木の起つた。何れも土地の爲に長  
るの概すむまゝである。銘の著人を置かす  
近七共同して何等か元締の法をめぐらさ  
物と思ふ。著人を置くか  
のいつの世のあつた七人の興味をせよ。この犯罪の経  
緯もあつた。出取物も七人の犯罪に關する。よゝよ  
く美ら、近頃流の府法令も七人の犯罪に  
關する。よゝよ人の氣も、別荘犯罪を元徴す

悪あや敷利木の人が加へてし事實を語りし  
こく受ける。此頃の文藝春秋に犯罪の府港合  
の著記が出てある。是れが中々不良少年の犯  
罪の動機が多く冒険の因となりて人を殺傷し  
しり放火する。七とく冒険に興味を感ずるの  
び放火をして七保険金を得たいとの心術があ  
る。浮世のいと云ひてある。自分のあぢあぢと  
ここの今日不良少年の例に仁義と云ふことの  
行はれてゐる。ちの仁義をその挨拶に不倫があ  
つて流滑を缺いてゐる。そこをめぐりながら  
するところの例は若し行はれてゐる。  
と云ふの感せしめる。仁義の若し挨拶の例は

初めの時のころやつとよめである。或は猶も  
とび行はれたかとも思ふが、是れが今時ち年  
の事である。勿論不良の群は、親  
分が有る。譯は挨拶と似て趣が異なる。親  
分の挨拶分の著記は見えぬ。其の仁義の仕振  
り、全死挨拶のやつと口吻は、挨拶の節をつ  
けてやる。誰かが教へるの、おれんが性々アジナ  
文句もある。能程練習してゐる。流暢を缺  
く、是れが大方である。不良少年の、学校  
教育以上の勉強を要する。課目と云ふもの

不良少年と仁儀

石黒 それはテキヤでも、眞面目な者もあり  
ますが、また悪い者があるんです。いま仁  
儀のお話もありましたが、私仁儀を集めて  
居ります。

北條 仁儀といふものは實際ありますか。

石黒 あります。節をつけてやりますが、こ  
れも一通り申上げないと分りませんが、  
浅草の不良と、神田の不良がぶつ付かりま  
すと、その様子がお互ひに分りませんから、  
さうすると両方で噂うわさです。表通りでは  
いけないから、木戸へはいりまして、下駄  
をぬいで、その上に尻を置いて、しやが  
んで、睨みつこをする。

濱尾 はだしになるんですね。

石黒 さうです。それから文句をいふので  
す。つまりそれが仁儀なんです、これが  
スラ〜とやれ、ばよいが、つかへると負  
けで、つかへたら殿つてもい〜んです。大  
概下駄でやるらしいんだが、殿られても文  
句はいへないんです。私その仁儀を湯山知  
めましたが、面白いもの一つ讀みませう  
か—そちら方、お控へなされ、お兄いさ  
ま、お仁儀さ〜でござんす。手前弱年の身を

憚りまして、道路三尺三寸—或は軒下三  
尺三寸—高座を借受けましての御仁儀、  
眞つ平御免なすつてお呉んなさいまし。手  
前至つて口不調法、仁儀アトサキ間違ひま  
したらば、平に御容赦—こんな事をいひ  
ます。それから名乗りをあげます—手前  
生國と申しますのは、關東にてござんす。  
關東と申しましても聊かお廣うござんす。

關東は筑波山吹卸しますところ、花の都は  
お江戸にござんす。お江戸と申しましても  
聊かお廣うござんす。お江戸は緑深く流れ  
も清きすみだ川のほとりエンコウにござん  
す—エンコウは公園の逆で—エンコウ  
は六區を控へました何町にござんす。縁も  
ちまして、親分何の某若い者にござんす。手  
前兄貴と申しますのは、何の某にござんす。  
何處ぞ何の何某は手前四分六分の兄弟  
分にてござんす。手前住所姓名何區何町何  
番地何某と申します。昨今騒げ出し者に  
ござんす。お兄いさまと始めての御對面—  
かうやるんですが、相手の方では長々の御  
仁儀さま、有難うさんにござんす。仁儀受  
けつきまして、眞つ平御免なすつてお呉ん  
なさいまし—斯ういつて、いま申しまし  
たものを、またすつとやりまして、さうし

て滞りなく、兩方いへば、お互ひ顔見知り  
になつたといふ譯なんです。仁儀とはアイ  
ツキとも申します。

齋藤 つまりつきあひの逆ですね。

石黒 さうでせう。

北條 博奕うちと大體同じなんです。浅  
草は浅草山吹卸し—つていふのがテキヤ  
の中にあります。

石黒 テキヤ仁儀、博徒仁儀といろ〜あり  
ます。

北條 どちらが先へいひ出します。

石黒 先にいふのは上です。お控へなすつて  
お呉んなさいまし—といふのは、先へい  
ふ譯です。

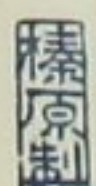
北條 すると、自分が上だと思ふと、先へい  
ふ譯ですね。

佐佐木 實物を御覽になりましたか。

石黒 見ました。

馬 この頃カフエーなどでもやりだすらしい  
ですね。分らぬから、ニヤ〜笑つて居る  
と、何がかしいつてボカ〜やられるさ  
うです。

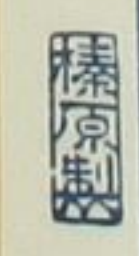
石黒 さうですか。それから仁儀も銀座邊り  
になるとまた趣きがちがつて—鷗往き交  
ふ千代田の城を向ひに控へまして、肩摩敵



撃つる、形容もいさるから、さうく下に置けぬの  
ぢや。

の佛國の葡萄酒の産額、六億と云ふが驚きま  
へも数がある。そんな醜す葡萄酒や三報  
酒の産額、多のことも云ふまゝさういふも  
くも送する今此の酒樽倉庫、地下二層  
四方もあるさうな、世界を傾倒する、よ  
りも酒の産額、香りの庄品を物産とする所  
赤佛國の、何んの國か二層—も佛國を  
加馬つること、出来ぬ。世界の婦人のボウテ  
ットと捲き上げる所も赤佛國の西にある。

○西洲大説に我常陸丸が獨艘のオルフ難く今手捕  
りて乗負四角<sup>舟</sup>は捕虜と云うたこと。亦字  
考し語りと云う。その捕虜が是年有半の長  
い間、敵國に辛酸を嘗みたること、此れ想像す  
ること、その實際をさくことと得ずとも、  
仔細に比ぶ、此種の「新ち年旅行」唐の欽将  
と云ふ人が西國記を發表し、此のを誤んか見ると  
其の實況が始めに知れ、捕虜生活の悲惨が  
あること、日本に敵を捕虜とす、此實況の信づ  
ても凡そ其の信が出来、中事者の手記に據  
ること、傍の白むある。捕虜の其の階級の信づ  
収容所も異なり、日階級の信づると云ふこと



待遇もおのづから異なり、身公將校に準ずること、  
労働に服せし化つる公費を支拂はぬこと、  
死に金の拵合せが無い為り、収容所が夏は  
暑く冬は寒い待遇を受けぬこと、  
或人と饑餓に溺ること、  
七悲惨があること、一行が皆離れ、  
容所は今更さること、互ひに其の消息が  
知れず、此れこと、獨り本西に追々、  
窮乏に比ぶ、其の比、捕虜の窮乏の供、  
七勢ひ三年の信あること、  
日本の捕虜の信、  
七交つておのづから流石、  
此四人の本と通信

を保ち公物供給に就ては、組合を成りてを四片  
リ支給をも仰いれり。日本の捕鯨船の此と雖、保  
ハ無つたが、吾捕鯨船は、以四捕鯨船から援助を  
得し公物、捕鯨の窮乏を免れんことを、一再  
多くおあり。日本の捕鯨船は、以四の是れ、傲つ  
て支給を頼動するあり。使領や西を重んじ、  
を仰ぐ、おのれが、美が容易と運ばるる。こ  
れ、非常の難儀を、使領、上等のよりの  
鐵道の間に、志きする。收容所が、豊、豊つて、  
か、船くと、船乙の各地、移せん。若、役、入、殿、す  
ことよ、行、日の、合、祀、使、役、せん、る、る、く、身  
難、日、力、る、こ、き、れ、仕、事、を、課、せん。病、い、よ、



もあつたが、あまの、死亡、ハ、少、く、若、後、に、往、ふ、あ  
の内、二人、が、二、回、り、此、を、合、て、れ、が、四、後、日、を、離  
る、ま、あ、ま、二、回、り、若、後、に、往、ふ、あ、  
一、回、り、海、港、を、感、せん、あ、ま、の、此、の、出、回、記、が、あ  
らう。

○日本で牛肉のよりの、社、合、と、して、あ、ま、の、  
の、産、地、に、三、丹、地、方、に、あ、り、れ、(伊、馬、丹、波、丹、後)が  
今、の、地、域、が、捕、鯨、船、に、あ、り、れ、伊、賀、伊、勢、の、  
よ、の、神、に、あ、ま、と、あ、ま、の、追、に、日、本、の、行、の、  
由、が、減、少、し、る、相、鮮、の、支、那、か、ら、仔、牛、を  
輸入、し、本、場、地、方、が、飼、育、し、る、こ、と、が、行、ん  
飼、育、の、公、料、が、よ、い、若、り、お、南、よ、い、よ、

あつたらふ、古時をたゞの皮ハツバしてから三  
由る乃ら下月をほからゆびく来らるのむい  
ら冷花してあつても味の香しく下つてぬる  
の部分花はヒシロ或ハロスるむの香があるか  
ヒシロは佛澤のフイラー則ち上肉のこころ口  
イスハ英澤のローストの皮が六味上肉を意味  
するもの肉の部分花は主人の知らぬ名ハブ  
ン（シン玉）三角、脂は三角、肉は三角、上肉の  
股は三角、鹿辛子をいふが中肉、四斤、極ナ  
ヤ皮、ハ、ヒ、ハラ、カグリが並肉、スチ、荷  
ツム、フランケが、コマ切用にとする。

東京

○無物を感ずんと花のあなご（田舎を巡  
リ一ニのあをいづく）

### 老翁をふける後記

ちねの身をいひて花のほつちをうり四五分  
の茶のスケツチもある、巻末を一日の読書人と  
記す、未だ秋のいとまきひんもおちろ  
き事もある。

大平 欽聖 同人 著 唐を二冊 乾隆南遊  
の時 金部 岩が画して天子の御覧に献し  
たるもの、浙江の行高図百紙の一冊は  
証あり、嘉漸の年中行ももるべし、日本  
人の親入老（ある）人も似つゝものも

すへて行商する所におも(あり)支那風俗を  
味ふの習ふと云ふを得べし  
外に先悦を在りし和歌集一巻を購ふ  
月一日記

太平歌楽圖に載する種々の行商の由り  
の真を感するものがある。シニエ細工鉛細工  
等、云ふは小兒に種々の禽獸人物を以つ  
て賣ることゝ在りて支那も亦あることか此圖に  
見ゆ。物心法の法々益々繁盛に始を五一七吹  
いし種々の形と云ふものありて日本と曰は  
あり但しシニエ細工は日本物ありの市井藝  
術の國中あり。此行商ハ華商を以つて



小兒を賣るものも亦あり。是こゝか支那風俗  
あり。他は燈籠も踏車も圓かあり、絳紗も  
以つて小兒を以つること日本と異なること、  
臘月、紅棧、自向を考へて是のこゝんを  
春聯といふ景祝と推し居る圓と云ふ  
と途上二押を賣ると見へる、二軍除  
此五七の幸函紙又田舎方言と考へ  
各戸壁障に粘する夜が燈おあり、如  
斯の物を行商の販く本邦に  
き所也

○洋儀彫刻、巧拙さまざまあり、ことハ言ふ

じよまいか、佛身四が才にて注去するの乾燥の木地  
 を選ぶことひある。木にぬりて乾かすも大きい  
 一より心の部分らうし、乾かすの家の造りあるを  
 の乾かすの所が後日、七割をせしめるも、亦乾  
 るから、んじ注去を精にぬらるるの。亦乾  
 いた木地は、彫刻後に、湿気が侵すこともあ  
 る、んじ注去を要する。普通佛の  
 が彫刻に先んじ像の内部を全部割り取り  
 七は、舞臺ふことの例ひあるの、乾燥せるの部  
 分を去つてひある、亦早く乾燥させる法ひもあ  
 り、同時、湿気の侵入を防ぐ所以ひもある。尚



ほの湿気の恐るべき、白蟻の生ずること、折角  
 の木心もこの為り、換すること、珍しく、まゝの  
 誰のも、氣のつくこと、だが、佛像の頭部、後、  
 換ひ、まゝの、脚部、へ多く換するの、下部は  
 湿気をも、言ひ、ぬらひ、たつて、白蟻が、侵し  
 易いから、ひある、佛像保存の、た、七割、注去を  
 要する、佛体の内部を、割り取る、こと、は、保存時  
 代から、始まる、もの、なり、と、い、ふ、



# 名優

## のカツラ

髪師 大瀧 博

髪は演劇の發達した國には、それに順應して發達してゐる。演劇を度外視することも、頭髮に缺陷のある人々の頭部裝飾のため、あるひは儀式その他の典禮に際して使用する等のことにより、各國にも相應に發達してゐるものである。

さり乍ら、わが國には國粹演劇歌舞伎あり、これに附隨して必然に髪が發達した。加へて、日本人は漆黒の柔軟な直線的な頭髮を持つてゐる。そして、世界にも比類のない藝術的結髪術が發達してゐるのである。全く、他に類例のない獨特な演劇藝術に結髪藝術と頭髮——これ等に取圍まれて、髪は特異の發達をした。わが國の髪は世界無比——外人の企及し得ない境地にまで到達してゐる。

髪は、如何にして作るか。

髪を語るに當つて、最初これが知らなければならぬ。

私は、まだ、若輩である。且又、髪を實際手がけて製作はしてゐない。然し、私の家は既に私を數へて六代目の髪屋である。初代勝三郎、二代勝三郎、三代勝三郎、四代勝次郎、五代龜之助、而して、六代目が私である。四代勝次郎も五代龜之助も夭折した。而し、三代勝三郎は八十三歳の高齡まで生存してゐて髪師として、精根の限り働いてきた。曾孫に當る私は父、祖父そしてこの三代目勝三郎の仕事を見聞きしながら成長したものである。而して又、私も、聽ては髪師として世に立つものである。されば、今更に、髪師の苦心——これが曾祖父、祖父、父、幾人ものその膏血をしぼるの勞作を見つ聞きするうちに、全身に泌みわたつてゐる。胸を打つものがある。胸を射すものがある。殊に祖父は猶生存してゐるがゆゑに、その長年に亘る髪師としての仕事は一世の名優達の稱讃を博した。この三代目勝三郎が髪師として如何なる點に心血を注いだか。それは最初から最後まで苦心に次ぐ苦心である。而し、第一に銅板で髪の基礎となる型を造る時である。

髪も田舎俳優や映畫界のエキストラ俳優ならば知らず、一流の名のつく俳優には、各別個に頭の形に合せて型を造るのである。

藤原製

る。この型を造るには銅板で幅員一寸前後、延長六寸程度のものを幾枚か組合せて頭の外型に一分の隙もなく合せて作りあけるのだ。この型を造ることが髪を作る上に最も困難である。各人各様に頭型は異なつてゐる。それに合せるのであるから素人に

九代目團十郎使用の髪(大瀧家所蔵)



は至難の技だ。名人まで(過稱ではあるが)譲はれてきた曾祖父勝三郎にしても、この型を造ることに苦心した。わざ／＼出向いてまで名優達の頭の型をこつたものである。この型を造るの術も堂に入れば、銅板を組上げて、僅かの部分に、ばつ／＼植

を一つくれれば、びし／＼寸分隙のないよく合つた型が出来上がるものである。この術に達するまでは、幾度か型を造り上げては、更に訂正し訂正しては更に造るの煩雜さ／＼苦心をしなければならぬ。事實、人工の頭髮として、舞臺で活躍しても轉げおちることのない髪をつくるには、それだけの下地が必要である。この下地を閉却しては髪の本質は失はれるのである。それのみか髪を生際を額の形——顔全體の形に合せて女形には女形にして美化したもの——老人には老人向にこいつた趣向に作らなければならぬ。びつたり型を頭形に合せることに妙を得てゐるだけでは何にもならないのである。此點、別の分野に立つ人形師の仕事をも少からず研究しなければならぬわけだ。銅板の頭形が出来上れば、それに羽二重をかぶせる。この羽二重には被せる前に一本々々の髪が植えられる。人間の頭同様に稠密に植えなければならぬから、如何に技巧に練達してゐても、みつちり、一週間はかゝる。而して、髪は黒髪のみに限られてゐない。半白がある。純白がある。半白や純白の毛髪は求めるに非常な困難がある。黒髪であれば田舎の婦人のものを仕入れることにしてゐる。それは、田舎の婦人は度々梳かないから髪を切損してゐないゆゑである。都會人は髪を梳き過ぎ、虐め

# 名優

鬘を語るに當つて、最初これが知らなければならぬ。  
私は、まだ、若輩である。且又、鬘を實際手がけて製作はし  
てゐない。然し、私の家は既に私を數へて六代目の鬘屋である。  
初代勝三郎、二代勝三郎、三代勝三郎、四代勝次郎、五代龜之

過ぎてゐるので大半は短かい。それでは、水も滴る濡羽色の大  
丸鬘も結へない。島田巻にも見榮えがしない。半白の頭髪もの  
は程よく白髪を染め、あるひは事實半白のものを用ひることも  
あるが、手に入らぬ場合は白熊の毛を染めて用ひる。また、純  
白のものは、白髪が手元になれば多くの場合、この白熊の毛  
で事済みとする。

鬘は従来、各名優達の頭型に合わせて必要に應じ種々に作り、  
損料貸にしてゐる。ゆゑに、代々の名優の使用した鬘で、ミり  
わけ傑作としてゐるものを、百餘個今猶保存してゐる。

そのなかでも、特に優れてゐるものは、曾祖父勝三郎が一世  
の思ひ出に作つた九代目團十郎の爲の鬘である。團十郎が「矢  
口の渡場の頓兵衛」に扮する時、これを用ひた。この鬘は二重  
に毛髪が植ゑてある。なにしろ中老年人に扮する役であるから毛  
髪は白ミ暗灰褐色の二様のものが錯雜して生えてなければなら  
ない。されば、鬘の上に通り純白の白髪を白熊の毛を利用  
して植ゑてある。その上に、純銀の針金を燻して暗灰褐色にし  
て植ゑ、それに縮れをかけてゐる。銀を植ゑた鬘！ 今こそ、  
銀相場は下落してはをれ、當時は高價であつたがゆゑに、それ  
だけでも大きい評判であつた。而して、この鬘には、同じく純


銀ミ自然の毛を植ゑた眉毛ミ鬘が連続的に結着させてあるの  
である。動かす眉——動かす顎——この二個所に人工の鬘細工  
をもつて剥脱することなく別の眉毛ミして鬘ミして密着させ  
ることは、いかな曾祖父も異様な苦心を拂つた。そして、見事  
にその目的を達成して、九代目團十郎に一世一代の名技ミ名科  
白を揮はせたのである。従つて、この鬘は一家の寶物として長  
く傳へることにしてゐる。曾祖父も、かくの如き鬘は再度作る  
機會ミ精根はないと云つてゐる。

今、私の代ミなり、大勝の名によつて、鬘専門に十數人の人  
々を使つて手廣く商賣をしてゐる。ゆゑに、毎日、多くの鬘が  
製作されてゆく。これ等の鬘を前に私は感慨深いものがある。  
鬘の製作——これは、わが大和民族の傳統的にもつその髪  
の色に、髪直線であることに、その結髪様式に完全に表現  
することが、鬘師としての使命である。されだけ民族化するか  
と、されだけ民族的特長を發揮するかと問題である。而して、  
その特質の發揮は最も自然的であらねばならぬ。不自然な高揚  
には藝術的價値がない。また、眞實に鬘ミしての使命を果すも  
のでもない。

鬘——鬘の毛髪は、それが羽二重の生地一本々々植ゑら

## —(る 語 く 斯 は 匠 名)—

れる時、一本々々が再度人間の毛髪ミして生命を吹きかへすの  
である。生命を吹き返さないとしたら——その鬘は藝術的に  
死亡したものである。一本々々の再生した毛髪が總て寄つて人  
間の毛髪の姿ミ同じこミになつて、初めて鬘は鬘ミしての全使  
命を果す資格を得るのである。ゆゑに、鬘をつくるこは、單  
なる技術ではない。毛髪の生際の如きは最も苦心を要する。人  
間の生際以上に美しく、しかも自然でなければならぬゆゑに  
ある。それには、技巧を越えての藝術的な苦心が必要である。  
鬘——。いかに、不具の人々の頭髪を補足して、その人達を  
救ふこミだらう。而し、國粹演劇である歌舞伎に對しては、そ  
の貢獻は蓋し絶大なものがある。歌舞伎に鬘がないこミしたなら  
ば——或ひは歌舞伎の藝術的完成の上に——その審美的觀點上  
から、何割か割引かれたものこミなつたであらう。鬘——。この  
ものゝ爲に私は一生を捧げる意圖を持つ。

○過去のやうに刺激の極端な言ふの日用  
へらふことはいない。常々最大級の言ふが  
若い人達にはいふ大いふことか極端な言ふ  
目とか感んぶことか。後者たることか多量の  
大いふ言ふことか。流行の心あることか  
頻年盛んせしめられた。大いふ言ふ云ふが後者が  
絶めらぬ人々の注意を惹き起さるゝか  
と云ふの事か。斯うことが行ひ出れば、實に左  
右の事か。多量の言ふ最大級の言ふと  
この言ふの見極めも障りて心さ羞恥を感  
せしめずといふ言ふ。此の言ふは、  
どうかと言ふと、最大級以上の言ふは、  


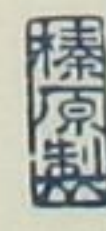
人の注意を呼び起すことが出来るやうな  
人々を刺激する言ふ。言ふは、  
骨を打つ言ふ。醜怪な言ふ。言ふは、  
むねはあやうな言ふ。一時特急と云ふ  
言ふ。言ふは、言ふは、言ふは、  
起の言ふは、言ふは、言ふは、  
新言ふは、言ふは、言ふは、  
つと尖端を行く言ふ。言ふは、  
と云ふ言ふは、言ふは、言ふは、  
と云ふ言ふは、言ふは、言ふは、  
を降ろす言ふは、言ふは、言ふは、  
征服した言ふは、言ふは、言ふは、

はれおる活氣を表現するもの、滑稽をいふ  
語が十四五年にこのかた用ひらるゝが、音楽を  
いふ、旋律と云ふ形容語が流行りの流説、  
熟練と云ふ形容語が行はれ、確かまらぬと云ふの  
が弱いとあつて、**断然**と云ふことと云ふ、  
**断然**の語、この頃、文藝界にも無闇に用ひ出  
さんとした。提推のしる事を行ふの共同  
殺氣を三つするといふ殺氣を念ぢやうな語が  
不似合の場合も用ひらるゝやうにさういふ。工口  
とグロが對句のやうに用ひらるゝ。性急が極端に抱擁  
ルと云ふ、**提推**と用ひらるゝ。地獄と云ふ言  
葉が試験の難さの用ひらるゝ。監獄の二字は刑務



所と改定の改定物、監獄部と云ふ語が虐待  
の場合に用ひらるゝやうにさういふ。大衆の二字は  
流行して大衆文藝といふ大衆作家といふ云ふこ  
とが文界の一通の語とさうしてゐる。ついで次からセン  
センスといふ語が文藝界の一時にさういふ  
音だ。一寸思ひ立つる新語の地位ある。多くと全  
部がセンスといふやうにさういふ。流行の「さういふ」  
その語があるやうな方面に行はれて、その語を現解して  
いふ「モダン」さういふもの、侮辱を受けたやうな  
譯、この個物の言葉が立ち場ちをみる。雑誌や  
小説を現在に「護」を換はるゝ人、理解が出来  
ない位である。況して三十七年五十年の後の人が

後人から、じんまひ、あ、う、か、ブルジュアをブルと略し  
フロレリヤをフロと約し、ブルとフロとミルこと、今  
日理解してんも、他日ハ、い、も、あ、う、か、キ、ロ、と  
んを思つて徳川約のコンニヤウ本や昔人  
表紙や人物本などの後又、う、く、こ、こ、う、あ、ぬ  
こ、こ、の、無、理、う、ぬ、こ、を、感、せ、る、と、得、ぬ  
十月三日記





學界新秋

早大文科の巻 (7)

支那服で會話を避ける

耳の遠い山口教授

世を欺く特權とは?

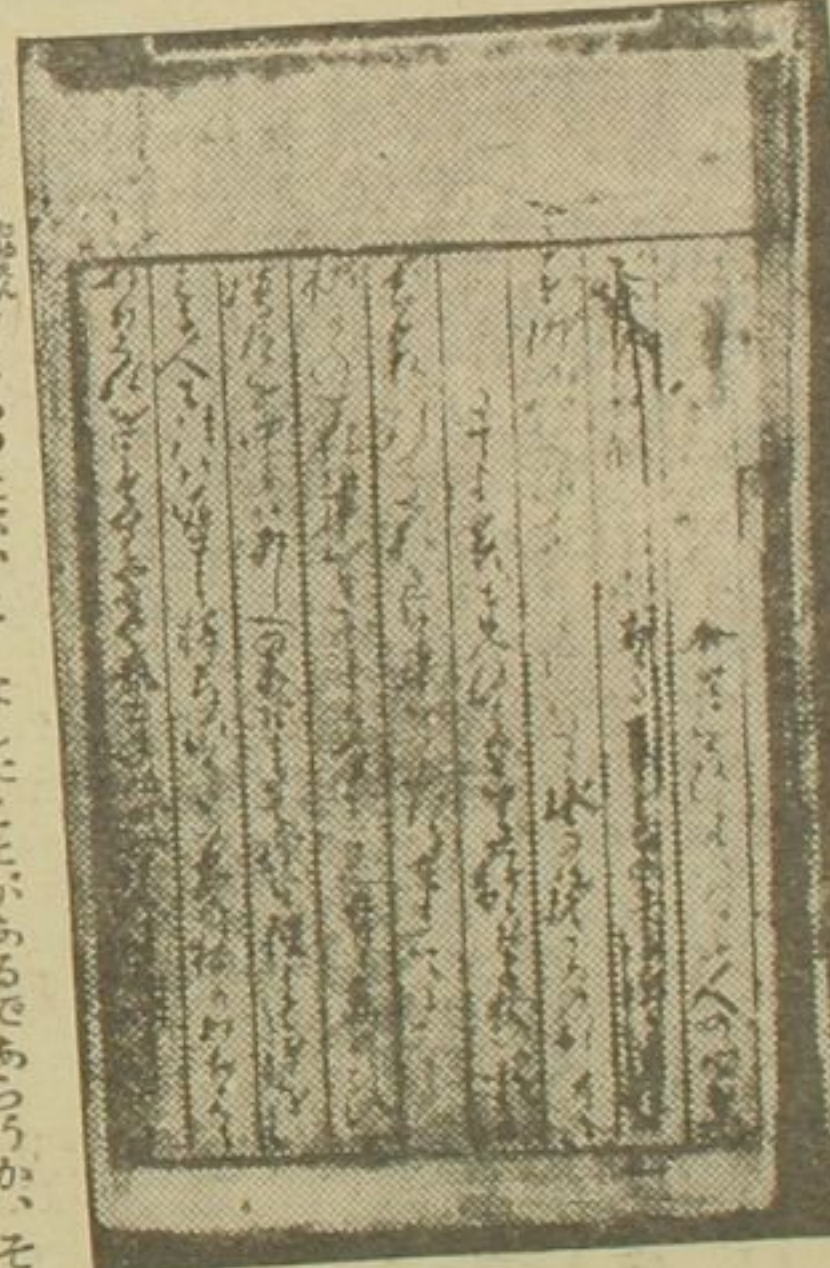
T・T・T



山口剛教授

草双紙その他の江戸軟派文學の研究、耳の遠い學者として有名な山口剛教授も、學界の特殊な存在として擧げらるべき人であらう。

耳の遠いのは二十年間、ふとした風邪がもとで、一つは肺尖を貫き、一つは耳を聳はれた。肺尖の方は防ぎ得たが、耳の方は手遅れで、常に「ガリ」〜と雑音が鳴つてゐる厄介な道具になつてしまつた。で、人から話しかけられるといふことは、かれにとっては最大



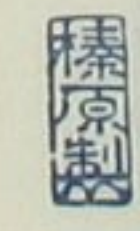
これ位の便利は不具者の特權として許していただきたいですナ」と可々大笑してゐる。最近かれが入手した秘に、六橋園の書庫に委せておけばいい。流石に石川龍聖の狂歌集本がある。蜀山人と違つてストラ〜と歌の讀め

なかつた六橋園ではあつたが、これには未發表の狂歌が千首ほど含まれてゐる。推蔵に推蔵を重ねた細字の跡をたどる時の、法悦に似た心境こそ忘れられないものであらう。特に六橋園はかれの好む人物である。この稿本は市場春城翁から、かへさないつもりで借りて來たのだつた。

美學の體系を建てるにある。西洋美學に失望したかれは、借り物の美學で西洋と著しく異なる東洋の藝術を批評せんとする學界の態度にあきたらなかつた。かくて、青年時代のかれの情熱は東洋に生るべき密の美學に向つて燃え始める。その基礎學問として支那の畫論とか、書論とかの典籍を渉獵し、日本では特に江戸文學が生活と美との交渉を比較的明らかにしてゐるので、草双紙類の研究に手を染めたのであつた。かれにとつては辰口藤枝がどうあらうと、丹次郎がどうしよう、それらのものはかれにとつては没交渉である。

藤村

○山頂給えるやの店頭、遠近法を應用して  
山小屋をとり擬し木製の額面形の絵を  
きよきよみかきを見かけ、外四角をくまなく  
るが日本物をして舞いあがるぬやうのものもある。前年  
高田博士が洋行して折瑞西から持ゆつたのも  
張の遠近法を用ひた甚だ所を現へしもの  
あつたが、さへから思ひついで、コンクリートを  
と見せる山小屋の窓を切つて、さへから山岳が  
見えるやうな取向し、さへから窓の窓に窓  
を装ふをさへするのがある。自合のとも不得  
の、尺四方位な大きき、圍爐の重長、新か  
くべしあつた、さへから自在カギび吊りさへ



鉛がある。壁は、縄やピンケルのやうなもの  
掛けしつゝある。煙をさへ登山ある内人が海  
を搭ぐ具が横つてある。笠やランプが壁にか  
かしてある。昔々として山小屋の椅子が極めて浅い  
敷の中、先が奥行のあるやうに見え、  
山法、應用の現は、ある。高山の絵を  
様々として書かると、あつて、さへから、  
二尺もある。此の物も、行々の、さへから、  
先へ心も、何れか、ある。皆、さへから、  
信紙絵の大屋驛に日本著名美術研究  
所と、さへから、あつて、さへから、  
筑摩郡木祖村、さへから、  
木曾

倉美生産但合ひ心するよか上等である。自合  
 の得比のまきまきびきまきまの組合の君が解説か  
 附せんてある。山深く森林の盛んなること  
 端西に徳とる大常にたを此種の母工産  
 品の出るのへち高のふいである。日本の工産の  
 動力する織巧に少くするが、倉美生産する  
 素朴の富が特長とてえぬはらう。こんど  
 ハ破かに其の故及のあつたを姫——くふ  
 (十月六日記)  
 ○柳亭行彦の足敦家記に依るに何々  
 坊といふを一々考証し、各々相けりの表を  
 案すとあり、現在……坊と云ふ語の通例用



へんてあるのちろまきまき

豆人の坊

志人の坊、いやまの坊

どろ坊

けち人の坊

三の坊主

寝坊

つん坊

べら坊

喰ひまの坊

寝まの坊、おこし

うか九坊

たぐ坊

又え坊

ちつかり坊、まかり

若し用ひえんは語を流者、散見する語は柳

亭の挿出に依ると

とらん人坊、松柳界の

とりん坊、日上



とちめん坊 けちん坊と云ふに同じ  
つるろ坊

やんちや坊

掃地坊

海癖に過きたるもの

つくろん坊

おんやり つくろん坊

とちめん坊

猪熊

けちん坊

けちん坊

とちめん坊

もだか坊

えんろと云ふに同じ

さ、じん坊

阿修羅坊

白切捨つるる阿修羅坊

長床坊



いれづら坊

きねい坊

此の如くは河津手入坊の字を添へて用へる  
もの多し、志ね坊の字は掃地の字のよと云  
へんきき坊の物に拘らず氣遣のよのよと云  
やきい坊、ちん坊、りん坊、きん坊、娘、娘、深いもの  
を多く、やせ坊、は瘡をた人をこころおは法の  
の然る坊の言多し、赤ん坊、此の範圍の  
よのよあつらん坊、黒ん坊、いふくろくろく、この  
を嘲ゆる言、白人、おんは、癩病形、系、の  
平者の白と異なる、このよと嘲ける言、系  
やきい坊、あやん坊、共に焦電して是



欲の用語を取、徳川代の用語を意方訓し、  
以て後多易き所、編者の用意あり、  
刑具、獄舎の圖を附し、  
判例を原文の傍に挙げ、  
徳川の律令の  
書留の汗出、元棟、  
律考の精、失、  
の類、因、  
此書に苦心せし者あり、  
○近來内務の研究家が古物磁の破片を研究  
と集めて其の多きを誇る向とあり、その説く所



據ると磁の海岸にち磁の破片が多く見出  
か相々の效果に千々入れば、  
此海岸を漁ると大さきものあり、  
も百採ると千々入れば、  
此等磁の破片は多く、  
多くち磁の無き所、  
せんが採るといふ、  
が白合の磁石に二三丁月を差らるる傍に

これ頃より政子の屋敷跡といふ所より往々古磁  
の破片が出土するが、皆さまあつたやうな古磁とい  
思つても、比が流汗を採ることに、その破片は  
ころろと。自合が去谷に橋をくわへたに、附島  
老油の家があつた。その主人は老人があつたが、唯  
義真が六郎羅漢を乞へるに、内上は其の主人に  
ちうと。自合は朝夕散策の都なる其處に腰に  
けて、説をしてあつたと、供連が二三人古磁の破片  
を十数個採つて来て、多んを老人に送つたのひ  
きんといふやうな、り尋ねるも、えんを原料とい  
て古磁の品を乞へるに、支那古磁といふ所のよ  
が出来ることよから、自合も真を乞へて、お花

瓶と心つて貰ふつれ、ことあるが、成るを、磁  
ちうと流る、このひあつた。この古磁の破片は  
函子尾末から子付に取らせると、夜夜美に少  
しばかりの葉子を焼くこと、老人は語つておれ  
今考くと、海濱から採つて来て、このひあつたか  
あつた。尙説は昔、ちう木末、り野あつた  
の馬兜の中につけて、河やり、ちう内片を採らさ  
せ、あつたの袋を焼つて、乞合に採集と奨励  
し、えんを研究の材料に供へた、ちうあつた、京都  
のひき都、り名無の破片もあつた、若びあつた、赤  
ちう磁の破片もあつた、打碎いて原料とせ、ちうあ  
ちうと思ひ、ちうあつた、ちう木末の破片も

ついでにとも云へ得りしおちろく感せらる

海岸にゆき破片の破波に打寄せらるる川の  
川を棄てるとよか流れて出たり或は雨あふの  
ふ中このか流し出たりするよかあらうま  
し舟の難破のよかに海深と段しよか波の  
作用は減り打上りとも思ふよか實に海平  
はどのを多く内無か埋まりよか知んよかの  
茶屋のよかあつた是利時代は堺津が支  
那の物無を船載せし持来んと堺は  
りの長伸が死守と多く彼に人を考ふよか  
日本海に難破しと宰しと無をみすし華つた

藤原

よかどれをよかあふかぬん支那からのよか  
内地に在りしよかを海路輸送の途次回し運  
命に運出つたよかも亦次々と少くするよか  
ある。今の海路を乗用へるから現にまを取上  
げに例もあつた。亦船釣りと鳴りて船が内無を  
撞しよかをよか過るか釣り上げに例もあつた  
茶人物よかの船釣りを得たよかをよか  
とするよか實に無理の事いことゆに中  
の船載品もあつた譯か船と共に沈んだ船に  
腐朽しよか持たれ破損せしよかつとらうてみる  
ゆにゆか無麻のよか多く正の清海に保た  
てらるるよかの珍重するよか十分の價がある

日令七常の一異を花比、そんち磁の大形の株  
 差、磁が内部も外面も唯比去く海中に在つ  
 るが先、洋がぬけておる比、地この疵もさく  
 六貝さとの言生もさく、いよかあつ比、香さ  
 の言、さく、極も、ハ形の貝が二のば、あつ生  
 くのわ比、さく、鞘釣りを得比よ、あ、  
 内磁のコンナ、さく、定から考くると、土も、さく  
 乃、後因があるやうと思ふ。朝鮮、あ、さく、  
 土磁器を埋め、爪もあるが、日本の上代、  
 輪のこ、さく、**月**の紀を埋め、比例、あ、  
 のやう、さく、**無**の部を耕心、さく、**土**を  
 掘り、土中の、**土**磁の碎片を得、さく、**土**を

土磁の株

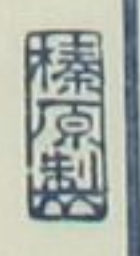
麻のつる、**土**の海中、**土**を掘り、さく、**土**を  
 後因を法、さく、**土**を掘り、さく、**土**を掘り、  
 して、**土**の捕獲、さく、**土**を掘り、さく、**土**を掘り、  
 事、さく、**土**が、**土**の、**土**の、**土**の、**土**の、  
 繋いで、**土**を、**土**を、**土**を、**土**を、  
 リ、**土**に、**土**の、**土**の、**土**の、**土**の、  
 人間の、**土**の、**土**の、**土**の、**土**の、  
 帝、**土**の、**土**の、**土**の、**土**の、  
 一、**土**の、**土**の、**土**の、**土**の、  
 の、**土**の、**土**の、**土**の、**土**の、

慶長年間關白豊臣秀吉織  
 田有樂齋ニ命ジテ喫茶用ノ陶器ヲ九州ニ需メシム、有樂



異国で育ちてゐるが、もう異国の日本のことと思つて  
ゐる。あつた。程思つてゐる。風情を方々するよふな  
あつた。

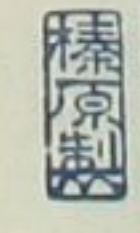
秋も漸やく深きと覚へる。風も寂しくあつた。昔の  
ささげの舞。天に流るる月。雨後の氣が人  
を逼る。来りて人を緊張せしめる。物思ひする身  
も夜の長さの林又さめてハヒさましくの事と思  
ひしめる。情氣を催せしめれば暑氣も花散り  
るる去つて、初めに土体の快よさを感ずる。秋は  
好季節にあらう。節を曳くもも夜書に親  
しむる北時もある。池邊に植へたる秋が木  
の葉茂して優しき花の満ちる古い枝が池に



垂れ流るる。こころもさびしくさびしい。林も  
昨日午前庭に栽へたお白の芝草谷もいどく  
丈が育ちくさうつて、花を毎朝翳つてゐる。秋の  
草花も富むか。俺んハ芝草実と秋とを愛  
する。庭の隅くさあつた茶木の樹も、いつの間か  
か白いの葉花を著してゐる。毎年一回いやは  
し思ふが、茶の成るゆへ人間は知んないやうに  
極内こそつといひくさうな氣がする。さう思  
雅の家も甚だ風情がある。野菊や秋海棠  
が垣根のちやうどさあつて、咲へてゐるのも愛  
すべしである。果物の四季もささげがあるが殊  
々秋は豊作の味をささる。この秋が多い。柿



や葡萄や無花果や栗をいひ誰れも歓迎する  
よき海合村の別業の柿ハ婢僕が面白  
ふに帰り住に掃つて来ることがよく取り切  
るのを津山にある。秋香の食餌を飾る  
ハ御室の信濃川の鮭と上方産の松茸の  
るが、まき芽の汁を求めるとよく自然な  
つて来ると味を満ち得るのも秋の味  
がである。丸来秋の感ずることが年を逐ふ  
深くする。閑寂を味ふの極合ハ右に此の身  
の即ちあるが、七の世おのり人を許さ  
の。謝年氣分が大地に漲つてゐる、日夜  
ひ来り掃んとして掃ひ得るを太極



見

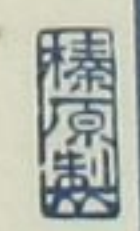
十月八日記

○横山大観が伊太利へ進出して羅馬で日本  
畫の展覧會を催したことは近來面白い出来  
事である。大観由来、伊太利諸新聞紙が日本  
画を評論したるを譯して報先方、載せ  
た。彼四人が如何に日本畫を感したかの  
端が知れて其の興味を窺ふことが出来る。  
近年外國の特ニ日本畫を研究してゐる  
かある。その内、其の日本人も及ぶ  
觀察をしてゐるものもあるが、其の極めて  
である。大体まじく日本畫を理解する  
まじく、列つて居る。無理もないことである。

彼等伊太利人の目まゝ日本畫の原始的の意を以て  
 せん迄つてあつたといふ事をいふも極めて  
 単化の極致に達するにせんとす。彼等其のあ  
 らぬに西洋の西洋畫のちいさの画といふ異つること  
 を思ふに陳列會の入口に全然コンクリートに  
 志すのつて進入のふつたがらんとす。彼等其のあ  
 かつたが甚だ是れ未だな。彼等のあつたことの日  
 本書の市山や龍と見え、お南後のきり  
 りのうづ誰んか書けやうと評し、このかたあ  
 らぬ、恰も單純たる彼等のあつたやうな  
 ことか、恰もことか、理解し、さういふことか、此評のち  
東京

ら、然し得る保一伊太利人といふものの理解  
 をつけて理解をとりとめてあることか、恰も評  
 論は、恰もその現実の、ある人いふ、日本美術は  
 精神的の藝術である、魂の藝術である。魂の  
 象徴とあつて、此に発するの、此と云ふてあるが  
 此の評者も、利歌人種的に、異つた画びから其の  
 本質を、恰も我々其の完全なる、此理解か、出来ぬ  
 の、此と魂を、眠りてある。この評者も、画の  
 白き意が、注の、な、此の評者が、いろくあ  
 る、ある人いふ、日本美術の趣は、向く、在る、即  
 ち物質的の表現であり、暗示を、興へ、とす

こゝに在ると云ふてあるの、同受するも日本畫に或  
何の理解があるか見えぬ。尚ほ此の意味を更  
しく精しく云ふに評する次の如きことのがである。  
日本人の藝術に於ての如く人の美のやうに、あ  
らゆるもの、腕や指の綜合をもつてみる、深遠  
さと形而上の意味を充ちてみる、こゝにこの  
形而上の意味は、有暇や休止や含蓄や餘  
白ぶに依つて表はせる。餘白は、支那とて  
更に仔細と不用意な筆觸との彼方  
駐てしめて、完全即ち藝術にあるしその完  
全して、夢の企てを寫し集めて、その能く  
それと之を展開せしむる、こゝにありあつたこと



何の評者も又、此の以上のことと、意味を別する、ま  
は、其の現はして

日本美術の、常に、精神的、空闊氣の、寸分  
たり、不知不覚の、うら、夢の、圓く、なぶ、よ、あ、わ、の、  
、色、の、湯、巻、や、後、の、夏、の、うら、て、人、を、感、應、  
する、藝術、の、い、ま、の、。、優、々、文、人、畫、的、の、い、ま、の、  
、心、の、暗、ろ、を、お、つ、藝術、の、い、ま、の、い、ま、の、  
、と、自、己、の、觀、念、を、お、つ、現、に、別、意、する、河、南、  
を、心、の、い、ま、の、藝術、の、い、ま、の、。、何、と、する、い、ま、の、  
、術、家、が、描、體、する、風、景、を、う、動、描、する、の、前、  
、こゝに、つ、て、其、外、形、を、細、心、に、描、き、出、す、る、い、ま、の、  
、其、現、を、め、つ、て、描、き、出、す、ん、の、苦、心、する、の、い、ま、の、

ある。かゝるが如く實花の色彩は全く紙分るは  
と有り、黒白澆淡の配分も一つは春の爽快の意を  
り盛るの如く空の印象を述べてゐる。さう十分  
ある。ある。

割合に理解のあるもの、評は比較的よくある。魂は  
達するの向道に極まるもの、さういふこと、而して古い観念  
である。

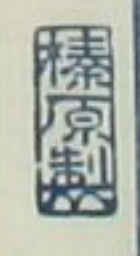
大澤墨の老ひ方の巧みさ、點に於ける彼等、  
書を留めて其の如く稱してゐる。老ひ彼等、  
ハ学術に及くると自白し、墨俗が國民的の意を  
併ひある日本人の元つて、決して其の如く  
さういふさうさう、さういふものを見ることが、利益



日本畫の長なることが理解されてゐるといふ思ひ  
さ、老ひさういふこと、お世辭も魂の畫とい  
ふへ、老ひさういふことを云ふ、墨は二  
毛が押籠つたもの、如く云ふ、さういふ、彼等も  
可なり、解りかゝつて来るといふこと、か出来さう  
元々、我輩、術を担けて、遠く彼等の目前  
に展開して見せること、彼等、日本畫を理  
解せしむる、さういふこと、如く、さういふ、大観  
の進出の徒、さういふことを信する、さういふ、あ  
る。

○吾々の印刷分紙で試みれば、無駄な校訂を排除が  
差しく日を異にして行つて、結果、ある以外、さういふ

があらはに従業員に鉛筆が節約あるを羨望する見れば百  
四五十人からあるを提出しては、是のまゝに納めたい  
が多少あるべきとあるであらう。工場敷心配を委棄  
せんは、これを捻出して見ると、不用の屑も多し、役  
主つゝのが、山々あつて、今此に役主のものを委  
却するも百圓に費入るといふのがあつた。是印せし  
るは、今此に役主つゝのものとして保存して、是の  
二版を貼りのけた台板が八千枚からあつた。工場内  
敷心配をとり、活字は無論少くとも、かまひ今位使  
用して、棄て去つた鉛筆は、やまと糊も、無数の  
あつて、<sup>（鉛筆）</sup>鉛筆も、使用も、多く、糊も、多  
くの量から集め、用ゑ送る。印刷のやり換ひは、



除ければ、紙も七割を存して、使用も、少く、この  
少からずあつた。日本紙で綴つた帳面も、何冊も  
あつて、紙屑として仕末するも、惜しいものもあつた。此等  
のものを積上げて、字をとり、取つて見ると、大層な  
ものも、親もある。是等を除いて、鄭重に、物  
を整理させれば、金をとらふと、元つて見ると、<sup>（見せ）</sup>  
ふやうな井堀へ、親がある。工場員は、多く、物資の  
便も、通ひ、ぬ、随つて、<sup>（委棄）</sup>委棄し、生ずる、<sup>（譯）</sup>  
譯、物の大切と、知らせん、為め、種々の物資  
を、<sup>（所）</sup>所に、<sup>（列）</sup>列して、<sup>（一）</sup>一々、<sup>（代）</sup>代價を、<sup>（附）</sup>附して、示し、  
これ、<sup>（七）</sup>七、<sup>（無）</sup>無駄を、防ぐ、<sup>（の）</sup>の、<sup>（一）</sup>一、<sup>（の）</sup>の、<sup>（用）</sup>用、<sup>（表）</sup>表、<sup>（を）</sup>を、<sup>（欠）</sup>欠、<sup>（の）</sup>の、<sup>（見）</sup>見、<sup>（合）</sup>合、  
社、<sup>（取）</sup>取、<sup>（日）</sup>日、<sup>（の）</sup>の、<sup>（此）</sup>此、<sup>（等）</sup>等、<sup>（の）</sup>の、<sup>（試）</sup>試、<sup>（文）</sup>文、<sup>（は）</sup>は、<sup>（從）</sup>從、<sup>（業）</sup>業、<sup>（員）</sup>員、<sup>（の）</sup>の、<sup>（皆）</sup>皆、<sup>（を）</sup>を、<sup>（緊）</sup>緊、<sup>（要）</sup>要、<sup>（法）</sup>法、

と命：服（谷）の飾争的、怒理をいつとめ、  
空ろを意においた。全体印刷工場の従業員は  
他の職工と通つて頭悩が有達してゐるか、や  
氣あつてくるといふ打直し能力を有押し得るよ  
ある。只これ外は、たゞとせぬやうにする。おの  
ら及者の習慣を養ひ、心も、有役社員の  
訓令や工場の修繕、などの差回れば、到底出  
来難い。毎々ある期、即ちこゝを繰返して  
並考するに奨励すること、工場の美風を培養  
すること、と今度の本が、志を感し  
た。此等の如き、不景氣の時に、別一之を誠心  
の好時機であつた。

漢字製

○多敷集、支行堂、三三、路方を得  
り

十月八日

### 長崎版

唐人屋裏回

七巻拾遺

堅七、八、三寸餘、幅二尺不足

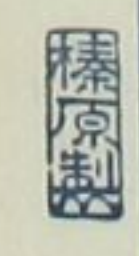
長崎勝山町、市路屋文次、在事、の板  
解説と刻、し、不、同、く

唐人以前名、町宿、仕、細、改、之、意、之  
禄元、戊辰年、長崎、市、在、事、の、山、田、十  
兵衛、物、本、城、主、銘、物、在、番、之、印  
小崎村十善寺と云所山谷谷合万万余

方所に園を構へ唐人居すと定まらるる  
永九庚子年迄九十二年に成る

之に由りて見るに北園は安永九年の政  
と云くは海を埋めて扇形たる地を  
リテ前の園と云ふべし

仔細に北園と云ふに廊外四隅に若くは東地  
にカウ堀あり東西に川あり、西方若くは  
大門あり、門内は乙名部庵と云ふあり、更に  
二の門あり、こゝに製主を附つ、二の門内は若  
くは、廊内の東隅に観音堂あり、南隅  
に天后堂あり、二の門を入りてはあり、土地  
神の敷地あり、他に家伝銘録して、才一



川原所書之矣

若くは井十四者に列し、家には大小の差あり、一  
者、居表をた大なる、家の内外に人物を画し  
各戸に名帯を張りたるべし、(櫓か)や  
のよあり、横は二番橋より、倉庫より、  
よもあり、まじりく、精細の園あり、二の門内  
内は三名の女人あり、傾城の交替して出入  
とす、不也、唐人の十数人行列をうへ、  
この入舟の唐人居舟神と拜下んます、  
の道中より

余多く唐人居表の園をえたるに、北園の如き  
又くあり、儂に十の園を不唐人居舟神

入る復物家の用ニ供せんことを思ふ。  
〇〇〇

借用証文

一通

藤田係右奉の 大高徳右二門宛

一 借金執り也 五分利付

右係藤田困窮ニ付為改革  
無指入日ニ付金借用ニ付  
貸出也且満之儀ニ付子  
着込ニ元利無指入高止  
可一為後。仍少件



文化十二年

亥十一月 藤田次中右奉の判

大高徳右二門殿

包紙ニ云

藤田次中右二門宛に 主ねる  
のり三斗形を授入

借主の即ち藤田東湖の父也其子大  
高の當時亦此の如しと云ふ事高家也  
此者其子大高家と云ふ事高家也  
と見ん出ぬの終に及んばせりし  
と見んぬ。各家の証文取とてし



そねり面知り

大道通寶

七銭、擬して花梅の通宝の古画を  
占ふ数心

枕栗山人抄書有甚と云ん心初代  
馬馬の心と云くやう大の泥りよふ

馬馬の傳言云く

此来古銭のむある今回する下は後  
似て後よりより京都の御宗通寶  
の何りかたき往にようるれもかたき  
ある大道といふるもやうるも



んり人こそる人といふ其れき者の穴  
をさがし名世の通言によそくも  
んか一撰とらうぬ下るに其徳を  
かし用るもとわくし無多天皇  
姫の乱王をいあるに其時の事王もや  
し一撰をひの通寶を印するにたぬ不  
か角あるをみと不通るやつとわくぬも  
ちるのかん昔もつふた中へ文りも通  
用するもん心名をなきかん昔の身  
体をつかしてあるもいぬらの鉄く  
とあはくくく不るの我身を願て撰  
のるんもくも、願撰大道通寶と

うけとせ即買うしとまの西十の文  
とめけとくしと美佐くせうきく  
いこぬ

えの因う方ぬをえふべし

再行六六の書しと古銭に擬し  
因う信斗九十六支、多んくは附  
いと紙漉を果す、天の次の各  
集り分をえふべし一例を卷八の  
五版(五)の注に云く此七のぬゆの  
こぬときいづりある、いんどうやふす  
まの(六)のきこをするもある(道平)の  
寶に云く此のつらく予の古の守りし付

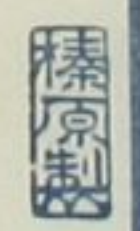


けおく、ちんむうあ、いんいんきこるをす  
とある

の関に任をいろうの句集をぬい後みし今  
らり句をみだりに書さうく

汁鍋に玉の霏や早苗取  
又主のとしの所野奈を此一茶  
雷の圓に乗、こきて後うまけり漱石  
直家いん、さうつた、あとり、海又子欲  
二枚投けて寺の様か、涼又此  
度、身をささる、似、秋の風、為宮  
あけか、行く、行、た、に、お、と、ち、く、夜、に

去き夜をさまく思ひぬりけり  
 中ころの海からそそく暮るの花  
 打とけて氷とみやちのうら  
 けとみある節の骨や秋の風  
 朝空ハ細珠の糸も咲きにけり  
 秋まじい我をけり通すか  
 遠山ハ赤き客あつ冬木立 把一  
 糸落を細腰もき案山子也 甚打  
 こからしや何に世流る家五軒 白上  
 葛枯れ我も恥づ降しうふ 鬼也  
 松虫よ美人の袖は落ちて死ぬ 甚打  
 中あふ家もさしそこも梅咲ぬ 白上



ちの云いぬ我にうらつける合の花  
 梵不の志ん花も路の露 甚打  
 二村に竹屋一軒冬木立 白上  
 逢あふは紅葉の氷を踏ぬふ 日  
 世とよむ心風の香も暮るさ 日  
 人のうらみ深しと佳し雪の空 一茶



# 今様二人 島浦人

## キネマフアンの 高田早苗君と サイン・コサインの 中村萬吉君

同姓同名が生む

微笑ましいお話

同姓同名であるために起る喜悲劇は、おおよそ廣い世の中には多々ある事であらう。だがしかし、生れ落ちたみどりごは自分が將來名乗らなければならぬ姓名がどんな話題を提供すると、思はなかつたらう。第一學院在學の山中鹿之助君なんかはその御前さんの講談英雄崇拜の氣持にはうれしユーモアを感じさされて愉快だ。

……**此處**……に變つた同姓同名の人を紹介する。實業院裁判法學博士早稻田大學校長といへば、式

の書生ツボだ、彼は語つた別には私の姓名に興味があるわけはないが、語呂が好いのでつたのださうだ、學園に入學したのは知人が早稻田を出た人が多

……**憂鬱**……になつたらしい。寫眞の攝が彼として憂鬱にした

……**工口**……的なプロマイドが貼つてあつた、が併しながら彼も一箇の善良な學生高田早苗君であり木蘭一遍鹿鹿島高田君である

……**給仕**……として働いてゐる事務所を訪れた人は受付にむつたりした彼を見る彼はあまりに無口なるが故に學生に嫌はれる、併し

……**憂鬱**……になつたらしい。寫眞の攝が彼として憂鬱にした

……**工口**……的なプロマイドが貼つてあつた、が併しながら彼も一箇の善良な學生高田早苗君であり木蘭一遍鹿鹿島高田君である

……**給仕**……として働いてゐる事務所を訪れた人は受付にむつたりした彼を見る彼はあまりに無口なるが故に學生に嫌はれる、併し

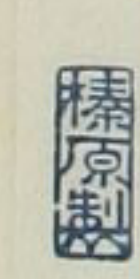
……**憂鬱**……になつたらしい。寫眞の攝が彼として憂鬱にした

……**工口**……的なプロマイドが貼つてあつた、が併しながら彼も一箇の善良な學生高田早苗君であり木蘭一遍鹿鹿島高田君である

……**給仕**……として働いてゐる事務所を訪れた人は受付にむつたりした彼を見る彼はあまりに無口なるが故に學生に嫌はれる、併し

……**憂鬱**……になつたらしい。寫眞の攝が彼として憂鬱にした

○日本に昔年ちや花面、こつじまの金裁が  
非ず、流行しと都部共ニ熱中し先からマニ  
ヤに四指つたかろ如くであつたこと、自分の若い頃  
で、こつじまの美の現狀の具合、百四の巻の  
千四の巻、貴女、貴女、此の技藝、産を被  
へ、こつじまの美の現狀の具合、百四の巻の  
千四の巻、貴女、貴女、此の技藝、産を被



のハララダの千エリッポである。全体が七海に  
ハ海而して土地の低い退潮の地である。こ  
国最云らるる(大島)に所と云ふ人も其國  
養が非者よ進めしめて、政跡も其を認  
めてみる。然るに一千六百三十七年に何か動機  
であつた。何れぬが、千エリッポが流りし出  
して都人士の恰も其為に胃をえんこととく  
之んと夢中のまう、就鳥に金銭を賭けしや  
一株の根に数千枚の金を賭けし。さて其が  
出た花が若しと見ると、其事が裏つた。その出ん  
ハ賭に勝ち、平凡の事、負けたることを評し  
此の賭博の為め、非者たる悲劇が起つた。



と、行偏史上るも各事の中、中々くうりてゐる。勿論  
賭博的のマニヤの故り、後かそくたか、人か考  
め、千エリッポ培養術が、近々其の存在、数七非者  
と結んで、今この世界に誰ん知らぬ、そのいふ  
う、まうら、北點に吾二三の並、或は一時のた  
胃かえん、流行して、マニヤかある、誰のた  
獻みず、國家任海、何ん、其後、考さす  
一時の泡沫、名なき、そのつた、その結果、北  
七點、おあ、かある。

○美谷の波がこり、一三、曆の年、ある、その人連ハ  
紀念、何ん感、其を昔の文を、定、せよ、と云ふ  
て、未、松、お、書、く、こと、も、その、お、舞、あ、て、

おると此の如く、信じてあるのか、様子がゆる  
四章よいか減のきことちのてやつた。其の要飲  
九の如くである。

自分お波君と久敬し七十一を印した。十年  
歩まのお波君のお若いことだ。自分の還暦  
の時を振り返つて今と比較して見ると、些  
しも変つたもの思ひぬ。お波君が七十一年に  
あつたに他の私の事をいふもソット荒か  
と推測さす。自分が平素お君に羨ましいの  
ハ、君の文藝上の著述のお手か少年にあ  
ると言ふことだ。少年と云ふは、お手かとい  
ふんのおのつから、氣が荒くる。少年を



お手か業を振つてゐるときは自身七少年  
氣えりてあつた。ぬらぬら、氣の荒くる  
ものも道徳がある。西洋に不老長壽の秘  
訣と云はれてゐるを、少年に親しむこ  
とが秘訣の一とてゐる。或る老婦士の体験  
から出た談、若い女と若くは、若くは親し  
むことが、不老長壽の秘訣と云ふ所だ。若くは  
あつてゐる。お波君が還暦の年、さつて  
一向若いのに、つゞき若いよさを、お手かさ  
かして、私の羨ましいに、此の如くである。君が少  
年如きをお手かおと、さういふところ、若くは  
それから最早、四十年もさういふところ。

君のおとどを羨み快楽の宮に葦油を以  
てしよか金圓を以てけけけとあつらふか  
今も十五六の年位の人を以て之に類と云ふ  
てある成人の内は君のお伽を羨んで育つ  
た人も非余り少いあるはお伽を羨んで  
ハ業を書くは少い道も承けし冬に  
儼か 又海濱することもあるに列する家の也  
希にお伽を羨むと云ふと羨むことして遠く  
へて懸きまつの間もあつて一年を忘るゝか  
るゝといふのである。君一人が或十萬萬の  
児童の家庭教師となり又或十萬萬の  
幼穉園児の教師となり慈母以上



の葦油を以てしよか金圓を以てけけけとあつらふか  
今も十五六の年位の人を以て之に類と云ふ  
てある成人の内は君のお伽を羨んで育つ  
た人も非余り少いあるはお伽を羨んで  
ハ業を書くは少い道も承けし冬に  
儼か 又海濱することもあるに列する家の也  
希にお伽を羨むと云ふと羨むことして遠く  
へて懸きまつの間もあつて一年を忘るゝか  
るゝといふのである。君一人が或十萬萬の  
児童の家庭教師となり又或十萬萬の  
幼穉園児の教師となり慈母以上



の七年教育の定む偉大なる功ありと云ひけるを得ぬ。

余り説く所も亦お伽歌のやうな事ありあつた。○前頁にチユリツプ、マニヤの事を書いたが、阿基地がチユリツプで世界の名をいふ為め、フランジ、終人ルハ説くまゝ、チユリツプが材料に考へられてゐる。偶々十一月の朝も年上、本村毅の事いれ一ニの例が出てゐるから、こゝに、叔父、前掲の記を彼は冬にさし

標原

するかを、歸納して来たら随分面白だらうと、私は今でもその對比研究の望みを捨てかねてゐる。

たゞ日本の小鳥とオランダのチユリツプと、結果に現はれた差異を云へば、小鳥は格別日本の副業としてさへ賣する例は無かつたが、オランダではチユリツプが國家の一番重要な生産の一つになつて今日まで續いてゐる。もう一つ、日本の小鳥は文學方面でせいゝ「歌を忘れたカナリヤ」をはやらせたに止まるに反し、オランダのチユリツプは種々の童謡には元よりの事、世界的大作の中に一部の題材として取り入れられ、中にはそれを主題となした小説さへある。

(二)

此の花を主題にした小説と云へば、諸君の頭に先づアレクサンデル・デュマの「黒チユリツプ」が浮んで來ざるを得まい。これを一部の題材に用ゐたので私の記憶に存するのは、オルツイ夫人の「陽氣な騎士」である。左の一節を見よ。

『私のスクアルゼン・カトウと云ふ球根には一萬四千フロリン拂ひましたよ』とベレスティンは嬉しげうに云つた。『今はもう二萬フロリンにだつて賣る氣はありません』

『オーフェルフエーの或る男がシヨーン・ユフラウの變種から素敵な新種を作り出して、球根も申分なく發育してゐると云ふ話をききました。何でも來週競賣に出るさうです』とファン・ジルケンが云つた。

『市場の呼値は初めから少くとも一萬六千フロリンはするてせう』と、ファン・デル・メルがその話を補足した。

『もしそれが話程の大した代物なら私はもとも出しますよ。』

『遅いですよ、もう。今日午後私があれば買ひました』と、ベレスティンがからりと笑つた。『あの世評は嘘でも何でもありません。私はあんな立派な球根は見つた事が無い。』

『あなたが買はれた？』と、市長は同僚の議員を顧みて云つたが、その調子には親しみ以外の或る調子が含まつてゐた。

『え、今日午後の事です。私は今もそれを胴着の内かくしに持つてゐます。』

と云つて彼は臍腹へ手を入れ、心臓近くに視めてゐる高價な球根が果して確かにそこにあるかどうか觸つてみた。(「陽氣な騎士」二八頁)

何千金の球根の賣買の話に夢中になつてゐるのからでも察しが付くやうに、彼等はみんな市應の高役で、オランダ新築都市のブルジョアである。この話のなされてゐるのは年越の夜の事だが、

その頃から買ひこんだ球根を、丹精して春さきから芽を吹き出させ、そして花を咲かせてみて、儲けるも腐るも勝負はまきまるのだ。球根を割つてみたとて逸品かどうか分るわけはなし、花の開くまで悪悪が全く封ぜられてゐるのだから、成程、投機としては面白いかも知れない。韻文でも分る通り球根にも種々の固有名称が付けられてゐるのは、日本の朝顔と同じである。

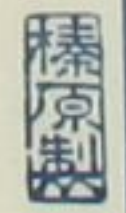
扱て、いま一つの小説はアメリカの作家フィッツ・ジェームズ・オプライエンの「チユリツプの壺」である。私は此の作家に就いてわが國に語る人少きを怪しむ者だが、彼はその奇怪な作品の故に第二世ボウと言はれ、或はロココ式小説作家と稱せられてゐる。その「ダイヤモンド・レンヅ」は探偵小説の、又「何？」は怪奇小説の、共に代表的逸品と稱せられてゐる。

「チユリツプの壺」はニューヨークに移住したオランダ人を題材にしたもので、主人公の銀行家は妻の不貞を疑ひ、その腹から生れたのだからと自分の子供にさへ一物も残さず、莫大なその遺産はいづれに隠匿されたか疑問になつてゐたが、チユリツプの壺から発見さるゝに到る一種怪談めいたものである。

つまり主人公がオランダ人であつただけに、庭園に鳥型をなしてチユリツプが栽培されてゐるのが、埋められた金を捜すため土が掘りかへされて、花の鳥の消えゆく描寫がある。その一節、世にも美しき極みである。

併し何と言つても最もよく人口に膾炙してゐる作は最初に言つたデユマの「黒チユリツプ」でなければならぬ。  
これが抄譯はかつて本誌にも載つたし、坊間二三の譯書もある。最も古くは既に私達の少年時代、押川春浪の「ヘーグの奇怪塔」と題して譯案があつた位だから、吾邦でも可なり廣く世に流布してゐるのだが、

〇吾く五六の同人が創めた稀書後案今ハ才六期  
 が畢んらんしオ七期ハ創らんとしてつゝ即ち創  
 めから十二年を経過し此の極めと云ふ事案が  
 三ろ人程かの範圍に欲する事案過るの故今  
 が聊も滞りなく順調に任じし此のハある  
 である。殊に大衆的潮流が何れもも塵倒し  
 舊式の木版印刷を以て過去のものと見做す  
 るの故、是れと生命として此事業が継続し  
 て行くものも亦疎と云へんものもあつて居る位  
 である。大抵此やうの仕事は初めがよきものもあつた  
 振はず十年と續かるといふ例はあつた。此  
 二三年を過ぎると従つて継続性が認めらるゝと



ふも亦意のびらる。才一復物をさくき稀歎書  
初期のこまよひよかあつたつておつやうと思  
九か、美陰ハさうひちきく、草創の途に珍籍を  
捜かすことかろうく困難であつた。どこへ何か  
秘めであるか、一向に足高かつかろうた。在所が  
知んば、一七〇を借り出すことが容易か  
つた。然るにぬり物を重ぬくに従つて、珍くしい  
よみが、目やまくと見ありや、亦見えを借りるこ  
とも容易さうな。尤も復物を忠實に修  
行することか、花書家の信用を失し、花書家  
より近人の珍籍を提供するの氣(運)を作つた  
から、外さうさうい、まが考の二期を重ぬくこと

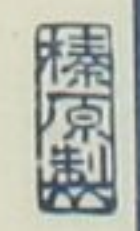
復物の原本が益々少くさうてきき、好書家  
の執味態をとり、購讀者も見え、連んで先  
かつ、強へて来る傾向がある。此次の七期に  
定一に復物を本の目録をえると、一ツぶ撰りの  
珍籍に既往六期に、<sup>建</sup>傳つてみるの、<sup>事</sup>実  
である。考つて見ると、隠れてみる、珍者も、<sup>籍</sup>も  
いよみある、まぶどんを、隠してあるか、<sup>い</sup>ま  
まが、こんどのやうに、<sup>あ</sup>つて現れてくることさうい  
十期位まで、<sup>結</sup>續か出来さういぬ。實を云  
と、今が、<sup>神</sup>脂の乗つた時、刻二七摺河七、<sup>復</sup>物  
と、まぶの、<sup>コ</sup>ツを、<sup>い</sup>つて、<sup>ま</sup>ぶ、<sup>あ</sup>つて、<sup>あ</sup>る、<sup>の</sup>、<sup>れ</sup>  
復物と、まぶ、<sup>こ</sup>と、<sup>七</sup>、<sup>実</sup>の、<sup>面</sup>倒る、<sup>事</sup>業、<sup>の</sup>、<sup>刻</sup>二

をいふに其技が巧ひ也。現代の風を深み味のもの  
である。まじり複物をとりくくもの。元禄ま  
傑の敗れどこまむ也其時の面目がある。存心  
の。まじりをとりくくもの。一柱のエツを。今得  
—まじりもの。今の利エも招めも其業創  
始以来誘はしと習熟があるから、時代くの特  
徴もか現はすまじり。進んぬるもの。併し  
考へて見ると心細いもの。今の利エや招めか死に  
まんば、更なるまじり代り。よがあること。思  
ぬ。おぼは上り用紙が。時代化しつてあつて、  
古法に漉いた紙が。追々無くなる。一年毎に。南  
の紙を。扱へる。あつて。か。容易い。恐る

いふも遠か。今く現代に。まじり。一と見  
こと複物の出来。どけ。今やつて。まじり。他  
今の如き。純正の複物。絶對に。望まぬ。こと  
ある。まじり。おぼ。才七幼の。中。複物。目録  
か。偶に。利達。一と。か。不感の。一端を。扱へる。お  
(十月十号)

の。漢語。公。娼。おぼ。を。教へる。こと。ハ。西洋。の。除  
く。無い。こと。ハ。日本。の。上。代。の。紙  
も。複物。の。士。氣。の。か。い。は。つ。と。まじり。飽ま  
が。禁。近。主義。を。將。校。の。論。を。守。つ。て  
ある。人間。の。本。法。を。抑。く。こと。ハ。まじり。無いと  
いふ。論。も。ある。けん。けん。一方。の。極。毒。の。罹。る。危

突があるといふ衛生論もある。梅毒と云ふ病  
氣ハ七と實地に行つたといふが、まんが兵衛士  
といふ歌謡も傳つてから各地に日産あり  
日本を以て文祿の役に将士が之れを感して日本  
の種が蒔かれたといふのである。西洋の梅毒  
を恐るゝ為の公私の娼婦を帯びて撲滅ハ  
をすゝること勿論だが、就中七級商者が娼婦  
の長を捕ふに出張してゐる。古くは海軍の出る所  
を檢めたり消毒したりすると云ふことだ。丸木砂  
土といふ名が新青年の女性西部戦線といふ  
題の者かんとあるのを讀んで見ると、此業者の  
送つてあるのが戦場場の公娼を研定して



兵衛から軍人の基のれといふが、公娼は將  
校用下士用兵隊用と三階級に分つてゐる所  
が多い。西部戦線の聯合軍側には公娼設備  
はよく出来てゐる所が、アミアン、アエ  
ブル、ルウアン等では、家の前には將校用の兵隊  
用の赤い電燈が、中々あり、或人として佛國  
人又ハ獨逸人の占領地帯から逃げて来たといふ  
あつたらうな、淫をいへば、娼婦も一環互  
どいて、侮後ハバウツツとあり、後方陣地には戦  
争前からの娼家の遺物を利用して不始多い  
娼婦の行動もさまざま自由娼婦軍の方々に散  
在してゐること、そのまゝである。この賣春娼婦

の秩序が定められてゐる所である。娼婦も對する  
規定もあつて、時間の定めや、梅毒のある女を  
拒む権利を與へた所もあるやうだが、こん等七  
區さびあつたらう。前七區あるの兵隊も  
娼家の前さへ眼を待つ兵が雄健とて  
飽とさして立つてゐる。英人がしエブスの者とい  
ふのは、信るとベツツヌの赤い電燈ハ下の方大  
の角さあつて約る五丁ばかりの兵士が飽を  
さし、家さの三人の女がみた。グシエブスの從  
の法をさして一人の娼代か十法だ、この時の換  
算むい約八志だか、目ら、今も金む四回ひある。  
一人の女が一通る、一大隊の兵隊とこさすの



五洲と高とまとき、保しえんさ、女は利度三内  
河以上の身体が續かるとさう、ことだか、こも女

以上の新ち年の記さうと、捕得たの女は一人の女が  
一大隊の女士を一通る、こもさう、さう、さう、入  
つたことである。自人のさう、来る、更し、河が、  
のをさう、西洋人の交換、早く、ある、  
る人、一、十三回交換、比例がある、とさう、  
さう、女の方、さう、解さう、とさう、さう、  
さう、日本から、さう、さう、さう、さう、  
の、さう、さう、さう、さう、さう、  
と、さう、さう、さう、さう、さう、

揆をすることあり。司令官の余令方の揚代に親  
定しとあり。婦婦を愛ふ。よく氏名や敵婦の名ま  
で録す。やうな事難のうらもあるやうに書かんと  
あるが。うら。厄あることもある。英四の荒い事  
久の義勇兵を。初めに婦婦。文振する様  
今をゆて。その興味を感ずると共。悪疾に  
感得して。整備の勤務に。たたく。除め。て却  
つて命が助かつて。田舎。に。い。く。と。あ。る。こ。と。云  
い。て。お。る。

婦婦。の。ま。ま。の。信。令。女。持。あ。つ。て。揚。代。の。内。儀。に  
を。後。り。上。げ。る。の。は。婦。婦。し。る。う。ら。く。苦。しい。と。云。わ。ん  
こ。あ。る。女。春。の。兵。士。七。自。然。女。持。の。秘。心。を。得。ぬ。は

る。ぬ。の。で。鑑。法。を。の。始。終。を。つ。か。つ。て。浴。び。の。時  
の。地。長。を。固。く。の。望。査。の。軍。人。の。時。間。が。掃  
け。り。と。う。ら。と。古。剣。の。夜。甚。の。下。と。か。き。回。す。と  
潜。伏。し。て。あ。る。兵。が。這。出。る。こ。と。が。驚。ろ。と。あ。る。ま。は  
の。潜。伏。方。の。あ。る。死。活。の。間。に。あ。る。人。間。が。本。能  
満。足。の。に。あ。る。に。あ。る。核。實。の。術。術。を。あ。ま。す。る  
こ。と。と。あ。る。こ。と。性。形。の。め。る。に。極。列。の。あ。る。か。い  
ル。の。に。あ。る。西。洋。の。果。実。を。持。校。や。兵。士。が。強。持  
の。為。め。と。あ。る。特。に。家。に。ゆ。く。こ。の。こ。と。を。許。さ。ん  
の。係。一。強。持。の。ゆ。も。を。た。す。陣。地。に。歸。ち。こ。と  
を。れ。す。と。あ。る。の。は。陸。地。の。女。印。買。が。出。来。て  
却。つ。て。荒。い。よ。う。の。は。味。が。あ。る。と。見。入。る。外。回

の初稿のあきおのころにあき、訪む年の記をもと  
掲記するに付いもあき所をありませし書きつ  
けりこと也

十月十四日記

○上海の陸君達 伯鴻と辨す、今日我の詩  
印刷会社に来りて二稿を一覽し、余又疑ふに二  
三の書を以て手啓自から刊するべき、吾社  
の詩の二字を冠し、清本と掲掲のを託す、而も  
清人の来り觀ふにこんと初めとす、陸、中華書  
局株式會社：長ろそ又上海書局、楊高役會社長  
ろ、其の字をとりて書を觀ふに印刷極め  
精、宋本のと選んじ印刷するに多し、余  
の書をとりて一、宋書南院の玉齋生詩

陸君製

箋注を四冊本宋版印刷する、六書を郵寄  
集注二冊も宋刻縮刷本を以て余が架下  
と與き所、存書に多し、他、唐の吹伎  
碑と瑤瑤殿に附し、四冊あり、唐の  
春の皇皇后の碑に、此碑金石萃編に收  
めたり、其の時既に亡び、今傳ふる所の、ハ鋒  
能鈍缺、見るに、此本も、瑤瑤殿に復  
た、此本も、金石部類に置くても  
也、十月十四日記

○往年國書刊行會を行き、此時は、高(重君)の全集を出し、此の因りて、



の事跡や逸事をいらくと自かた勲を述べたこと  
がある。日里村に荒干の地を賜を、そこに中士  
を築へたことも南時をき評に逸るもの一ツ  
であるが、此の中士を築くも、中士海中の  
よみを後して土石を運ばしむる皆々無料  
に労働し比つて甚もろく出来上つて、そこが  
中士海中の礼拝の場木とす。幕府が出来  
ると、あつた家とすつたとす。今大概蝦夷所  
が北の家：題する詩を得た

幕府幕吏今何至、小富峯と忘秋氣

寒

重花の僅かに百俵計りの小吏はあつた



大改が御ら奉行であつたは、是れを萬回の日使  
か出来た、南時の一萬回、さうさうの大金はあ  
つた。重花は北の家、困る重花、ころか之んを  
誇つて自祝し比と云つてある。あつた、斯う傳を  
さうし得るよ、凡才のさう得る所はあつた。従  
ハ後、罪を得て、江の大溝の領主分都左京  
亮に、預けられた。一二年、をむき、其家は  
と欺いて、辨板の事を説き、連て出し、金中が  
脱走し比とある。まんか又、速捕さん、今、あ  
つた。日向國、肥城、主伊東、修紀、大、入、預けら  
れ、伊東家の、死、比、尺、備、け、の、為、あ、さ、幕  
府、出、張、し、比、時、伊、東、家、の、構、え、い、ま、ま、を、

つとと歎息の如くをせよとある。こんをいふか  
い事実に属するから書きつけを正しく傳の  
補遺に充つ。

○此の教養中丸善書店と云き通書ありの如  
今いふ所の通といふを難し得ては本翻漢書  
に余が書と豆本逆つと云ふことが二ヶ所出  
てありの如くある。亦一編尋常なるもの  
といふの「いかん」の内は左の如く記してある

○寸珍本

いかにあつたか人の如く味を投じさう  
まうのに又寸珍本がある。所謂「豆本」  
とんが甚多寡として、市島春城におへ



正に天下一品である。昭和二年十月に  
第が夏に之をてんた。その時の目録を  
見ると、この豆本は「和漢洋」とり  
混せて「百の四書」約二千五百五十二  
冊と云ふから数つていふの、四書五經  
の類から行典、聖書、細見本、歌集  
詩集から注本、抄本、養子の抄、  
方から千品本、印漢、漢語本、  
らから種類を区別してある。この豆  
本及びの第の書は、  
大きな文字を書かんと云ふので面白

他は自分のことと言ひ及んぬる所があるが、  
三本は蒐集のついで、まじは僅かに一行のみ、  
多しからし。……引くもの及ばない。此者、若  
し河原為書といふ人の此者のおる者物も  
とそりて考へてみる。自分の今もいふ人  
とある。自分此者を贈ふに譯、いかよの  
を讀んで見たいと思つたのである。自分の  
が出ておやうと思はうつた。三本の鼻書  
の者物である。果しとんをいかよの部  
類に入るべきことあるか。世といふと  
云いんとあつた。鼻書はあつた。外は他一  
條件が附随してわくのを指して、いかよと云

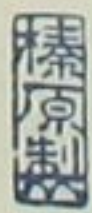
藤原

かのが通例である。他の一条件といふのは人の姓  
を来すことである。今物づくは此者も  
ある。取の子宮とか人成るなどの類である。書物に  
いかよと云ふ。一則に落ちた汚穢の者物も  
ある。いふものも云ふ。寸珍本に人、  
いふ。要するに、いふも無へて、いふか。三本を愛  
する。いふが言を考へて細書するを限ら  
ない。大字を考へていふて、いふと云ふ  
もの。噴飯すもいふ。十月十日  
○今日坊間を二三の書を贈ふ左の如し

平田篤胤行本

赤縣度制考

無罪半紙本墨附百枚許上卷二冊  
卷首に初稿とあり又未許他見」とあ  
り、本文標題の次に「唐厚輪池屋代  
笈需」とあり、其下に「昔者の名あり、  
版本の輪池云々の無りしや、之を今  
手えに版本を、對檢する能はず、屋  
代と交渉ありし、推し得べし、稿を  
得る所の斯の如きこと也、全篇餘鳩貴  
斑々著者苦心の迹を認るべし、五十四  
を授けし家珍とす、家珍言を都  
歎々未だ馬鹿の行をも一もあらず  
也



一月虹館法書

四帖紙入

こゝ米苅節の書簡類を刻し、其の  
毎の阿王傳の跋を附す、墨筆王  
の鑑選に係るものか、米苅節の書  
帖多く日本に未だ有り得ぬもの地帖  
と見るゝ初め也、書も刻し甚は  
匠を乞ふ、一匣七亦精妙なるもの

一 雙梅影閣書影 六冊

唐本也、年長沙葉氏の刊する所  
書名が隠し示すこと、房中書并

に云ん：世かき書を其取刊一多ふ也  
首卷：ねらる所云素女経云素女方  
云玉房秘訣云洞玄子云天地陰陽交  
歎大梁賦二卷ももち橋集板橋旋記  
其門書船娘遊園小語、橋の祝詞、  
佐白、鼓詞、詩壇點将録、秦雲、桂英  
小謡、皆工口テツクものあり、首卷：ね  
らる所のもの多く、支那の佚して吾か  
丹波康頼が鼓詞心方、又載すことによ  
り採入大梁賦もむらむら、鼓壇石、  
いし出づ、いしうし九葉、河の古、  
其若白行筒、白塔、見才、と云

橋本

ふも珍し、原本：誤脱甚く多く、後  
継りたるものあり、據るべし、支那の淫  
ら多き、怪しむる、陰陽の道と  
後く、男女交接の姿態と、續述し、春本  
を、るゝ、ものあり、或の、原以前支那  
の風習か、遊園心方、ある所のもの、皆  
る春本、均しきものあり、鼓詞心方：関係  
あり、托して、思はるるものあり、  
あるものあり、然、此の首卷、通行本  
として、傳りたることあり、支那政府公、  
禁、らるるものあり、然、らるるものあり、  
大梁賦、編者の記する所、橋、楊

升唐傳述之旋書秘辛云々とあり、旋書  
秘辛ハ支那の天子の寵姫を求むる  
官人の高麗探査とあり、記す也  
支那の秘辛ハこんど怪しむるは  
おとろせし、楊升唐秘托の秘心と  
ハ初めしむる也

○日本の風土や人情其他を外國に紹介するものも自合  
加後叙を試みることも多し、然れども外人を對するに  
あることを試みるの初めとあるもの、頗る勝手な  
迷ふ所あり、二三の東英文を書き、人に大要を  
口授する下、おとろせし、三日間ハ四十枚

比かり書いせ見れば、外人の理解せしむる  
六、ういすゆいりくある中、家庭より格別  
次方長幼伯叔父母の關係や、藝術をいかに  
説く、難きを感ず、その苦心して考へ  
ことを挙げんとす

一日本ハ俗とあり、惠科ん、そんが風土  
か出来ておる、即ち大國の如き、山が  
出来、谷がわたり、湖が出来て、甲士  
の如き、形のよふものあり、よも如く  
であるの、むす、露のこと、法市の  
如き、この、蛙の如き、よもが、元選  
あり、道あり、の、は、人、と

一 日本風景美を説いた中、外國は  
 無い林のことさえかまをうして風致  
 を添へてゐること、松と杉とを挙げ  
 松は太陽に曝るの陽樹で、法華寺の松  
 を張るのを松をうし、杉は冬集ると陰  
 鬱むる陰樹だが、こんが無けん寺や  
 客の風致がす減する、松と杉は無んば  
 日本のはり茶も体を為さぬと云ふこと  
 一 日本四季のまことと年中行事の由  
 び外人の興を引くよめを挙げ  
 一 日本人の生活を云ふ中、まことと日本  
 人の自然を愛する國民たることを云ふ

藤原

月を穿て、雪見、出づり、雨を聴く  
 ことを、まことと麻の鳴き、竹を聴く  
 ことを、ぬき、木の葉を味ふ、こんが自然  
 親、まの比が、どんふ食、むか、益、動を、楽  
 し、まこと、お、あ、の、家、庭、の、ハ、女、子、の、ア、ゴ、ム、ア  
 リ、レ、メ、ン、ト、と、し、て、挿、花、を、教、へ、る、こ、と、と、着、居、え  
 が、洗、足、び、泥、お、入、り、入、り、を、耕、心、を、し、て、お、親  
 し、ま、こ、と、漁、婦、が、海、邊、や、魚、を、捕、り  
 為、り、湯、あ、る、を、お、務、め、る、お、入、り、を、お、入、り、を、お、入、り  
 親、し、ま、こ、と、や、店、の、お、入、り、の、山、川、を  
 擬、し、り、お、入、り、を、お、入、り、珠、を、お、入、り、石、を、お、入、り  
 る、材、料、と、す、る、こ、と、と、自、然、を、お、入、り、味

である。家を木材の束で造ることも、壁を土  
で塗ること、家の戸障子を開放して  
大氣を引きこむ、平物の布を来て居る  
ことも自然に親しむのである。魚を  
を生身で喰ふこともや、火をふんばんで使  
つて日々全身浴をすること、さらにも自然  
な親しむ一端があること

一 史蹟は善悪を承けるもの、外木造である。千  
年以上の遺造物の痕跡を残してあることを  
初めとして、帝室の御遺物が上方に勅に一定  
の形を修められておられること。お建時代の  
大名の邸地が各所へ存在すること、元寇



の遺蹟が今高石の堡壘遺蹟ともいわれていること  
高野山上の群衆の墳墓が意味を失うこと  
し、おし日本のウエスウエーニンスターであるこ  
とをいって特々奉け

一 寺社并に其の文化に影響を及ぼすこと  
こと、就ては佛教が偉大な山宗行を揚し  
た為め、寺が自然の神聖なものであること  
中世紀に於て寺がいろいろの事業を営  
み、そのことと其の往後上へ大なる関係が  
あること

寺が其の領域を振舞うこと、山陰の向  
柄をやつて多くの深山が、おのりなる開け



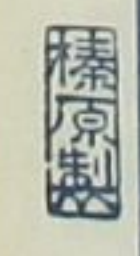
たしこと

今の寺の址は多く、細くても、四の如く  
うしろが、昔の規模を知ると、うしろ  
現在の規模は三四割しか残らず、  
うしろの如く

佛教の奈良時代より、皇土も神隱  
の時、法体とる、寺を別荘とせん  
比、係上寺が、壯麗の美を、  
と

あつた、藝術の淵源、寺を、  
たつたこと

茶儀の感化が一般社会に及ぶこと



と等

一 奈良の東大寺法隆寺唐招提寺興福寺  
等、木造のあり、千年の歴史を  
経て、佛像と共に、信託してあること、  
異な、値する、物と、  
か、  
へ、千年以前の、  
よ、  
あ、(大佛の)

一 京都の宗本山の在り、別、寺が多い  
その寺、歴史の、  
の、  
寺

ハ何れもぬ位地をよめて川故に富んではゐる上比  
れりま名園がある。中々名匠の工であること  
つて庭の模範とさるゝものも少くもなす  
大徳寺金胎石寺西芳寺オ列奉は  
皇もまゝい。帝家の離宮も桂の坊を  
その流の離宮の庭園のこときも亦名匠の  
作である。京都の宮に名園も洲草の  
ある。庭園びまも京都の井も自然  
さうさう風致もさうな所が多い。京都を  
や、離宮の三層堂法隆寺比に比  
湖をもも合する心言に絶大の公園の  
思くく世界の正敵するものもあつた

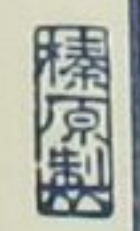


一 日本の藝術は多く寺に発してゐるから、地味  
味はちう枯淡味がある。後の劇の裡である  
能のやうなお歌と親と見えも、吹かよ  
謡曲も此味がある。能の面や服装も、  
沈鬱する所がある。色彩も、絢爛の如  
まてびかあつた。演舞の姿態もまてま  
詢和してゐる。後世の劇の如く言ふまてま  
とを辭けて趣をあらわすことを旨として  
ゐる。軍装を舞臺に言實的に使う代り  
に籠をとりてまゐる。充ることきの一例  
である。西洋の言装は飽きんが能  
まてまのよかいくともある。

西洋の藝術は多く科学の規範に據り或  
何学的なシメトリカルにやるのが日本のハ  
えといふ事柄で精神的である。科学を優  
りするから日本人の習慣はあつてくべき  
鋭利な発達をもち、直ぐに物を造り  
て過比するの事柄を用ひし  
手はおのづから人のあるのも日本人の  
特徴である。手藝の運ぶべきの軽めな  
こゝろでも異なる。値するものがある。是  
機械も多く操らるゝから斯うなる。是  
が支那に生ずるの事柄である。是術の内  
が早くから世界を征服する事柄に  
近づく

といふ事柄である。

日本の錦繍の風格の文様は就て見ると、大  
ンメチアスの文様が多いが、去かして見れば  
おのづからシメトリックである。そしてそ  
こに日本の素直の特徴がある。奔放筆  
の行くは任して敷設のやうに思ふが如  
くして敷設する。却つて一種の風味、形  
木むやう機械的のものゝ品位が異なり、深みか  
わら。一枚の白紙に路馬を考き、己がと一  
切の背景を省くのは無限の含意の如  
くある所以か、をこゝに日本画の特色がある。

墨の一段を引き一滴の墨汁を落すのも  
画家の精神の現れ、凡庸且生動が  
これに據つて起るの比、亦此大観が伊太利  
に出たして日本畫を彼西人に示したるに  
彼西人の評し比、よきと評す、彼等日本畫  
の魂の画比と云ふてある。これ一筆の觀  
じあるが墨汁の比、此を筆油に失すと  
評し、中士位は彼國の画家より善くす  
るを云ふてある。けれども、實に日本の日本畫を  
理解し、その美。中士の如き、此の比、  
凡庸が無んは、此とす。又、是れ、併  
彼等凡庸を會得するまゝ、又、此、  


まゝ、多くの年月を要するにあらう。

日本の藝術、特に工芸、個人が、  
刻々、鉄、麻の好む、或る比、よき、  
個性、中、多、人の、其、此、  
よき、ある。藝術家の生活、難か、  
究が、中、途、に、挫折し、比、こ、  
古、く、の、朝廷、や、各、藩、の、  
保護、し、比、こ、ある、の、  
也、

日本が世界に誇る武具、就中刀劍、  
時代の産物、工人の精神が、  
注が、比、よき、こ、  
人を殺す

其後さういふ死活の胡もまて、<sup>9</sup> 惟一の武  
 具であるから、其の作は精らうとせざるを得  
 る。七道理は、鍛錬の法、科、品から来  
 る。そのうち、<sup>10</sup> 実験からくるものがあるが、其の結果  
 は科名と合するものがある。右の「振る」を出  
 す。刀工が、刀を鍛冶に力をこめて、<sup>11</sup> 此の多  
 くの純徳を、<sup>12</sup> 磨くことを得るものか、百  
 鍊と云ふことが事實に行はれ、と云へば、  
 其の心も、<sup>13</sup> 思ふべきである。刀剣を重んずる  
 關係から之を飾る装剣の附屬品  
 の製造も、<sup>14</sup> 精細な精根を、<sup>15</sup> 磨く、<sup>16</sup> 此  
 の製造も、<sup>17</sup> 受けけて、<sup>18</sup> 行々の方面の工藝

漢字

小書連一此の事ある。

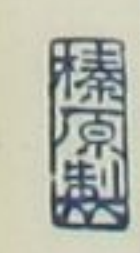
以上の四頁計りの年符を、<sup>19</sup> 凡の「ア」の助ひある  
 が、<sup>20</sup> 三三の項と、<sup>21</sup> 未だ中にある。今の日本  
 にも、<sup>22</sup> 外人の「七」の日元を、<sup>23</sup> 訪ふを例として、<sup>24</sup> 唯、<sup>25</sup> 彼  
 らうれき華族を、<sup>26</sup> 善く、<sup>27</sup> 禮の儀味の程、<sup>28</sup> 存心  
 づから、<sup>29</sup> 精進、<sup>30</sup> こと、<sup>31</sup> 容易に、<sup>32</sup> 理解、<sup>33</sup> せん、<sup>34</sup> 手  
 い、<sup>35</sup> 倦つて、<sup>36</sup> 多、<sup>37</sup> の、<sup>38</sup> がい、<sup>39</sup> フ、<sup>40</sup> フ、<sup>41</sup> 法、<sup>42</sup> 皆、<sup>43</sup> 平、<sup>44</sup> 凡、<sup>45</sup> ；  
<sup>46</sup> 際、<sup>47</sup> して、<sup>48</sup> あり、<sup>49</sup> 見、<sup>50</sup> る、<sup>51</sup> 送、<sup>52</sup> る、<sup>53</sup> の、<sup>54</sup> セ、<sup>55</sup> テ、<sup>56</sup> 外、<sup>57</sup> 文、<sup>58</sup> が、<sup>59</sup> 一  
<sup>60</sup> 漢、<sup>61</sup> 碑、<sup>62</sup> 目、<sup>63</sup> の、<sup>64</sup> 凡、<sup>65</sup> 物、<sup>66</sup> を、<sup>67</sup> 研、<sup>68</sup> 究、<sup>69</sup> して、<sup>70</sup> の、<sup>71</sup> 善、<sup>72</sup> を、<sup>73</sup> ；  
<sup>74</sup> 進、<sup>75</sup> ず、<sup>76</sup> ；<sup>77</sup> ；<sup>78</sup> ；<sup>79</sup> ；<sup>80</sup> ；<sup>81</sup> ；<sup>82</sup> ；<sup>83</sup> ；<sup>84</sup> ；<sup>85</sup> ；<sup>86</sup> ；<sup>87</sup> ；<sup>88</sup> ；<sup>89</sup> ；<sup>90</sup> ；<sup>91</sup> ；<sup>92</sup> ；<sup>93</sup> ；<sup>94</sup> ；<sup>95</sup> ；<sup>96</sup> ；<sup>97</sup> ；<sup>98</sup> ；<sup>99</sup> ；<sup>100</sup> ；<sup>101</sup> ；<sup>102</sup> ；<sup>103</sup> ；<sup>104</sup> ；<sup>105</sup> ；<sup>106</sup> ；<sup>107</sup> ；<sup>108</sup> ；<sup>109</sup> ；<sup>110</sup> ；<sup>111</sup> ；<sup>112</sup> ；<sup>113</sup> ；<sup>114</sup> ；<sup>115</sup> ；<sup>116</sup> ；<sup>117</sup> ；<sup>118</sup> ；<sup>119</sup> ；<sup>120</sup> ；<sup>121</sup> ；<sup>122</sup> ；<sup>123</sup> ；<sup>124</sup> ；<sup>125</sup> ；<sup>126</sup> ；<sup>127</sup> ；<sup>128</sup> ；<sup>129</sup> ；<sup>130</sup> ；<sup>131</sup> ；<sup>132</sup> ；<sup>133</sup> ；<sup>134</sup> ；<sup>135</sup> ；<sup>136</sup> ；<sup>137</sup> ；<sup>138</sup> ；<sup>139</sup> ；<sup>140</sup> ；<sup>141</sup> ；<sup>142</sup> ；<sup>143</sup> ；<sup>144</sup> ；<sup>145</sup> ；<sup>146</sup> ；<sup>147</sup> ；<sup>148</sup> ；<sup>149</sup> ；<sup>150</sup> ；<sup>151</sup> ；<sup>152</sup> ；<sup>153</sup> ；<sup>154</sup> ；<sup>155</sup> ；<sup>156</sup> ；<sup>157</sup> ；<sup>158</sup> ；<sup>159</sup> ；<sup>160</sup> ；<sup>161</sup> ；<sup>162</sup> ；<sup>163</sup> ；<sup>164</sup> ；<sup>165</sup> ；<sup>166</sup> ；<sup>167</sup> ；<sup>168</sup> ；<sup>169</sup> ；<sup>170</sup> ；<sup>171</sup> ；<sup>172</sup> ；<sup>173</sup> ；<sup>174</sup> ；<sup>175</sup> ；<sup>176</sup> ；<sup>177</sup> ；<sup>178</sup> ；<sup>179</sup> ；<sup>180</sup> ；<sup>181</sup> ；<sup>182</sup> ；<sup>183</sup> ；<sup>184</sup> ；<sup>185</sup> ；<sup>186</sup> ；<sup>187</sup> ；<sup>188</sup> ；<sup>189</sup> ；<sup>190</sup> ；<sup>191</sup> ；<sup>192</sup> ；<sup>193</sup> ；<sup>194</sup> ；<sup>195</sup> ；<sup>196</sup> ；<sup>197</sup> ；<sup>198</sup> ；<sup>199</sup> ；<sup>200</sup> ；<sup>201</sup> ；<sup>202</sup> ；<sup>203</sup> ；<sup>204</sup> ；<sup>205</sup> ；<sup>206</sup> ；<sup>207</sup> ；<sup>208</sup> ；<sup>209</sup> ；<sup>210</sup> ；<sup>211</sup> ；<sup>212</sup> ；<sup>213</sup> ；<sup>214</sup> ；<sup>215</sup> ；<sup>216</sup> ；<sup>217</sup> ；<sup>218</sup> ；<sup>219</sup> ；<sup>220</sup> ；<sup>221</sup> ；<sup>222</sup> ；<sup>223</sup> ；<sup>224</sup> ；<sup>225</sup> ；<sup>226</sup> ；<sup>227</sup> ；<sup>228</sup> ；<sup>229</sup> ；<sup>230</sup> ；<sup>231</sup> ；<sup>232</sup> ；<sup>233</sup> ；<sup>234</sup> ；<sup>235</sup> ；<sup>236</sup> ；<sup>237</sup> ；<sup>238</sup> ；<sup>239</sup> ；<sup>240</sup> ；<sup>241</sup> ；<sup>242</sup> ；<sup>243</sup> ；<sup>244</sup> ；<sup>245</sup> ；<sup>246</sup> ；<sup>247</sup> ；<sup>248</sup> ；<sup>249</sup> ；<sup>250</sup> ；<sup>251</sup> ；<sup>252</sup> ；<sup>253</sup> ；<sup>254</sup> ；<sup>255</sup> ；<sup>256</sup> ；<sup>257</sup> ；<sup>258</sup> ；<sup>259</sup> ；<sup>260</sup> ；<sup>261</sup> ；<sup>262</sup> ；<sup>263</sup> ；<sup>264</sup> ；<sup>265</sup> ；<sup>266</sup> ；<sup>267</sup> ；<sup>268</sup> ；<sup>269</sup> ；<sup>270</sup> ；<sup>271</sup> ；<sup>272</sup> ；<sup>273</sup> ；<sup>274</sup> ；<sup>275</sup> ；<sup>276</sup> ；<sup>277</sup> ；<sup>278</sup> ；<sup>279</sup> ；<sup>280</sup> ；<sup>281</sup> ；<sup>282</sup> ；<sup>283</sup> ；<sup>284</sup> ；<sup>285</sup> ；<sup>286</sup> ；<sup>287</sup> ；<sup>288</sup> ；<sup>289</sup> ；<sup>290</sup> ；<sup>291</sup> ；<sup>292</sup> ；<sup>293</sup> ；<sup>294</sup> ；<sup>295</sup> ；<sup>296</sup> ；<sup>297</sup> ；<sup>298</sup> ；<sup>299</sup> ；<sup>300</sup> ；<sup>301</sup> ；<sup>302</sup> ；<sup>303</sup> ；<sup>304</sup> ；<sup>305</sup> ；<sup>306</sup> ；<sup>307</sup> ；<sup>308</sup> ；<sup>309</sup> ；<sup>310</sup> ；<sup>311</sup> ；<sup>312</sup> ；<sup>313</sup> ；<sup>314</sup> ；<sup>315</sup> ；<sup>316</sup> ；<sup>317</sup> ；<sup>318</sup> ；<sup>319</sup> ；<sup>320</sup> ；<sup>321</sup> ；<sup>322</sup> ；<sup>323</sup> ；<sup>324</sup> ；<sup>325</sup> ；<sup>326</sup> ；<sup>327</sup> ；<sup>328</sup> ；<sup>329</sup> ；<sup>330</sup> ；<sup>331</sup> ；<sup>332</sup> ；<sup>333</sup> ；<sup>334</sup> ；<sup>335</sup> ；<sup>336</sup> ；<sup>337</sup> ；<sup>338</sup> ；<sup>339</sup> ；<sup>340</sup> ；<sup>341</sup> ；<sup>342</sup> ；<sup>343</sup> ；<sup>344</sup> ；<sup>345</sup> ；<sup>346</sup> ；<sup>347</sup> ；<sup>348</sup> ；<sup>349</sup> ；<sup>350</sup> ；<sup>351</sup> ；<sup>352</sup> ；<sup>353</sup> ；<sup>354</sup> ；<sup>355</sup> ；<sup>356</sup> ；<sup>357</sup> ；<sup>358</sup> ；<sup>359</sup> ；<sup>360</sup> ；<sup>361</sup> ；<sup>362</sup> ；<sup>363</sup> ；<sup>364</sup> ；<sup>365</sup> ；<sup>366</sup> ；<sup>367</sup> ；<sup>368</sup> ；<sup>369</sup> ；<sup>370</sup> ；<sup>371</sup> ；<sup>372</sup> ；<sup>373</sup> ；<sup>374</sup> ；<sup>375</sup> ；<sup>376</sup> ；<sup>377</sup> ；<sup>378</sup> ；<sup>379</sup> ；<sup>380</sup> ；<sup>381</sup> ；<sup>382</sup> ；<sup>383</sup> ；<sup>384</sup> ；<sup>385</sup> ；<sup>386</sup> ；<sup>387</sup> ；<sup>388</sup> ；<sup>389</sup> ；<sup>390</sup> ；<sup>391</sup> ；<sup>392</sup> ；<sup>393</sup> ；<sup>394</sup> ；<sup>395</sup> ；<sup>396</sup> ；<sup>397</sup> ；<sup>398</sup> ；<sup>399</sup> ；<sup>400</sup> ；<sup>401</sup> ；<sup>402</sup> ；<sup>403</sup> ；<sup>404</sup> ；<sup>405</sup> ；<sup>406</sup> ；<sup>407</sup> ；<sup>408</sup> ；<sup>409</sup> ；<sup>410</sup> ；<sup>411</sup> ；<sup>412</sup> ；<sup>413</sup> ；<sup>414</sup> ；<sup>415</sup> ；<sup>416</sup> ；<sup>417</sup> ；<sup>418</sup> ；<sup>419</sup> ；<sup>420</sup> ；<sup>421</sup> ；<sup>422</sup> ；<sup>423</sup> ；<sup>424</sup> ；<sup>425</sup> ；<sup>426</sup> ；<sup>427</sup> ；<sup>428</sup> ；<sup>429</sup> ；<sup>430</sup> ；<sup>431</sup> ；<sup>432</sup> ；<sup>433</sup> ；<sup>434</sup> ；<sup>435</sup> ；<sup>436</sup> ；<sup>437</sup> ；<sup>438</sup> ；<sup>439</sup> ；<sup>440</sup> ；<sup>441</sup> ；<sup>442</sup> ；<sup>443</sup> ；<sup>444</sup> ；<sup>445</sup> ；<sup>446</sup> ；<sup>447</sup> ；<sup>448</sup> ；<sup>449</sup> ；<sup>450</sup> ；<sup>451</sup> ；<sup>452</sup> ；<sup>453</sup> ；<sup>454</sup> ；<sup>455</sup> ；<sup>456</sup> ；<sup>457</sup> ；<sup>458</sup> ；<sup>459</sup> ；<sup>460</sup> ；<sup>461</sup> ；<sup>462</sup> ；<sup>463</sup> ；<sup>464</sup> ；<sup>465</sup> ；<sup>466</sup> ；<sup>467</sup> ；<sup>468</sup> ；<sup>469</sup> ；<sup>470</sup> ；<sup>471</sup> ；<sup>472</sup> ；<sup>473</sup> ；<sup>474</sup> ；<sup>475</sup> ；<sup>476</sup> ；<sup>477</sup> ；<sup>478</sup> ；<sup>479</sup> ；<sup>480</sup> ；<sup>481</sup> ；<sup>482</sup> ；<sup>483</sup> ；<sup>484</sup> ；<sup>485</sup> ；<sup>486</sup> ；<sup>487</sup> ；<sup>488</sup> ；<sup>489</sup> ；<sup>490</sup> ；<sup>491</sup> ；<sup>492</sup> ；<sup>493</sup> ；<sup>494</sup> ；<sup>495</sup> ；<sup>496</sup> ；<sup>497</sup> ；<sup>498</sup> ；<sup>499</sup> ；<sup>500</sup> ；<sup>501</sup> ；<sup>502</sup> ；<sup>503</sup> ；<sup>504</sup> ；<sup>505</sup> ；<sup>506</sup> ；<sup>507</sup> ；<sup>508</sup> ；<sup>509</sup> ；<sup>510</sup> ；<sup>511</sup> ；<sup>512</sup> ；<sup>513</sup> ；<sup>514</sup> ；<sup>515</sup> ；<sup>516</sup> ；<sup>517</sup> ；<sup>518</sup> ；<sup>519</sup> ；<sup>520</sup> ；<sup>521</sup> ；<sup>522</sup> ；<sup>523</sup> ；<sup>524</sup> ；<sup>525</sup> ；<sup>526</sup> ；<sup>527</sup> ；<sup>528</sup> ；<sup>529</sup> ；<sup>530</sup> ；<sup>531</sup> ；<sup>532</sup> ；<sup>533</sup> ；<sup>534</sup> ；<sup>535</sup> ；<sup>536</sup> ；<sup>537</sup> ；<sup>538</sup> ；<sup>539</sup> ；<sup>540</sup> ；<sup>541</sup> ；<sup>542</sup> ；<sup>543</sup> ；<sup>544</sup> ；<sup>545</sup> ；<sup>546</sup> ；<sup>547</sup> ；<sup>548</sup> ；<sup>549</sup> ；<sup>550</sup> ；<sup>551</sup> ；<sup>552</sup> ；<sup>553</sup> ；<sup>554</sup> ；<sup>555</sup> ；<sup>556</sup> ；<sup>557</sup> ；<sup>558</sup> ；<sup>559</sup> ；<sup>560</sup> ；<sup>561</sup> ；<sup>562</sup> ；<sup>563</sup> ；<sup>564</sup> ；<sup>565</sup> ；<sup>566</sup> ；<sup>567</sup> ；<sup>568</sup> ；<sup>569</sup> ；<sup>570</sup> ；<sup>571</sup> ；<sup>572</sup> ；<sup>573</sup> ；<sup>574</sup> ；<sup>575</sup> ；<sup>576</sup> ；<sup>577</sup> ；<sup>578</sup> ；<sup>579</sup> ；<sup>580</sup> ；<sup>581</sup> ；<sup>582</sup> ；<sup>583</sup> ；<sup>584</sup> ；<sup>585</sup> ；<sup>586</sup> ；<sup>587</sup> ；<sup>588</sup> ；<sup>589</sup> ；<sup>590</sup> ；<sup>591</sup> ；<sup>592</sup> ；<sup>593</sup> ；<sup>594</sup> ；<sup>595</sup> ；<sup>596</sup> ；<sup>597</sup> ；<sup>598</sup> ；<sup>599</sup> ；<sup>600</sup> ；<sup>601</sup> ；<sup>602</sup> ；<sup>603</sup> ；<sup>604</sup> ；<sup>605</sup> ；<sup>606</sup> ；<sup>607</sup> ；<sup>608</sup> ；<sup>609</sup> ；<sup>610</sup> ；<sup>611</sup> ；<sup>612</sup> ；<sup>613</sup> ；<sup>614</sup> ；<sup>615</sup> ；<sup>616</sup> ；<sup>617</sup> ；<sup>618</sup> ；<sup>619</sup> ；<sup>620</sup> ；<sup>621</sup> ；<sup>622</sup> ；<sup>623</sup> ；<sup>624</sup> ；<sup>625</sup> ；<sup>626</sup> ；<sup>627</sup> ；<sup>628</sup> ；<sup>629</sup> ；<sup>630</sup> ；<sup>631</sup> ；<sup>632</sup> ；<sup>633</sup> ；<sup>634</sup> ；<sup>635</sup> ；<sup>636</sup> ；<sup>637</sup> ；<sup>638</sup> ；<sup>639</sup> ；<sup>640</sup> ；<sup>641</sup> ；<sup>642</sup> ；<sup>643</sup> ；<sup>644</sup> ；<sup>645</sup> ；<sup>646</sup> ；<sup>647</sup> ；<sup>648</sup> ；<sup>649</sup> ；<sup>650</sup> ；<sup>651</sup> ；<sup>652</sup> ；<sup>653</sup> ；<sup>654</sup> ；<sup>655</sup> ；<sup>656</sup> ；<sup>657</sup> ；<sup>658</sup> ；<sup>659</sup> ；<sup>660</sup> ；<sup>661</sup> ；<sup>662</sup> ；<sup>663</sup> ；<sup>664</sup> ；<sup>665</sup> ；<sup>666</sup> ；<sup>667</sup> ；<sup>668</sup> ；<sup>669</sup> ；<sup>670</sup> ；<sup>671</sup> ；<sup>672</sup> ；<sup>673</sup> ；<sup>674</sup> ；<sup>675</sup> ；<sup>676</sup> ；<sup>677</sup> ；<sup>678</sup> ；<sup>679</sup> ；<sup>680</sup> ；<sup>681</sup> ；<sup>682</sup> ；<sup>683</sup> ；<sup>684</sup> ；<sup>685</sup> ；<sup>686</sup> ；<sup>687</sup> ；<sup>688</sup> ；<sup>689</sup> ；<sup>690</sup> ；<sup>691</sup> ；<sup>692</sup> ；<sup>693</sup> ；<sup>694</sup> ；<sup>695</sup> ；<sup>696</sup> ；<sup>697</sup> ；<sup>698</sup> ；<sup>699</sup> ；<sup>700</sup> ；<sup>701</sup> ；<sup>702</sup> ；<sup>703</sup> ；<sup>704</sup> ；<sup>705</sup> ；<sup>706</sup> ；<sup>707</sup> ；<sup>708</sup> ；<sup>709</sup> ；<sup>710</sup> ；<sup>711</sup> ；<sup>712</sup> ；<sup>713</sup> ；<sup>714</sup> ；<sup>715</sup> ；<sup>716</sup> ；<sup>717</sup> ；<sup>718</sup> ；<sup>719</sup> ；<sup>720</sup> ；<sup>721</sup> ；<sup>722</sup> ；<sup>723</sup> ；<sup>724</sup> ；<sup>725</sup> ；<sup>726</sup> ；<sup>727</sup> ；<sup>728</sup> ；<sup>729</sup> ；<sup>730</sup> ；<sup>731</sup> ；<sup>732</sup> ；<sup>733</sup> ；<sup>734</sup> ；<sup>735</sup> ；<sup>736</sup> ；<sup>737</sup> ；<sup>738</sup> ；<sup>739</sup> ；<sup>740</sup> ；<sup>741</sup> ；<sup>742</sup> ；<sup>743</sup> ；<sup>744</sup> ；<sup>745</sup> ；<sup>746</sup> ；<sup>747</sup> ；<sup>748</sup> ；<sup>749</sup> ；<sup>750</sup> ；<sup>751</sup> ；<sup>752</sup> ；<sup>753</sup> ；<sup>754</sup> ；<sup>755</sup> ；<sup>756</sup> ；<sup>757</sup> ；<sup>758</sup> ；<sup>759</sup> ；<sup>760</sup> ；<sup>761</sup> ；<sup>762</sup> ；<sup>763</sup> ；<sup>764</sup> ；<sup>765</sup> ；<sup>766</sup> ；<sup>767</sup> ；<sup>768</sup> ；<sup>769</sup> ；<sup>770</sup> ；<sup>771</sup> ；<sup>772</sup> ；<sup>773</sup> ；<sup>774</sup> ；<sup>775</sup> ；<sup>776</sup> ；<sup>777</sup> ；<sup>778</sup> ；<sup>779</sup> ；<sup>780</sup> ；<sup>781</sup> ；<sup>782</sup> ；<sup>783</sup> ；<sup>784</sup> ；<sup>785</sup> ；<sup>786</sup> ；<sup>787</sup> ；<sup>788</sup> ；<sup>789</sup> ；<sup>790</sup> ；<sup>791</sup> ；<sup>792</sup> ；<sup>793</sup> ；<sup>794</sup> ；<sup>795</sup> ；<sup>796</sup> ；<sup>797</sup> ；<sup>798</sup> ；<sup>799</sup> ；<sup>800</sup> ；<sup>801</sup> ；<sup>802</sup> ；<sup>803</sup> ；<sup>804</sup> ；<sup>805</sup> ；<sup>806</sup> ；<sup>807</sup> ；<sup>808</sup> ；<sup>809</sup> ；<sup>810</sup> ；<sup>811</sup> ；<sup>812</sup> ；<sup>813</sup> ；<sup>814</sup> ；<sup>815</sup> ；<sup>816</sup> ；<sup>817</sup> ；<sup>818</sup> ；<sup>819</sup> ；<sup>820</sup> ；<sup>821</sup> ；<sup>822</sup> ；<sup>823</sup> ；<sup>824</sup> ；<sup>825</sup> ；<sup>826</sup> ；<sup>827</sup> ；<sup>828</sup> ；<sup>829</sup> ；<sup>830</sup> ；<sup>831</sup> ；<sup>832</sup> ；<sup>833</sup> ；<sup>834</sup> ；<sup>835</sup> ；<sup>836</sup> ；<sup>837</sup> ；<sup>838</sup> ；<sup>839</sup> ；<sup>840</sup> ；<sup>841</sup> ；<sup>842</sup> ；<sup>843</sup> ；<sup>844</sup> ；<sup>845</sup> ；<sup>846</sup> ；<sup>847</sup> ；<sup>848</sup> ；<sup>849</sup> ；<sup>850</sup> ；<sup>851</sup> ；<sup>852</sup> ；<sup>853</sup> ；<sup>854</sup> ；<sup>855</sup> ；<sup>856</sup> ；<sup>857</sup> ；<sup>858</sup> ；<sup>859</sup> ；<sup>860</sup> ；<sup>861</sup> ；<sup>862</sup> ；<sup>863</sup> ；<sup>864</sup> ；<sup>865</sup> ；<sup>866</sup> ；<sup>867</sup> ；<sup>868</sup> ；<sup>869</sup> ；<sup>870</sup> ；<sup>871</sup> ；<sup>872</sup> ；<sup>873</sup> ；<sup>874</sup> ；<sup>875</sup> ；<sup>876</sup> ；<sup>877</sup> ；<sup>878</sup> ；<sup>879</sup> ；<sup>880</sup> ；<sup>881</sup> ；<sup>882</sup> ；<sup>883</sup> ；<sup>884</sup> ；<sup>885</sup> ；<sup>886</sup> ；<sup>887</sup> ；<sup>888</sup> ；<sup>889</sup> ；<sup>890</sup> ；<sup>891</sup> ；<sup>892</sup> ；<sup>893</sup> ；<sup>894</sup> ；<sup>895</sup> ；<sup>896</sup> ；<sup>897</sup> ；<sup>898</sup> ；<sup>899</sup> ；<sup>900</sup> ；<sup>901</sup> ；<sup>902</sup> ；<sup>903</sup> ；<sup>904</sup> ；<sup>905</sup> ；<sup>906</sup> ；<sup>907</sup> ；<sup>908</sup> ；<sup>909</sup> ；<sup>910</sup> ；<sup>911</sup> ；<sup>912</sup> ；<sup>913</sup> ；<sup>914</sup> ；<sup>915</sup> ；<sup>916</sup> ；<sup>917</sup> ；<sup>918</sup> ；<sup>919</sup> ；<sup>920</sup> ；<sup>921</sup> ；<sup>922</sup> ；<sup>923</sup> ；<sup>924</sup> ；<sup>925</sup> ；<sup>926</sup> ；<sup>927</sup> ；<sup>928</sup> ；<sup>929</sup> ；<sup>930</sup> ；<sup>931</sup> ；<sup>932</sup> ；<sup>933</sup> ；<sup>934</sup> ；<sup>935</sup> ；<sup>936</sup> ；<sup>937</sup> ；<sup>938</sup> ；<sup>939</sup> ；<sup>940</sup> ；<sup>941</sup> ；<sup>942</sup> ；<sup>943</sup> ；<sup>944</sup> ；<sup>945</sup> ；<sup>946</sup> ；<sup>947</sup> ；<sup>948</sup> ；<sup>949</sup> ；<sup>950</sup> ；<sup>951</sup> ；<sup>952</sup> ；<sup>953</sup> ；<sup>954</sup> ；<sup>955</sup> ；<sup>956</sup> ；<sup>957</sup> ；<sup>958</sup> ；<sup>959</sup> ；<sup>960</sup> ；<sup>961</sup> ；<sup>962</sup> ；<sup>963</sup> ；<sup>964</sup> ；<sup>965</sup> ；<sup>966</sup> ；<sup>967</sup> ；<sup>968</sup> ；<sup>969</sup> ；<sup>970</sup> ；<sup>971</sup> ；<sup>972</sup> ；<sup>973</sup> ；<sup>974</sup> ；<sup>975</sup> ；<sup>976</sup> ；<sup>977</sup> ；<sup>978</sup> ；<sup>979</sup> ；<sup>980</sup> ；<sup>981</sup> ；<sup>982</sup> ；<sup>983</sup> ；<sup>984</sup> ；<sup>985</sup> ；<sup>986</sup> ；<sup>987</sup> ；<sup>988</sup> ；<sup>989</sup> ；<sup>990</sup> ；<sup>991</sup> ；<sup>992</sup> ；<sup>993</sup> ；<sup>994</sup> ；<sup>995</sup> ；<sup>996</sup> ；<sup>997</sup> ；<sup>998</sup> ；<sup>999</sup> ；<sup>1000</sup> ；<sup>1001</sup> ；<sup>1002</sup> ；<sup>1003</sup> ；<sup>1004</sup> ；<sup>1005</sup> ；<sup>1006</sup> ；<sup>1007</sup> ；<sup>1008</sup> ；<sup>1009</sup> ；<sup>1010</sup> ；<sup>1011</sup> ；<sup>1012</sup> ；<sup>1013</sup> ；<sup>1014</sup> ；<sup>1015</sup> ；<sup>1016</sup> ；<sup>1017</sup> ；<sup>1018</sup> ；<sup>1019</sup> ；<sup>1020</sup> ；<sup>1021</sup> ；<sup>1022</sup> ；<sup>1023</sup> ；<sup>1024</sup> ；<sup>1025</sup> ；<sup>1026</sup> ；<sup>1027</sup> ；<sup>1028</sup> ；<sup>1029</sup> ；<sup>1030</sup> ；<sup>1031</sup> ；<sup>1032</sup> ；<sup>1033</sup> ；<sup>1034</sup> ；<sup>1035</sup> ；<sup>1036</sup> ；<sup>1037</sup> ；<sup>1038</sup> ；<sup>1039</sup> ；<sup>1040</sup> ；<sup>1041</sup> ；<sup>1042</sup> ；<sup>1043</sup> ；<sup>1044</sup> ；<sup>1045</sup> ；<sup>1046</sup> ；<sup>1047</sup> ；<sup>1048</sup> ；<sup>1049</sup> ；<sup>1050</sup> ；<sup>1051</sup> ；<sup>1052</sup> ；<sup>1053</sup> ；<sup>1054</sup> ；<sup>1055</sup> ；<sup>1056</sup> ；<sup>1057</sup> ；<sup>1058</sup> ；<sup>1059</sup> ；<sup>1060</sup> ；<sup>1061</sup> ；<sup>1062</sup> ；<sup>1063</sup> ；<sup>1064</sup> ；<sup>1065</sup> ；<sup>1066</sup> ；<sup>1067</sup> ；<sup>1068</sup> ；<sup>1069</sup> ；<sup>1070</sup> ；<sup>1071</sup> ；<sup>1072</sup> ；<sup>1073</sup> ；<sup>1074</sup> ；<sup>1075</sup> ；<sup>1076</sup> ；<sup>1077</sup> ；<sup>1078</sup> ；<sup>1079</sup> ；<sup>1080</sup> ；<sup>1081</sup> ；<sup>1082</sup> ；<sup>1083</sup> ；<sup>1084</sup> ；<sup>1085</sup> ；<sup>1086</sup> ；<sup>1087</sup>

○おろ降りこめんと為すこともさうある。一茶の  
句集を翻し拾ひよみをする。一茶が江戸住  
の句は都のさきを描して大に真をのぞく。  
炭まじり鋸引や東住居し今もさうさう  
さう。江戸住や抜出たあをやらうつし又  
らく門、打ぬも終るう江戸住居し今もさう  
のあに傍を拂ふ、心も力行ぬもうちあも終  
かある。世もあんに無地に解さる門の雪、都つ  
●珠は北國あう、花見人と改せんはしく  
昔の江戸が大名の政慮むやうさうさう  
し、何れの花見や服さうさうと云くか  
まうや將軍袂のうらやと云く、持てこ  
の

さう、珠の咲けりし何れも北の世さうさう、  
らく、露の世の露の中さうさう、今も世  
の中、雲華氣を漲り、さうさう境に入り  
ハ珠は娘ハしい、露の世、何れもさうさう  
をひさくさう。中着の殻か流かさう、又涼さ  
四の脚大哉、さう北感さうさう、都つさう  
何れも北感さう。都門に住し、の不愉快、自  
由境過さう、慰めさう、一茶が東海道、都つ  
心は、大名を眺めさうさう、炬燵かさう、流石の  
店先さう、炬燵さうさう、北感さう、大名の  
節、の権柄、さうさう復讐もさうさう、都つ  
又柱を人さうさう、さうさう折り曲つてさうさう

山の菊曲  
さきむかし  
うぬき

本然の質を損ハぬハさうぬ。大菊よ縄目の厚  
を思ハすや」である。さうある。菊ハ女  
ル白然である。我菊や古き比の方、つんとい  
て「無事と寝て笑ハけり名る」菊ハ保しこ  
んじ「都門は古くはさうぬ。我柳志びき」  
りけり」志だんぬハ都門の管敷を交けぬ。つ  
呼「是れ心へさけつや、今の世や花見かしら  
小盗人」大方の祿望人や冬ハ新ハ今の世ハ  
しことである。人里く出ハ清みハ無かりけり  
作「...」菊ハ古くは枝ハけり。都門ハあ  
を不浄ハ... 都門ハあらわさるを破壊  
導く都人士ハ書意「骨董の道」楽とやり願物

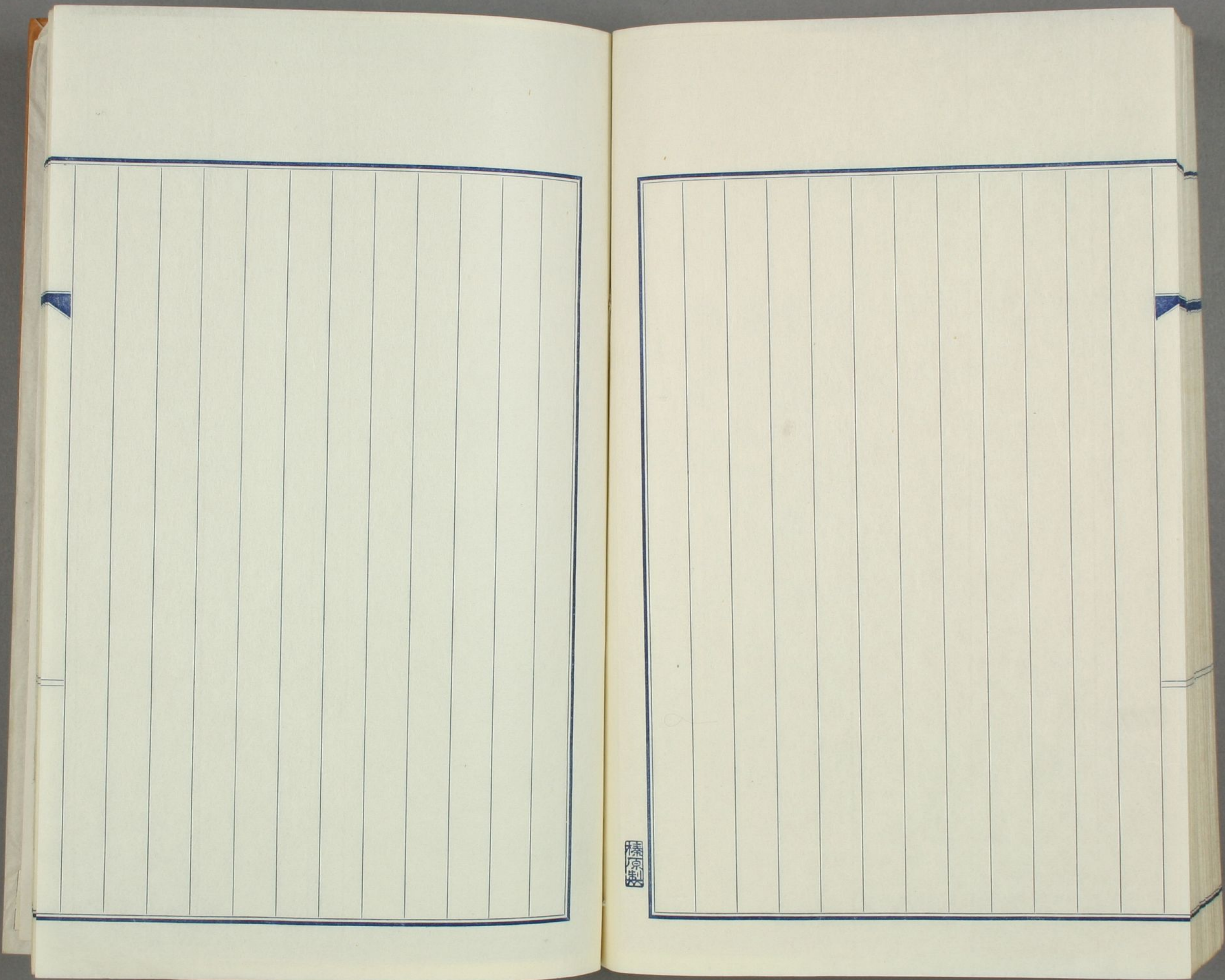


をつかんでも覚らさぬ。村おもぬぬりルも去つくる  
リ「用心せぬハさうぬ。都人士ハ田舎の百姓の芳共  
を知らぬ、あさき...」汗の玉ハ福の雨ハ一粒  
の末七汗を流し比結果と... 田の人  
の見も七転ハ夏生ハ... 田の人を心せ拜ハ書  
比「田の人ハ却免侯く書ハ録ハや」(慟)都人士ハ  
心あると果ハ... 許  
○高は一葉の匂ハ秋夜を覚ゆる、このを逸つて  
後ハ逸つておさんハ左ハあさきこのか  
人ハ武士表ハ粒むハ唐ハく  
山ハ秋のさう折けり大生  
橋涼ハ張らぬハ此書

天のくもりも降つたやうな極こうき  
粘出しそよげ荒れゆく雨の  
峯をさすか刺さる一走り雪  
空かけり増い旅庵も迹の村  
門の雪汚れぬ先にととこき一よ  
桐の木やこきハキ散つてつんと主  
へ人我の物ゝ家の涼一さよ  
つけよ中時秋かすかすに花られうか  
ちあゝの松をけりし納豆汁  
我つや世をやどすももるき  
雨降るや雨よから楳のちやてもるき  
圓扇の柄をぬくも花の代りこふ

行儀は川月と佛とおらか暮夏  
放ん登る春一すぬすぬと花うけ  
風鳴人地口は南無河津燈佛  
昔の邊渡や虫も鈴あはれをおる  
花の月とらんふんかんのうき世が





1

以下  
5 丁  
白紙

今般ノ出来事ハ遺憾至極ナルモ元來現在ノ神宮外苑野  
球場ハ狹隘ニシテ一般ノ希望ヲ充タス能ハズ早慶野球入場券  
ノ分配ハ昨年警察署ガ販賣監督ヲ持テ餘シ今春又野球  
聯盟ニ於テ各案ヲ×結果最後ノ公筋策トシテ今回限リ早  
慶西大ニ野球部ニ折半シ大學ハ其依頼ニヨリ分配ノ任ニ當  
リタルモノニシテ西野球部ニ聯盟ヨリ交附シタルモノハ二回ヲ  
通シ内野券七ノ八百枚外野券一萬六千八百枚ニシテ其ノ中  
應援團又体育各部ニ交附スベシ内野券三千八百枚ヲ差  
引タル残り四千枚ヲ野球部又箱門クラブト大學トニ折半シ  
外野券ノ中学生券一萬枚ヲ差引タル残り六千八百枚モ亦  
野球部又箱門クラブト大學トニ折半シタルモノナリ  
即チ學生ニ分配セラルモノハ二回ヲ通シ内野券三千八百枚外  
野券一萬枚ニシテ本大學ハ慶應義塾ニ比シ學生數多數ナ  
ルモ尚且ツ一枚ツハ九分ニ普及スベシ又大學ノ受取リ分  
内野券二千枚外野券三千四百枚合計五千四百枚ハ之レヲ八  
千ノ校友中熱心ナル希望者ニ可及的分配スルハ不足ニ非  
ズ断シテ過大ト云フベカラズ然ルニ危険思想系統ニ屬スル一  
ノ徒ハ内外策應ニテ盛行言蜚語ヲ放チテ學生ヲ煽動シ  
不法ニモ校庭ニ集合シ入場券不買同盟學生ノ自治權獲  
得ノ投票料三割値下野球部應援拒絕選手出場禁止等ノ  
決議ヲ為シ計畫的ニ恩賜記念館ニ圍入レテ狼藉スル醜態ヲ  
演シタルハ遺憾ノ極ニシテ大學ハ特ニ一般學生ニ對シ十七日ハ公  
休日ナレバ十六日ノ午後事務所閉鎖時刻ニテニ受取リカヲ勸ム  
ル告知ヲ為シタルモノ不買同盟ニ背ク學生ニハ制裁ヲ加フルニ絲  
シテ脅迫シタルガ為メ希望者ノ由出ナカリシガ故ニ大學ハ遺  
憾ナカラ既ニ私費賣済トナリタル残部一萬八千枚ノ入場券ヲ  
野球部ニ全部返還スルノ已ムナキニ至レリ  
而シテ學生ハ聯合委員會ナルモノヲ組織シ學生ホールノ使用  
ノ許シタルニ午前十時ヨリ成規ノ刻限ヲ越ヘテ午後十一時過ニ  
至ルマデ連續會議ヲナシ某間チ少イ不穩ノ行動モアリテ遠ニ  
戸塚警察署署ヨリ數十名ノ警官ノク急派トナリ最後ニ署長ノ

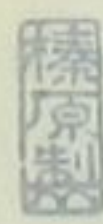
説諭ニヨリ翌日ノ會合ヲ約シテ散會シタル狀況ナルガ故ニ深夜理事會ハ十八日ノ臨時休業ヲ決シタルガ同日學生ハ午前十時ヨリ各部ニ會合シ更ニ午前十時ヨリ再ビ學生ホールニ聯合委員會ナルモノヲ開キ午前十時頃ニ至リテ決議ヲナシ代表委員ノ手ニヨリテ其決議ヲ十九日正午田中常務理事ニ提出シ田中理事ハ之ヲ受取リ何レ理事會ニ諮ルベキコトヲ答ヘタリ決議文ノ要領左ノ如シ(一)全早稲田聯合學生委員會ヲ發認セヨ(二)體育會ヲ否認シ且即時解散ヲ命セヨ(三)今回ノ問題ニツキ學校當局ノ陳謝ヲ志ム(四)十八日ノ臨時休業ノ理由ヲ明ニセヨ(五)不當處分絶對反對

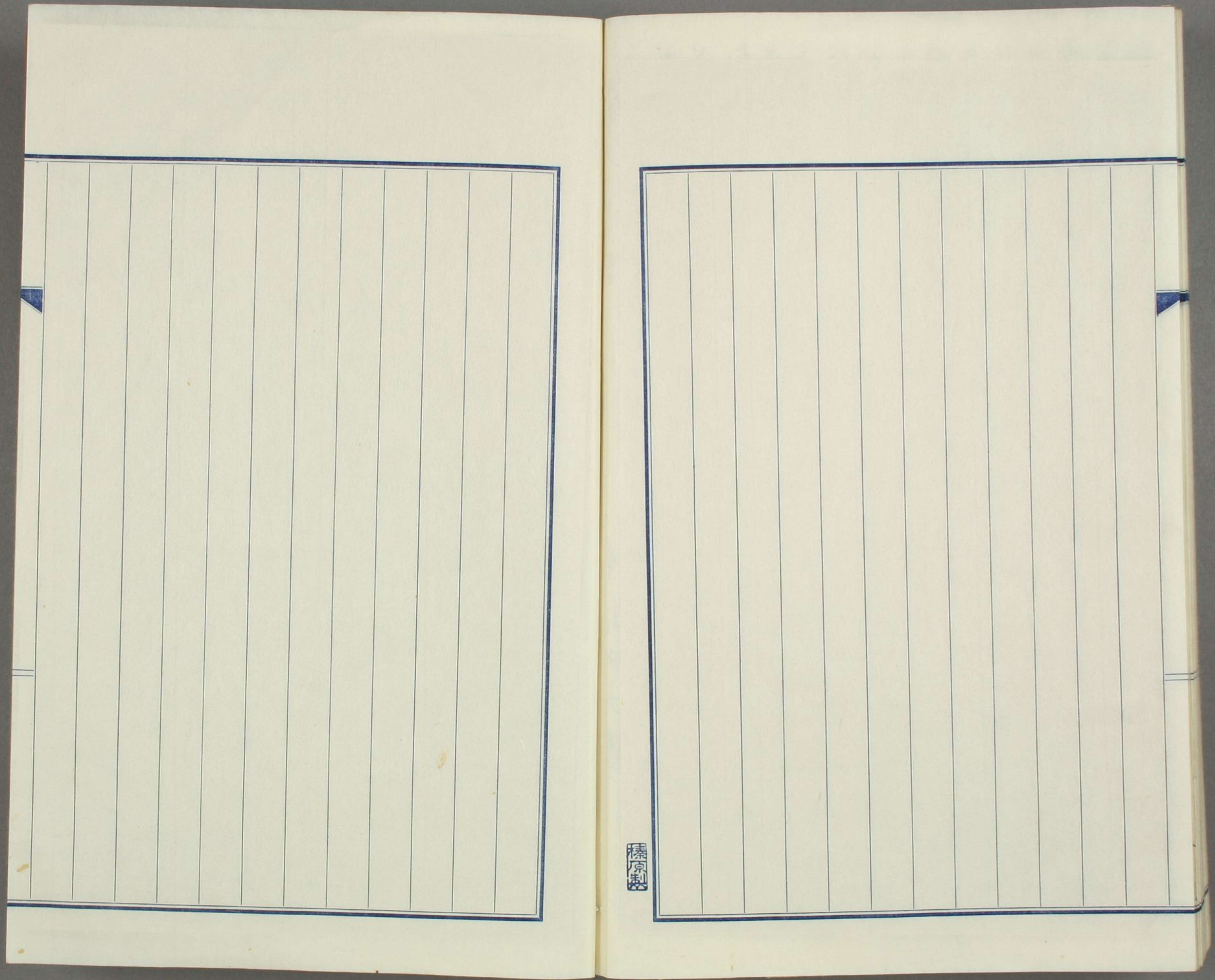
之ト同時ニ大學ニ於テハ十九日午前九時急遽學部長及附屬學校長ヲ召集テ保々各理事立會シ田中常務理事ヨリ今日マテノ經過ヲ詳細ニ報告シ尚木鳩首善後策ヲ合議セル結果至急各部ニ於テ教授會ヲ開會シ其協力を得テ學生委員ヲ始メ一般學生ノ説諭ニ努力スルコトヲ申合セテ散會シ直ニ其手續ヲ取リタリ

右概要不取敢御報告申上候

昭和五年十月十九日

早稲田大學





東京製



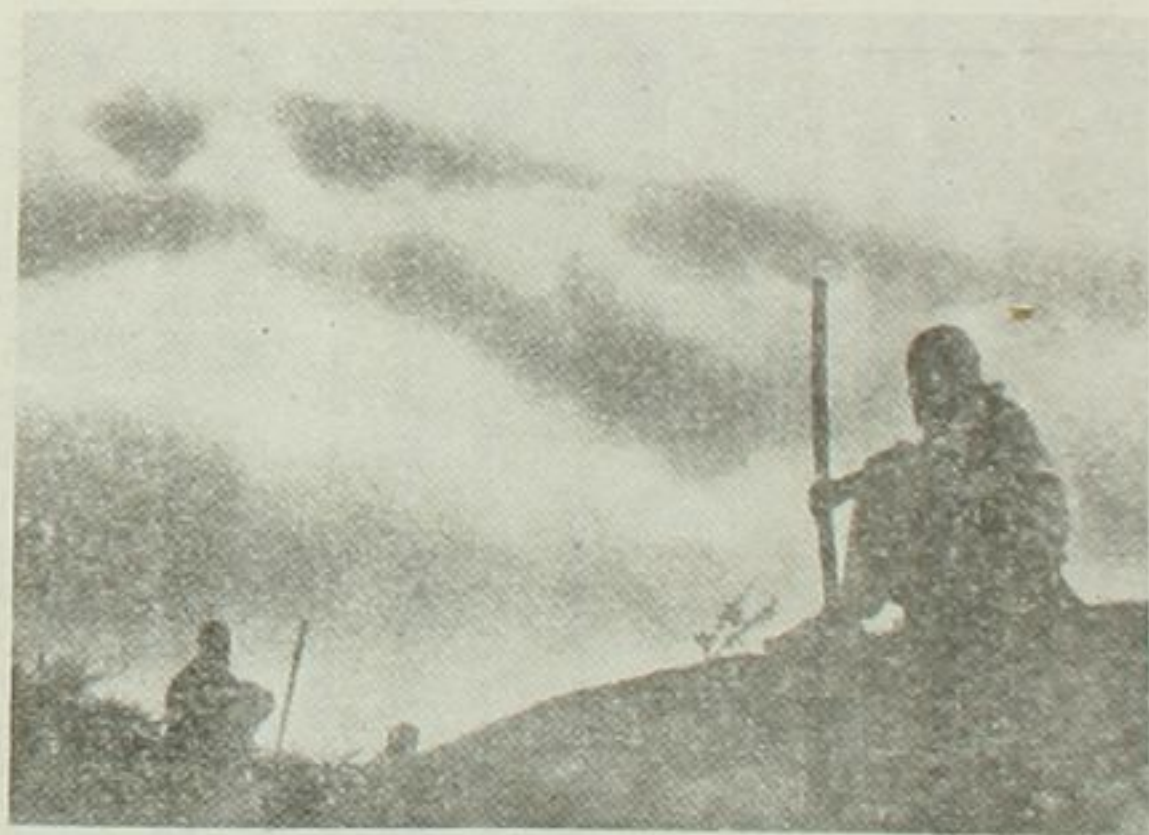
ソヴェート・ウオストロクキノ映画  
ウイクター・トウリン氏 監督

イ・エ・イ・エ・ア・ロン氏 助監督  
イ・エ・エ・ヌ・スラウインスキー氏 南方撮影  
ベ・ウ・エ・フランツイン氏 北方撮影

## ブシクルウト

●梗概・これは鐵道の物語です。トルキスタンといふ地方は中央アジアの寶庫です。その住民は此の何百年といふもの他の地方と交通をせず暮して來ました。彼等は機械を知りません。自動車も、ラヂオもそんなものの名を耳にしたこともありません。

——これがトルキスタンの悲劇です——住民達は燃える様な太陽の下で、焦げくさい地面をせつせと耕します。けれど大地は乾き切つてゐます。雨が降らなくては、山の方から水が流れて來なくては、水糞は底まで乾枯びてゐます。水車も死んだ様です。百姓達は待ちます。ひたすらに雨を祈ります。しかし干割れた平野の北の方の山脈の高い嶺々では冬の間積つた深雪がきらめいて夏の日の光に溶け初めました。初めは小さい水の一滴ですがもう一寸した流れになつてゐます。やがて岩を飛び越え勢よく山腹を駆け下ります。から／＼に乾いた水路に泡立ちながら注ぎ込みます。



水だぞ！ 水だぞ！  
待ち疲れてゐた百姓達は急に蘇つた様に、氣よく自分達の畑に灌漑しに飛び出します。  
けれどまた足りないのです。その水は穀物の畑にやつとでした。綿は乾いたまゝです。百姓達はまた坐つたまゝ

標原製



雨を祈るより外によい思案も浮びません。——トルキスタンにパンを送れ！中央アジアへ穀物を運べ！——そうすればその畑はロシア中に綿を恵んでくれる——さうすれば秋の収穫時には綿の畑が豊穡な雪の様に大地を蔽ふ。折から、黒ひがけなくも霧がかゝつ

て参ります。  
風が吹き初め丈の低い叢がざわ／＼と賑わいます。砂粒が舞ひ、龍巻となつ砂漠を走り廻ります。砂嵐です。折角丹精した綿は残らず吹き飛んでしまひます。やがて、それもすぐ鎮まるともとの様な静寂。  
こゝはシベリアです。雪の曠野です。極は穀物を満載してゐます。豊澤な田畑が作物を獲らせてそれを運搬する汽車が來るのを待つてゐるのです。道を拓け！ 線路を開け！ と南を向いた汽車は一齊に汽笛をならします。  
× ×  
埃にまみれた自動車が大草原を横切つて遙々やつて來ました。よその國から來た異様な人達が妙な機械を澤山持つて來て仕事を始めました。  
延長千四百四拾五キロの軌道がシベリアとトルキスタンとを連結することになりました。トルクシブ線です。

工事は炎熱と埃とに閉まれた苦しい試練です。けれど人間の努力と機械とは少しもひるむことなしに頑固な仕事を續けて行きます。軌道が少しづつ毎日延びて行くのです。  
暫らくすると又新しい障害に行き當りました。幅の廣い川の流れが途を塞いで居ます。零下四拾二度の酷寒の中で鐵橋が築造されなければなりません。大自然的な冷酷な威力に對する英雄的な闘争でした。  
北から南へ、南から北へ。  
鐵道と同時にトルクシブ線と一緒に文化が一步一步大草原の奥地へ這り込むのです。  
トルクシブは一九三〇年には開通させなければなりません。トルキスタンは間もなくその莫大な寶庫を世界に向つて開くでせう。  
トルクシブは一九三〇年に完成しなければならぬのです。

柳の収穫の盛んなる光景もとの駱駝の地は  
 運搬の仕方が異なる(運搬の仕方の異なる)  
 変換の仕方をあらわしてある。映画の  
 ためのあんばいこそある。我がある。此の映画  
 があまの大海に親(白)やんてあつとやんが  
 エロティックの映画の飽きして、さうもあつて  
 入





